

茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第35集

泉坂下遺跡 VII

— 保存整備事業に伴う第6次確認調査報告 —

2021

常陸大宮市教育委員会



1. 第32トレンチ遺物出土状況(東方向から)



1. 調査区全景



2. 第33トレンチ完掘状況(南方向から)



1. 第32トレンチ全景



2. D6d5区遺物出土状況(南方向から)



3. D6e5区遺物出土状況(南方向から)



4. D6f5区遺物出土状況(南方向から)



5. D6g5区遺物出土状況(南方向から)



6. D6h5区遺物出土状況(南方向から)



7. D6f5区遺物出土状況近景(南東方向から)



1. 第32トレンチ北壁サブトレ遺物出土状況(1)



2. 32T-№394(第24図8)



3. 32T-№456(第40図3)



4. 32T-№380他(第22図3)



5. 32T-№613(第22図1)



6. 第32トレンチ北壁サブトレ遺物出土状況(2)



1. 注口土器とメノウ礫の集積



2. メノウ礫



3. 32T-No729 他 (第20図12)



4. 32T-No484 他・No483 (第20図3・第41図2)



5. 32T-No695・No746 (第47図1・第51図13)



6. 32T-No643 (第51図12)



7. 32T-No565・No569 他 (第22図2・4)



8. 灰と焼土の堆積 (第9・10層)



1. 第220号土坑の土器1～4・6・7出土状況(西方向から)



2. 第220号土坑の輪郭の推定(南西方向から)



3. 土器12等の破片の出土状況(西方向から)



4. 土坑の堆積土層断面(北方向から)



5. 土器5と土器7(南西方向から)



1. 第220号土坑の鉢型土器と蓋形土器



2. 第220号土坑出土土器1・3



1. 第220号土坑出土土器2・4・5～7

(縮尺1/3)



2. 第32・33トレンチ出土土器

(縮尺1/2)



1. 第32トレンチ出土石棒

(縮尺1/2)



1. 第33トレンチ出土石棒



1. 第32トレンチ出土刮器(擦切具)

(縮尺1/2)



2. 第32・33トレンチ出土磨製石斧未完成品・礫斧

(縮尺1/3)



1. 第32・33トレンチ出土石鏃

(原寸)



1. 第32トレンチ出土土器

(縮尺約1/3)



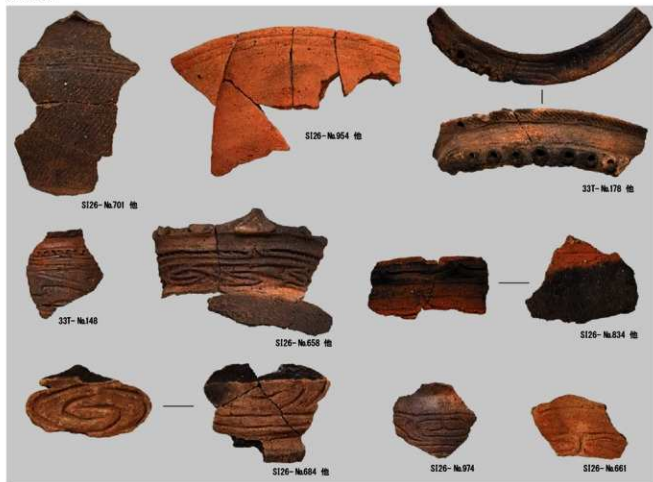
1. 第32トレンチ出土土器 (2)

(縮尺約1/3)



1. 第32トレンチ出土土器 (3)

(縮尺約1/3)



1. 第33トレンチ出土土器

(縮尺約1/3)



2. 第33トレンチ出土土製品



3. 第33トレンチ出土石製品



4. 第33トレンチ出土骨角器

(原寸)

5. ハチの巣

6. 赤色顔料付着の磨石

ごあいさつ

常陸大宮市は茨城県北西部に位置し、県都水戸市から北へ約20kmの、人口約3万9千人の市です。

市域の北側には八溝・久慈山系からなる山地が連なり、南西端を那珂川が、東側を南北に縦断する久慈川が流れる景勝の地です。また、市域の中央には久慈川支流の玉川と那珂川支流の緒川が南北に流れ、高度に応じた緑豊かな丘陵・台地・低地を形成し、原始・古代からの重要な遺跡が多く残されています。

昭和55年頃、久慈川右岸の泉地区字坂下で、菊池榮一氏(故人)が転居後の宅地を水田として整地する際に偶然2個の弥生土器を発見し、大宮町歴史民俗資料館(当時)に寄贈されました。このことを発端として行われた平成18年の有志による学術調査によって再葬墓が確認されるとともに国内最大の人面付壺形土器を含む多くの遺物が出土しました。

その後、市に調査は引き継がれ、平成24年度から平成28年度まで4次にわたる確認調査を実施してまいりました。

それらの成果により、当遺跡は平成29年9月に学術調査と確認調査で出土した、人面付壺形土器をはじめとする弥生時代再葬墓出土遺物が国の重要文化財に指定され、同年10月には当遺跡が国史跡に指定され、次の段階である史跡整備に向けた調査に進むこととなりました。

保存委員会も保存活用整備検討委員会と名称を変更し、人員も拡充して、体制を整え、再葬墓が営まれる前段階の社会の解明のため、縄文時代晩期の集落に焦点を当てた確認調査を計画し、平成30年度に第5次、令和元年度に第6次の調査を実施いたしました。このたびの報告書は、令和元年6月か7月にかけて実施した第6次調査の成果をまとめたものです。泉坂下遺跡の重要性を世に伝えるとともに、これからの整備計画の基本資料として活用されるものと固く信じております。

最後になりますが、発掘調査にあたりご指導いただきました文化庁文化財第二課、茨城県教育庁総務企画部文化課、泉坂下遺跡保存活用整備検討委員の皆様、全般にわたりご協力いただきました地元の皆様及びその他御指導・御協力いただいた関係各位に衷心より深く感謝申し上げます。

令和3年3月

常陸大宮市教育委員会
教育長 茅根 正憲

例 言

- 1 本書は、国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付を受けて、常陸大宮市教育委員会が実施した、泉坂下遺跡の第6次確認調査の報告書である。
- 2 この調査は、泉坂下遺跡の保存活用計画作成及び整備に向けて必要な資料を得ることを目的とした確認調査である。今回は6次計画の確認調査の第6次調査であり、再葬墓遺跡の形成に縄文時代晩期の集落跡がどのように関わるのか、またその上層にある弥生時代の痕跡を調査することを主たる目的とする。調査対象面積は66㎡、実際の調査面積は60㎡である。

- 3 発掘調査及び整理期間は以下のとおりである。

発掘調査 2019(令和元年)年6月1日～同年7月31日

整理作業 2019(令和元年)年7月1日～2021(令和3年)年3月1日

- 4 発掘調査は、常陸大宮市教育委員会文化スポーツ課の中林香澄、萩野谷悟、鈴木素行が担当した。調査に関する市教育委員会の組織は以下のとおりである。

【2019(令和元)年度】茅根正憲(教育長)、大町 隆(教育部長)、皆川嗣郎(次長兼文化スポーツ課長)、石井聖子(同参事)、関和朗(同課長補佐)、會沢英行(同係長)、中林香澄(同主幹)、高橋拓也(同主幹)、小磯晴香(同主事)、萩野谷悟(同嘱託職員)、鈴木素行(同嘱託職員)、吹野富美夫(同臨時職員)

【2020(令和2)年度】茅根正憲(教育長)、大町 隆(教育部長)、石井聖子(文化スポーツ課長)、砂川明生(同課長補佐)、會沢英行(同係長)、石川優水(同主幹)、高橋拓也(同主幹)、宇地原美咲(同課主事)、杉浦果奈(同主事)、萩野谷悟(同会計年度任用職員)、鈴木素行(同会計年度任用職員)、吹野富美夫(同会計年度任用職員)

- 5 本書は、鈴木素行が編集し、V-1, 2, 3を外部に依頼、VI-2を中林香澄、その他を鈴木素行が執筆した。

- 6 動物遺存体については、パリーノ・サーヴェイ株式会社に同定を委託し、V-1を執筆いただいた。
- 7 ハチの巣については、久松正樹氏に同定を依頼し、V-2を執筆いただいた。
- 8 赤色顔料については、谷口陽子氏に分析を依頼し、村串まどか氏とともにV-3を執筆いただいた。
- 9 石器の石材については、一部の鑑定を田切美智雄氏(茨城大学名誉教授)に依頼した。

- 10 図版に掲載した遺物写真は、飯島一生氏(常陸大宮市史編さん委員会考古部会)の撮影による。

- 11 調査にあたり、地権者である菊池清、菊池隆広、菊池雄一の各氏から多大なる御理解と御協力をいただいた。
- 12 調査は、文化庁文化財第二課福宣田佳男主任文化財調査官、茨城県教育庁総務企画部文化課、常陸大宮市泉坂下遺跡保存活用整備検討委員会から全般にわたり御指導をいただきながら実施した。なお、泉坂下遺跡保存活用整備検討委員会を構成する委員は、以下の各氏である。

【2019(令和元)年度】川崎純徳(委員長)、秋山信夫(副委員長)、相田美樹男、石川日出志、鈴木素行、谷口陽子、後藤孝行、高橋弘道、菅又章雄、中村晴夫、上川信也

【2020(令和2)年度】川崎純徳(委員長)、秋山信夫(副委員長)、相田美樹男、石川日出志、鈴木素行、谷口陽子、後藤孝行、齋藤慶一郎、菅又章雄、中村晴夫、瀬谷 修

- 13 調査は、以下の方々御協力のもと実施した。

小野千里、須藤公子(以上、発掘調査及び整理作業)、青木千歌子、海老原四郎、小貫栄子、河西一良、篠原とよ子、田中美蓉、根本康裕、廣水一真、矢部素子(以上、発掘調査)、岡部孝代、河西恵子、鈴木治雄(以上、整理作業)

- 14 発掘調査及び整理作業にあたっては、以下の方々から種々の御教示や御協力をいただいた。記して謝意を表する。(敬称略)

相澤桃子、猪狩俊哉、池澤広美、稲田健一、江原美奈子、川村 勝、菊池芳文、小玉秀成、後藤俊一、佐々木義則、中村哲也、中村信博、西野陽子、馬場信子、横倉要次

- 15 出土遺物及び関係資料は、常陸大宮市教育委員会において保管している。

目 次

I	遺跡の位置と環境	1
1	泉坂下遺跡の位置	1
2	泉坂下遺跡の地理的環境	2
3	泉坂下遺跡の歴史的環境	2
4	茨城県北部の縄文晩期・弥生中期の遺跡	4
II	調査の概要	6
1	第1～4次調査の遺構分布	6
2	第6次調査の目的と調査区の位置	8
3	検出された遺構の位置と番号	9
4	発掘調査の経過	9
III	第32トレンチの調査	13
1	トレンチの概要	13
2	トレンチ西部の遺構と遺物	13
3	第38号竪穴住居跡	13
4	遺物包含層	23
5	土 器	26
6	土製品	41
7	石 器	42
8	石製品	49
9	骨角器	50
IV	第33トレンチの調査	55
1	トレンチの概要	55
2	第220号土坑	56
3	第26号竪穴住居跡	63
4	遺物包含層	68
5	土 器	68
6	土製品	76
7	石 器	78
8	石製品	84
9	骨角器	86
V	動物遺存体の同定と試料の分析	92
1	泉坂下遺跡第5・6次調査出土の動物遺存体の同定 (パリオ・サーヴェイ株式会社)	93
2	泉坂下遺跡(縄文時代晩期)より出土したハチの糞 (久松正樹)	101
3	泉坂下遺跡出土の赤色顔料の分析:水銀朱, バイブ状ベンガラ, 高師小僧 (谷口陽子・村井まどか)	103
VI	調査の成果と課題	112
1	縄文時代	112
2	弥生時代	121

挿 図 目 次

第1図	泉坂下遺跡と玉川下流域の遺跡群	1	第50図	第32トレンチ出土石器(6)	48
第2図	発掘された玉川下流域の遺跡群	2	第51図	第32トレンチ出土土製品	49
第3図	宇留野地内から採集された縄文時代の石棒	3	第52図	第32トレンチ出土骨角器	50
第4図	富士山遺跡3号墳地点出土の弥生時代の土器	3	第53図	第33トレンチの位置	55
第5図	茨城県北部における主要な縄文時代晩期の遺跡	4	第54図	第27トレンチ出土土器	56
第6図	茨城県北部における主要な弥生時代前期～中期中葉の遺跡	4	第55図	第27・33トレンチにおける弥生時代の遺構と遺物の出土位置	56
第7図	泉坂下遺跡における縄文・弥生時代の遺構分布	6	第56図	第33トレンチ出土土器(1)	57
第8図	第32・33トレンチの位置	7	第57図	第220号土坑実測図・遺物出土状況図	58
第9図	基本土層	8	第58図	第220号土坑出土遺物(1)	59
第10図	第32・33トレンチの遺構	9	第59図	第220号土坑出土遺物(2)	60
第11図	調査風景(1)	10	第60図	第220号土坑出土遺物(3)	61
第12図	調査風景(2)	11	第61図	第33トレンチ(第26号竪穴住居跡)実測図(1)	64
第13図	調査風景(3)	12	第62図	第33トレンチ(第26号竪穴住居跡)実測図(2)	65
第14図	第32トレンチの位置	13	第63図	第33トレンチ遺物出土状況図(1)	66
第15図	第32トレンチ実測図(1)	14	第64図	第33トレンチ出土土器(2)	67
第16図	第32トレンチ西部出土土器	14	第65図	第33トレンチ出土土器(3)	68
第17図	第32トレンチ実測図(2)	15	第66図	第33トレンチ出土土器(4)	69
第18図	第32トレンチ遺物出土状況図(1)	16	第67図	第33トレンチ出土土器(5)	70
第19図	第32トレンチ遺物出土状況図(2)	17	第68図	第33トレンチ出土土器(6)	71
第20図	第32トレンチ出土土器(1)	18	第69図	第33トレンチ遺物出土状況図(2)	72
第21図	第32トレンチ出土土器(2)	19	第70図	第33トレンチ出土土器(7)	73
第22図	第32トレンチ出土土器(3)	20	第71図	第33トレンチ出土土器(8)	74
第23図	第32トレンチ出土土器(4)	21	第72図	第33トレンチ出土土器(9)	75
第24図	第32トレンチ出土土器(5)	22	第73図	第33トレンチ遺物出土状況図(3)	76
第25図	第32トレンチ出土土器(6)	23	第74図	第33トレンチ出土土製品(1)	77
第26図	第32トレンチ出土土器(7)	24	第75図	第33トレンチ出土土製品(2)	77
第27図	第32トレンチ出土土器(8)	25	第76図	第33トレンチ出土土器(1)	79
第28図	第32トレンチ出土土器(9)	26	第77図	第33トレンチ出土土器(2)	80
第29図	第32トレンチ出土土器(10)	27	第78図	第33トレンチ出土土器(3)	81
第30図	第32トレンチ出土土器(11)	28	第79図	第33トレンチ出土土器(4)	82
第31図	第32トレンチ出土土器(12)	29	第80図	第33トレンチ出土土器(5)	83
第32図	第32トレンチ出土土器(13)	30	第81図	第33トレンチ出土土製品(1)	84
第33図	第32トレンチ遺物出土状況図(3)	31	第82図	第33トレンチ出土土製品(2)	85
第34図	第32トレンチ出土土器(14)	32	第83図	第33トレンチ出土骨角器	86
第35図	第32トレンチ出土土器(15)	33	第84図	現生のドロジガバチ類の巣	92
第36図	第32トレンチ出土土器(16)	34			
第37図	第32トレンチ出土土器(17)	35			
第38図	第32トレンチ出土土器(18)	36	V-1		
第39図	第32トレンチ出土土器(19)	37	図版1	5次調査	97
第40図	第32トレンチ出土土器(20)	38	図版2	6次調査(1)	98
第41図	第32トレンチ出土土器(21)	39	図版3	6次調査(2)	99
第42図	第32トレンチ遺物出土状況図(4)	40	図版4	6次調査(3)	100
第43図	第32トレンチ出土土製品(1)	41	V-2		
第44図	第32トレンチ出土土製品(2)	41	図1	泉坂下遺跡より出土したニッポンモンキジガバチと思える土塊	101
第45図	第32トレンチ出土土器(1)	43	図2	泉坂下遺跡より出土した築坑型のハチの巣	102
第46図	第32トレンチ出土土器(2)	44	図3	泉坂下遺跡より出土したドロバチ科ハチ類の巣の副型と思える土塊	102
第47図	第32トレンチ出土土器(3)	45			
第48図	第32トレンチ出土土器(4)	46	V-3		
第49図	第32トレンチ出土土器(5)	47	図1	第5号墓壙土器Iに含まれていたパイプ状ベンガラ	105

図2	ISS 33T-SI26 8層から出土した高師小僧	107
図3	茨城県東海村中丸地内の露頭	107
図4	茨城県東海村中丸地内の露頭における高師小僧の採取	107
図5	焼成前後の高師小僧の色差の変化	107
図6	焼成前の高師小僧	107
図7	焼成後の高師小僧	107
図8	Siで規格化したTiとZnによる高師小僧の比較	108
図9	Feで規格化したTiとZnによる高師小僧の比較	108
図10	赤彩のある出土遺物(1)	110
図11	赤彩のある出土遺物(2)	111
第85図	泉坂下遺跡第27・33トレンチの層序	112
第86図	第185号土坑出土遺物	113
第87図	大田房貝塚の土器	114
第88図	大近平遺跡SI019の石剣と土器	115
第89図	宮崎A遺跡出土の石剣と土器	115
第90図	泉坂下遺跡の石剣と土器(1)	115
第91図	大近平遺跡SK140の石剣と土器	116
第92図	広畑貝塚の土器	117
第93図	泉坂下遺跡の石剣と土器(2)	117
第94図	「SB4P-1」「SB4P-2」土坑出土遺物	118
第95図	十王堂遺跡の石剣と土器	118
第96図	泉坂下遺跡の土器	118
第97図	泉坂下遺跡第220号土坑の土器1～7	121
第98図	泉坂下遺跡第18トレンチ出土土器	122
第99図	瑞龍(古墳群)遺跡出土土器	122
第100図	森戸遺跡出土土器	122
第101図	溝巻状文土器編年	123
第102図	周辺地域の溝巻状文土器(1)	124
第103図	周辺地域の溝巻状文土器(2)	125
第104図	泉坂下遺跡出土の溝巻状文土器	126
第105図	泉坂下遺跡第60号土坑遺物出土状況	126
第106図	泉坂下遺跡第60号土坑土器1出土状況写真	126
第107図	泉坂下遺跡第67号土坑遺物出土状況	127
第108図	泉坂下遺跡第67号土坑出土土器	127

表 目 次

第1表	第32・33トレンチ検出遺構一覧表	9
第2表	第32トレンチ出土土器計測表	51
第3表	第32トレンチ出土土器一覧表	51
第4表	第32トレンチ出土土製品一覧表	53
第5表	第32トレンチ出土石器・石製品一覧表	54
第6表	第32トレンチ出土骨角器一覧表	54
第7表	第33トレンチ出土土器計測表	87
第8表	第33トレンチ出土土器一覧表	87
第9表	第33トレンチ出土土製品一覧表	88
第10表	第33トレンチ出土石器・石製品一覧表	88
第11表	第33トレンチ出土骨角器一覧表	91
第12表	土壌の水洗選別で検出された遺物	92
第13表	発掘調査で検出された骨	92
第14表	土器内土壌等から水洗選別で検出された骨	92
V-1		
表1	検出動物分類群一覧	93
表2	第5次確認調査出土骨同定結果	94
表3	第6次確認調査出土骨同定結果	95
V-3		
表1	赤彩のある出土遺物一覧	111
第15表	縄文晩期～弥生中期の ¹⁴ C年代	112
第16表	溝巻状文土器の分類	122

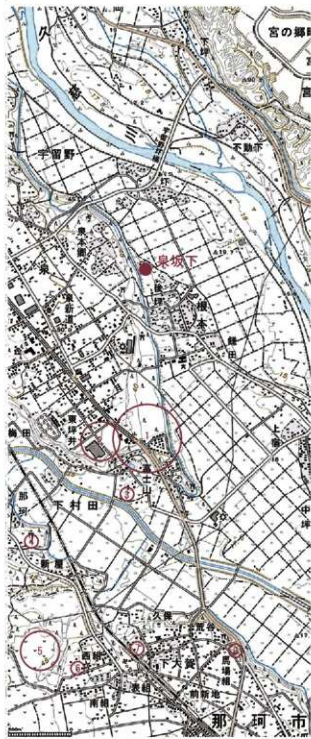
I 遺跡の位置と環境

1 泉坂下遺跡の位置

泉坂下遺跡は、茨城県北部の常陸大宮市泉坂下に所在する。泉という地区に遺跡の存在が周知されたのは、古く1904（明治37）年のことであった。吉田文俊が『東京人類学会雑誌』第218号に「常陸那珂郡地方の石器時代遺跡」を報告し、紹介した遺跡のなかに那珂郡の「上野村泉」が含まれていた。吉田は、「私は先年常陸北部へ旅行せし時も、那珂地方の石器時代遺跡に就て調べて見たこともありましたが、今度又水戸地方に参った序を以て、那珂郡地方を1週間ばかりそちこちを歩いて遺跡の踏査をいたしました」として、遺物を発見した23の遺跡を掲げている。現在のひたちなか市から那珂市を経て常陸大宮市の「大場村大字小場」までは那珂川沿いを、那珂市を横断して久慈川沿いの「木崎村大字門部」「上野村泉」「大宮村大字大宮」と歩いたらしい。「上野村泉」で発見した遺物は「石畿」のみが記載されている。吉田の報告した遺跡は、1917（大正6）年に刊行された東京帝国大学の『日本石器時代人民遺物発見地名表』増補4版に掲載され、同書の5版である1928（昭和3）年の『日本石器時代遺物発見地名表』にも受け継がれている。確証はないものの、この「上野村泉」は、現在の泉坂下遺跡に相当するのではないかと見られる。

太平洋戦争を挟んだ36年後の1964（昭和39）年に、茨城県教育委員会が県内の遺跡をまとめた『茨城県遺跡地名表』には、当時の大宮町として49の遺跡が報告されたが、泉坂下遺跡の記載はない。『茨城県遺跡地名表』は1970年代に増補改訂を繰り返したが、泉坂下遺跡が追加されることはなかった。遺跡地のほとんどは早くから水田として利用されていたらしく、これが踏査を阻んでいたと想像される。また、畑地ではなく水田であったことが、1960-70年代に盛んであったゴボウ耕作に利用されることなく、遺跡を保存することになったとも考えられるのである。

泉坂下遺跡の存在が明確になったのは、菊池榮一氏が当時の大宮町歴史民俗資料館と上野小学校に寄贈された遺物による。1995（平成7）年に、大宮町歴史民俗資料館が「大宮の考古遺物」という展示会を開催し遺物を陳



1: 上岩瀬富士山（富士山）遺跡、2: 坪井上遺跡、3: 西坪井（下村田）遺跡、4: 下村田新屋遺跡、5: 上宿遺跡、6: 西組遺跡、7: 前新地遺跡、8: ニッ堂遺跡（5～8: 大賀遺跡の範囲内）

第1図 泉坂下遺跡と玉川下流域の遺跡群

列して遺跡の存在が広く知られることになった。公開された遺物は、弥生時代中期の壺形土器と、縄文時代の石棒であり、弥生時代については再葬墓の可能性が、縄文時代については未成品を含むことから石棒製作址の可能性がそれぞれ推定される資料であった。当初は、弥生時代中期の壺形土器が発見された地点のみが明確で、地籍918が遺跡の所在地とされた。2006（平成18）年に再葬墓を確認した学術調査も、この地籍内に終始するものであった。

2012（平成24）年から常陸大宮市教育委員会が実施した確認調査により、埋蔵文化財包蔵地としての泉坂下遺跡は南北約120m、東西約90mの範囲、地籍では918他の37筆に及ぶことが明らかになった。2017（平成29）年には、再葬墓群を中心とした918他の23筆、面積6,148㎡余が国史跡に指定されている。第6次調査の調査区は、指定範囲内にあり、地籍910・911に相当する。

2 泉坂下遺跡の地理的環境

茨城県北部は、久慈川を境界として西側に八満山地、東側に阿武隈山地と称される山地地形が展開する。久慈川と那珂川に挟まれた八満山地の南端は鷲子山地と称され、久慈川と玉川の合流点より下流域には、那珂台地と称される平坦な台地形が展開するようになる。山地地形から台地形へと転換する、久慈川と玉川の合流点付近に泉坂下遺跡はある。

常陸大宮市の市街地をのせる丘陵は、鷲子山地の端部に相当し、標高は45～50mである。泉坂下遺跡は、丘陵上から比高差30mの低位段丘上にあり、標高は20～21mほど、低地との比高差は1mほどに過ぎない。ここは久慈川の右岸に相当し、現在の流路からは700mほど離れている。遺跡から望む現在の堤防の手前には自然堤防があり、ここには宇留野字環の集落が形成されている。

低位段丘は小さな谷津により、いくつかに分断されている。このような谷津は、台地上からの流水とともに、湧水により形成された。遺跡の北350mには、泉の地名の由来となった「三蔵の滝」とも呼ばれる湧水点があり、現在も豊富な水が湧き出しているのを見ることができ、北と南に谷津が入り込み、これらの谷津に区画された部分が、ほぼ泉坂下遺跡の範囲に相当している。



KF: 上岩瀬富士山遺跡（渡邊2006）

F-1・3・4: 富士山遺跡-1・3・4号墳地点（井上1979）

T-A・B・C: 坪井上遺跡-A・B・C地区（千種1999）

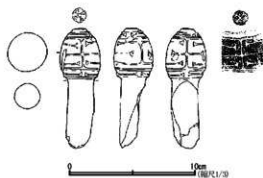
S: 下村田遺跡（荒井1996）

第2図 発掘された玉川下流域の遺跡群

3 泉坂下遺跡の歴史的環境

泉坂下遺跡の歴史的環境として、縄文・弥生時代の遺跡について概観する。

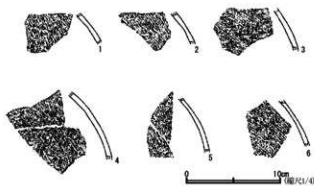
縄文時代 久慈川と玉川の合流点付近において確認される縄文時代最古の資料は、玉川の右岸に相当する二ツ堂遺跡の有茎尖頭器であり、草創期の資料が採集されている。ここには早期「田戸下層式」「常世2式」、前期「花積下層式」も分布する。左岸では、富士山遺跡の発掘調査資料（井上1979）の中に、前期中葉の繊維土器、所謂「黒浜式」として括られる破片がいくつか含まれていることを確認しており、前期における生活の痕跡が残されている。しかし、富士山遺跡は、古墳部分の発掘にとどまり、その周囲は調査されずに埋没したため、当該期に住居跡等の遺構が形成されていたのかは明らかにはしない。中期から後期にかけては、左岸に坪井上遺跡、右岸に上宿遺跡が形成された。坪井上遺跡には、前期中葉の袋状土坑多数とともに、後葉「加曾利E式」の住居跡が少なくとも1基検出されている（千種1999）。上宿遺跡では、前期中葉～後葉の土器が採集され、「加曾利E



第3図 宇留野地内から採集された縄文時代の石棒

式」の住居跡はほぼ確実にあるらしい。坪井上遺跡の後期は、中葉「堀之内2式」までが報告(阿久津1977)されているが、「成興野型」を再生したような石棒も出土しており、後葉にまで下るのかもしれない。上宿遺跡には、数量は多くないものの、中葉「加曾利B式」、後葉「安行1式」も採集されている。富士山遺跡や二ツ堂遺跡でも中期後葉～後期前葉の資料は採集されているが、いずれも集落跡が想定されるような数量ではない。晩期については、常陸大宮市宇留野地内で「小野型」の石棒破片が採集されている(第3図)。但し、他に晩期と考えられる資料はなく、後世の時代に採集されたものが持ち込まれたと想定される事例(ひたちなか市藤ノ果遺跡-坪井上1994、ひたちなか市三反田遺跡-佐々木2019)もあることから、1点の石棒破片をもって晩期の遺跡と捉えることは控えたい。以上の遺跡分布からは、縄文時代の遺跡が合流点付近から玉川の上流方向に多く、特に中・後期には、生活の拠点となる集落がここに形成されたと見られる。遺跡は、全て台地上に立地する。泉坂下遺跡にわずかに検出される前・中・後期の遺構と遺物は、集落の周辺に残された活動の痕跡として捉えられるものであろう。後期後葉「安行2式」以後の痕跡は、泉坂下遺跡に集中する。晩期については住居跡も検出されており、生活の拠点は、久慈川の右岸に、しかも低位段丘上へと移動した。宇留野地内の「小野型」も後世に、ここから採集されて運ばれたものかもしれない。

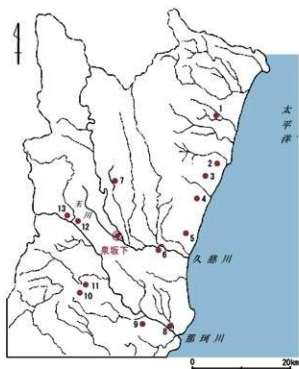
弥生時代 泉坂下遺跡は、再葬墓を中心とした埋葬遺跡であるが、その立地は、縄文時代晩期の遺跡を継承している。周辺の遺跡として、富士山遺跡の発掘調査資料(坪井上1979)の中に、器外面に貝殻条痕状の条痕文が



第4図 富士山遺跡3号墳地点出土の弥生時代の土器

施された土器の破片を見出したので紹介しておきたい(第4図)。弥生時代の中期前葉以前に位置付けられるものであろう。しかし、これも壺形土器が、しかも1個体分に過ぎず、生活遺跡を推定できるような痕跡ではない。また、前新地遺跡とした地点では、中期中葉の土器の破片を採集されており、今回報告するSK220にほぼ並行する時期の遺跡も分布する。中期後半については、市域全体に生活の痕跡が希薄である。

後期前半の遺跡は、富士山(坪井上1979)・坪井上(鈴木2014)・下村田新屋・西組(横倉2001)・二ツ堂(横倉1996)の各遺跡に形成されている。そのうち下村田新屋遺跡では住居跡が確認され、富士山遺跡では土器棺墓が調査された。富士山遺跡には後期初頭の土器群が含まれており、他の遺跡も後期前葉の時期にほぼ限られるようである。後期中葉の遺跡は、未だ確認できておらず、後期後半「十王台式」まで遺跡群の形成が連続するの、途中に断絶があるのか見極めができない現状である。「十王台式」の集落は、富士山遺跡として9基(坪井上1979)、上岩瀬富士山遺跡として7基(渡邊2006)、坪井上遺跡として2基(千種1999)が調査されており、富士山遺跡では土器棺墓が2基、上岩瀬富士山遺跡では土坑3基とが跡1基も報告されている。これらは同じ集落跡として括られるような位置関係にあり、「十王台式」でも複数の細分時期にわたって継続した大規模な集落跡であったと見られる。これらの遺跡が立地する台地下の低位段丘上には下村田遺跡があり、ここから「十王台式」の破片が出土している。茨城町大畑遺跡(長谷川1998)のように低位段丘上に集落跡が展開する可能性もあるが、現在のところ、富士山遺跡等の集落の周辺に残された活動の痕



- 1: 小場遺跡, 2: 大近平遺跡, 3: 上の代遺跡,
 4: 十王堂遺跡, 5: 宮脇 A 遺跡, 6: 籠内遺跡,
 7: 本覚遺跡, 8: 柳沢大田房貝塚, 9: 下の内遺跡,
 10: 金洗沢遺跡, 11: 小田倉遺跡, 12: 小野天神前遺跡,
 13: 西場遺跡

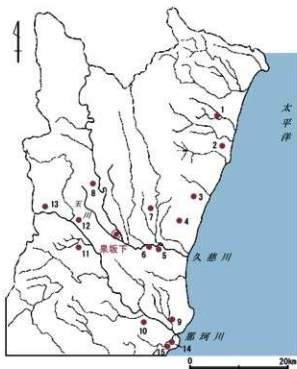
**第5図 茨城県北部における主要な縄文時代
 晩期の遺跡** (鈴木^m2005に加筆)

跡として捉えている。泉坂下遺跡からも「十王台式」の破片が出土しており、これも集落の周辺に残された活動の痕跡と見られ、第9号溝については当該期に構築されたものではないかと推定されている。

4 茨城県北部の縄文晩期・弥生中期の遺跡

発掘調査が実施された遺跡を中心として、茨城県北部における主要な縄文時代晩期の遺跡を第5図に示した。発掘調査が実施されても内容が報告されていない遺跡、極一部のみの報告にとどまる遺跡などが見受けられ、当該期の研究そのものが大きな課題となっている。数少ない発掘調査の事例として、泉坂下遺跡の調査には、そのための基礎資料の提示が期待されている。

同じく、主要な弥生時代中期中葉までの遺跡を第6図に示した。近年の新たな動向としては、2019年に常陸大宮市宿尻遺跡において再葬墓が確認され発掘調査が



- 1: 小場遺跡, 2: 明神越遺跡, 3: 十王堂遺跡,
 4: 大沼遺跡, 5: 海後遺跡, 6: 森戸遺跡,
 7: 瑞龍古墳群, 8: 中台遺跡, 9: 差洪遺跡 (貉Ⅲ遺跡),
 10: 薄内遺跡, 11: 北方遺跡, 12: 小野天神前遺跡,
 13: 宿尻遺跡, 14: 一本松遺跡, 15: 髭釜遺跡

**第6図 茨城県北部における主要な弥生時代
 前期～中期中葉の遺跡** (鈴木^m2011に加筆)

実施されたこと、2020年に中台遺跡において発掘調査が実施され弥生時代前期の包含層が検出されたことがあげられる。小野天神前遺跡を含め、地域的な研究の中核として、泉坂下遺跡の調査が果たすべき役割はますます大きくなっている。

- 註1 ニ王堂遺跡については、鈴木素行の踏査による(弥生時代の資料は横倉1996が報告、その他は未報告)。
 註2 上宿遺跡については、鈴木素行の踏査による(未報告)。「加曾利E式」の上層埋設があったことを見聞している。
 註3 前新地遺跡については、鈴木素行の踏査による(未報告)。
 註4 常陸大宮市教育委員会が2020年度に実施した試掘調査で1基の住居跡が検出された(未報告)。

参考文献

- 阿久津久 1977「大宮町の遺跡」『大宮町史』大宮町役場 107-174頁
- 阿久津久 1991「中台遺跡」『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』茨城県 138-139頁
- 阿久津久 1977「茨城県大宮町小野天神前遺跡(資料編)」学術調査報告書1 茨城県歴史館
- 荒井英樹 1997「宮脇A遺跡発掘調査報告書」(市報告第47集)日南市教育委員会
- 荒井保雄 1996「一級河川玉川改修工事地内埋蔵文化財調査報告書 一下村田遺跡一」(財団報告第110集)茨城県教育財団
- 井上義安 1971「茨城県縄文文化研究資料集録1~V」那珂川の先史遺跡刊行会
- 井上義安 1979「富士山遺跡調査報告書1」大宮町教育委員会
- 井上義安 2001「一本松遺跡」一本松埋蔵文化財発掘調査会
- 井上義安・馬日順一 1979「下の内遺跡」『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』茨城県 85-87頁
- 大賀 健 2015「大近平遺跡発掘調査報告書 一中所沢川尻線(市道640号線)道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一」(市報告第101集)日南市教育委員会
- 奥沢哲也 2016「瑞穂古墳群 一県立常陸太田特別支援学校施設整備事業地内埋蔵文化財調査報告書一」(財団報告第415集)茨城県教育財団
- 川上博義 1976「茨城県桂村北方出土の古式弥生式土器」『常総台地』7 47頁
- 川上博義・阿久津久 1976「縄文時代における文化の領域的研究」『茨城県歴史館』3 63-77頁
- 瓦吹 堅 1972「茨城県日南市尻町上の代遺跡(発掘調査の概要)」日南市教育委員会
- 瓦吹 堅 1995「大宮の考古遺物 一那珂・久慈の清流にはくぐまれた大宮町の先史・古代一」大宮町教育委員会
- 川崎志郎 1977「日南市大沼遺跡発掘調査報告書」(市報告第3集)日南市教育委員会
- 川崎純徳・川上博義・龍田 宏 1970「茨城県海後遺跡出土の人面土器」『常総台地』5号 20-22頁
- 川崎純徳 1988「那珂町史 自然環境・原始古代編」那珂町
- 後藤俊一 2013「泉坂下遺跡Ⅱ 一保存整備事業に伴う第1次確認調査報告一」(市報告第16集)常陸大宮市教育委員会
- 後藤俊一 2014「泉坂下遺跡Ⅲ 一保存整備事業に伴う第2次確認調査報告一」(市報告第21集)常陸大宮市教育委員会
- 後藤俊一 2015「泉坂下遺跡Ⅳ 一保存整備事業に伴う第3次確認調査報告一」(市報告第23集)常陸大宮市教育委員会
- 後藤俊一 2016「泉坂下遺跡Ⅴ 一保存整備事業に伴う第4次確認調査報告及び総括報告一」(市報告第26集)常陸大宮市教育委員会
- 斎藤弘道・鈴木美治・西野剛史 1990「那珂町森戸遺跡出土の縄文式・弥生式土器及び古式土器について」『年報』9(平成元年度)茨城県教育財団 107-118頁
- 佐々木義則 2019「三反田遺跡第7・8次発掘調査報告書」(公社報告第44集)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社
- 佐藤次男・井上義安・宮田 毅 1978「弥生土器 一関東 東関東1一」『考古学ジャーナル』№146 15-22頁
- 清水 哲 2010「十王堂遺跡 一主要地方道日笠立間線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書一」(財団報告第332集)茨城県教育財団
- 鈴木素行 2005「本覚遺跡の研究 一関東地方東部における縄文時代晩期の石神製作について一」(私家版)
- 鈴木素行 2011「泉坂下遺跡の研究 一人面付土器を伴う弥生時代中期の再葬墓群について一」(私家版)
- 鈴木素行 2014「始まりと終わりの弥生土器」『ミッション!! 東日本の弥生時代を解明せよ!』常陸大宮市歴史民俗資料館 11-12頁
- 千種重樹 1999「坪井上遺跡」坪井上遺跡発掘調査会
- 東京帝国大学 1917「日本石器時代人民遺物発見地名表」(四版)東京帝国大学
- 東京帝国大学 1928「日本石器時代遺物発見地名表」(五版)同書院
- 西野剛史 1990「一級国道349号線改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 一北郷C遺跡・森戸遺跡一」(財団報告第55集)茨城県教育財団
- 西村正衛 1979「小田倉遺跡」『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』茨城県 87-88頁
- 沼田文夫 1986「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書9 一小場遺跡一」(財団報告第35集)茨城県教育財団
- 長谷川聡 1998「北関東自動車道(友部~水戸)建設地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 一大作遺跡・大畑遺跡一」(財団報告第136集)茨城県教育財団
- 日沖剛史 2008「薄内遺跡(第1地点) 一移動体通信基地局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一」(市報告第18集)水戸市教育委員会
- 藤本弥城 1977「那珂川下流域の石器時代研究」I(私家版)
- 藤本弥城 1983「常陸那珂川下流の弥生土器」Ⅲ(私家版)
- 山方町文化財保存研究会 1977「山方町誌」上巻 山方町文化財保存研究会
- 湯原勝美 1997「山中遺跡・明神越遺跡発掘調査報告書」(市報告第40集)日南市教育委員会
- 横倉要次 1996「那珂郡瓜連町二ツ堂遺跡採集の弥生土器と紡錘車」『豊良岐考古』第18号 35-52頁
- 横倉要次 1998「那珂郡大宮町坪井上遺跡採集の弥生土器と紡錘車」『茨城県考古学協会誌』第10号 107-114頁
- 横倉要次 2001「那珂郡瓜連町大賀遺跡採集の弥生土器について」『茨城県考古学協会誌』第13号 119-124頁
- 吉田文俊 1904「常陸那珂郡地方の石器時代遺跡」『東京人類学会雑誌』第218号 292-298頁
- 渡邊浩夫 2006「上岩瀬富士山遺跡 一17国補道改第17-03-068-0-053号埋蔵文化財調査報告書一」(財団報告第260集)茨城県教育財団

II 調査の概要

1 第1～4次調査の遺構分布

泉坂下遺跡は、2006（平成18）年に実施された学術調査により、弥生時代中期に再葬墓を形成した遺跡であることが確認された。この調査は、縄文時代晩期の石槌製作についても目的としていたが、開始早々に人面付土器が検出され、これが伴う再葬墓を詳細に調査、記録することに主目的が移行することになった。第1トレンチと呼んだ1m×20mのトレンチに検出された遺構のみに限定した調査であり、調査面積は36㎡（第8図 黒塗部分）。第1～6号墓塚とした再葬墓6基と、再葬墓の可能性がある遺構の1基はトレンチを拡張して調査し、他に、1次葬の墓塚の可能性がある土坑3基、さらに平安時代の住居跡1基を記録した。その報告書は、2011（平成23）年に刊行されている（鈴木²⁰¹¹）。

調査の結果を受けた常陸大宮市は、文化財としての重要性に鑑み、泉坂下遺跡保存委員会を組織して、遺跡の保存・整備・活用を図ることとした。委員会の指導のもと、必要な測量および確認調査が検討され、当初は、2012（平成24）年度からの3カ年で確認調査の計画が立案された。その後には延長された第4次までの調査が、2016（平成28）年度に総括されている（後藤²⁰¹⁶）。

第4次調査までの総括では、調査年次ごと、検出された時代ごとに概要が記述された。住居跡は26号まで、再葬墓を含む土坑は193号までを数えるが、調査の進行により平安時代の集落が展開することが捉えられ、中世さらに近世の遺跡までが重複することが明らかになっている。ここでは、第5・6次の調査が実施されることになった経緯として、縄文・弥生時代の遺構の分布について記述する。

縄文時代の遺構の分布は、大グリッド区画のEラインよりも西側にあるC5・C6・D6・D7区、トレンチでは第5・12・27トレンチからほとんどが検出されている（第7図1）。第5トレンチの第32号土坑（SK32）は、中期の袋状土坑であるが、第12トレンチの第9～12号竪穴住居跡（S19～12）、第27トレンチの第26号竪穴住居跡（S26）は晩期的なものとして推定されている。遺物はEラ



1. 縄文時代の遺構分布



2. 弥生時代の遺構分布

第7図 泉坂下遺跡における縄文・弥生時代の遺構分布（第1～4次調査、『泉坂下遺跡V』より加筆引用）



黒塗: 第1トレンチ, 淡網: 第2~31トレンチ, 赤塗: 第32・33トレンチ

第8図 第32・33トレンチの位置

インを超えて東側へも分布するが、晩期の集落跡の中心は、遺跡の西側にあることが考えられた。C5区に位置する第9・10号竪穴住居跡は、表土下で竪穴の立ち上がりが見出され、床面までの深さが20cmに満たないのに対して、第26号竪穴住居跡は、最も深い部分で表土下80cmに床面があり、遺物を包含する土層堆積が厚く残されていることも注目された。

弥生時代の遺構の分布は、大グリッド区画のEラインよりも東側にあるE5・E6・E7・F6・F7区からほとんどが見出されている(第7図2)。遺物も西端の第12トレンチでは出土していない。この広がりには、再葬墓を含む中期の土坑群が形成したものである。E5区からE7区において検出された第9号溝は、地中レーダー探査の結果、さらに伸張し、遺跡を南北方向に貫くことが推定されている。これは、弥生時代中期の第153号土坑(SK153)を掘り込んで構築され、溝の覆土を平安時代の第14・15号竪穴住居跡(SI14・15)が掘削することから、弥生時代中期以後、平安時代以前に位置付けられることは確実であり、溝底面付近から出土した「十王台式」の破片から、弥生時代後期と推定されている。中期の土坑群は、ちょうど第9号溝を区分の目安として、東群と西群に分布が分かれる。その西群の西側限界は、第27トレンチから検出され、縄文時代晩期の第26号竪穴住居跡(SI26)と重複して形成された第176号土坑(SK176)である。

第4次調査までに、西側に縄文時代の遺跡、東側に弥生時代の遺跡が展開することは明らかにされたが、その重複部分に相当するD5・6区には、調査の空白部分が広く残されていた。この空白部の状況を把握するために計画されたのが第5・6次調査ということになる。

2 第6次調査の目的と調査区位置

2018(平成30)年度の第5次調査では、第28～31トレンチを設定した。第28トレンチは第12号竪穴住居跡(SI12)、第29トレンチは第26号竪穴住居跡(SI26)という、それぞれの縄文時代晩期の住居跡について規模と形態を確認することを目的とした調査区である。第30トレンチは第11号竪穴住居跡(SI11)、第31トレンチは第9号竪穴住居跡(SI9)という、やはり縄文時代晩期の住居跡について規模と形態を確認できるよう第12トレンチと接続しており、これを伸張しD5区という調査の空

白部を東西に横断するように設定された。

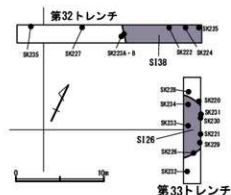
2019(令和元)年度の第6次調査では、第32・33トレンチの2つを設定した(第8図)。

第32トレンチは、第5トレンチと第30トレンチの間に相当するD6区の空白部に同じ方向で設定された。これも西端は第12トレンチに接続させたので、大グリッドとしては一部がC6区に含まれる。トレンチの長さは21m、幅は2mで、調査面積は42㎡である。

第33トレンチは、第26号竪穴住居跡(SI26)の規模と形態をより明確にすること、この住居跡の上位に堆積した縄文時代晩期から弥生時代中期に至る遺物包含層と重複する遺構について調査を広げ、泉坂下遺跡における縄文時代晩期から弥生時代中期までの空白に近い時期についての知見も期待して設定された。第27トレンチに接して平行し、第5・29トレンチとは一部が直交して重なる。大グリッドとしてはD6区とD7区にまたがっている。第32トレンチの東端と第33トレンチの北端は4mの間隔であり、この部分は接近した位置にある。トレンチの長さは12m、幅は2mで設定したが、西側50cm幅を土層観察のためのベルトとし、最終的にこれを掘り下げることがなかったため、調査した幅は1.5mとなり、調査面積は18㎡ということになる。



第9図 基本土層(『泉坂下遺跡V』より引用)



第10図 第32・33トレンチの遺構

第32・33トレンチを合わせた第6次調査の調査面積は60㎡である。なお、第32・33トレンチとも基本土層は第4次調査(第9図)に準拠し、第26号竪穴住居跡(SI26)の覆土として報告された遺物包含層についても、土層番号を継承している。

3 検出された遺構の位置と番号

第6次調査においても、第5次調査までの遺構番号を継承し、新たに検出された遺構には通し番号を付した。調査中に平面が確認された遺構については、遺構内の出土遺物を区別して取り上げる必要もあって、現地において順次に番号を付した。したがって、土坑番号については、第32・33トレンチを行き来するような番号順になっている(第10図)。トレンチの壁に断面で確認した遺構には、調査後に番号を付したものもある。黒色系の土層中に掘り込まれ、黒色系の覆土が堆積した土坑を平面で見出すことは極めて難しく、遺物包含層を掘り下げながら同じ垂直位置で明らかに異なる時代の遺物を検出し、ようやく土坑の存在に気付くといった状況であった。

第32トレンチで検出されたのは、第38号竪穴住居跡、第222・223A・223B・224・225・227・235号土坑という、住居跡1基と土坑7基の計8基である。住居跡は縄文時代晩期と推定され、第37号まで数えた住居跡のうち第11・12・26・30・32～37号(第9・10号は第5次調査で抹消)も晩期と推定されていることから、泉坂下遺跡における晩期の住居跡として11基目を確認したことになる。第222～225号土坑は、第38号竪穴住居跡と重複し、住居跡の上位に堆積した遺物包含層を

第1表 第32・33トレンチ検出遺構一覧表

遺構番号	記号	層位	年代	備考
第26号竪穴住居跡	SI26	S31ト	D6d-D7Zc	縄文(晩期)
第38号竪穴住居跡	SI38	S2ト	D6e-SI6	縄文(晩期)
第220号土坑	SK220	S3ト	D608c	弥生(中期)
第221号土坑	SK221	S3ト	D711c	4明(平安)
第222号土坑	SK222	S2ト	D605c	4明
第223号土坑	SK223A	S3ト	D659c	4明
第223B号土坑	SK223B	S3ト	D645-c4c	4明
第224号土坑	SK224	S2ト	D645-SI6	4明
第225号土坑	SK225	S3ト	D645c	4明
第226号土坑	SK226	S3ト	D712c	4明
第227号土坑	SK227	S3ト	D6e-SI6	4明
第228号土坑	SK228	S3ト	D608c	縄文
第229号土坑	SK229	S3ト	D711c	縄文・弥生
第230号土坑	SK230	S3ト	D648c	縄文・弥生
第231号土坑	SK231	S3ト	D648c	縄文・弥生
第232号土坑	SK232	S3ト	D713c	4明
第233号土坑	SK233	S3ト	D608c	4明
第234号土坑	SK234	S3ト	D608c	4明
第235号土坑	SK235	S3ト	C655c	4明

*「年代」欄内の「4明」は、層位および覆土の状況から「縄文・弥生」以降と判断される。
*「備考」欄内の住居跡と土坑の重複関係は全て、土坑内にあり、

掘り込んでいることから第38号竪穴住居跡より新しく、さらに第222・224・225号土坑については、遺物包含層の最上層である晩期中葉よりも時代は下る。覆土の状態からは、縄文・弥生時代のものとは見られない。これは、第223・227・235号土坑についても同じく考えられ、第32トレンチには、弥生時代の遺構を確認できなかった。

第33トレンチで検出されたのは、第26号竪穴住居跡、第220・221・226・228・229・230・231・232・233・234号土坑という、住居跡1基と土坑10基の計11基である。第26号竪穴住居跡は、第4次調査で床面までを掘り下げ、床面直上から出土した「安行3a式」が住居の廃絶時期と判断されている。第5次では、その住居跡西側の限界が捉えられた。土坑のうち遺物から時期が推定されたのは、弥生時代中期の第220号土坑と平安時代以降の第221号土坑の2基である。他は、第26号竪穴住居跡の上位に堆積した遺物包含層との上下および重複の関係から、時代を判断した。第220号土坑が検出されたことにより、西群として括られる弥生時代中期の土坑群の分布は、第176号土坑とともに西側へ伸張することがより確実となった。但し、第33トレンチの結果と合わせると、それは極く部分的なものと思われる。

4 発掘調査の経過

- 5月30日(木)晴。調査区を設定(第11図1)。
6月3日(月)晴。第32・33トレンチの表土(第1・1B層)除去に着手。
6月4日(火)晴。第32・33トレンチの表土除去を続行。
6月5日(水)曇。第32トレンチ D6d 5区を中心として



1. 調査区の設定 (5月30日)



2. 第33トレンチの水没 (6月11日)



3. 泉坂下遺跡委員会の視察 (6月20日)



4. 第33トレンチの土壌採取 (6月21日)

第11図 調査風景 (1)

表土下より縄文晩期の遺物が出土。D6c5区より東側の堆積土が黒く、ここに住居跡を想定して調査を進める。

6月6日(木)晴。第32トレンチはD6d5区で大洞BC式、D6f5区で大洞C2式が出土し、住居跡は2基が重複する可能性を考える。

6月7日(金)雨。現地作業中止。

6月10日(月)雨。現地作業中止。

6月11日(火)曇。昨日の雨でトレンチが完全に水没したため、1時間ほど排水の処置をして現地作業中止(第11図2)。

6月12日(水)曇。トレンチの水が引かず、午前中は排水の作業。午後は第32トレンチのみ調査を続行。

6月13日(木)晴。排水溝も兼ねて、第32トレンチの北壁沿いに幅50cmでサブトレンチを設定して、これを掘り下げることにした。住居跡を想定した範囲を第38号竪穴住居跡(SI38、以下は「竪穴」を省略して表記)とする。

6月14日(金)晴。第33トレンチのD6i9区において、ほぼ完形の弥生土器4点が底部を上にした状態で検出された。

6月17日(月)晴。昨日検出された弥生土器4点は、鉢形が2点、蓋形が2点であり、土坑に伴うことが想定され

た。第38号住居跡については、2基の住居跡が重複する可能性とともに、1基の住居跡の上位に大洞BC式~大洞C2式の遺物包含層が斜めに堆積した可能性についても考えながら調査を進める。

6月18日(火)晴。弥生土器4点が出土した地点は、第26号住居跡(SI26)の覆土中にあることから明瞭な輪郭は引きにくいものの、これを第220号土坑(SK220)とする。第32トレンチは、サブトレンチの掘り下げを続行。

6月19日(水)晴。第32トレンチの掘り下げは、地表下40~60cmに達する。第38号住居跡の範囲からは多量の遺物が出土している。

6月20日(木)晴。泉坂下遺跡保存活用整備検討委員会が調査中の現地を視察(第11図3)。

6月21日(金)曇。第220号土坑について、東西方向のベルトを残した状態で土器の出土状況を撮影。第33トレンチの南側については、地表下60cmまで掘り下げが進む。D6i0区とD7i1区については、水洗選別するため、第26号竪穴住居跡(SI26、以下は「竪穴」を省略して表記)の層位に準じて土壌を採取している(第11図4)。北側についても、D6i8区とD6i9区の土壌を採取しているが、第220号土坑の調査のため掘り込みが遅れている。第33



1. 第32トレンチの排水(7月3日)



2. 現地説明会(7月20日)



3. 第33トレンチの調査(7月9日)

第12図 調査風景(2)

トレンチの掘り下げは東端部でローム層に達したが、水が湧いてきた。

6月24日(月)雨。現地作業中止。

6月25日(火)晴。第33トレンチのD7i1区で第5層の垂直位置から平安時代の土器片を検出、この部分に第26号住居跡と重複した土坑が想定される。これは後の第221号土坑(SK221)。

6月26日(水)晴。第33トレンチのD7i2区で第26号住居跡の南側の立ち上がりを検出し、略円形の平面形態であることが確実となる。第220号土坑については、東壁際から出土した壺形を含めた5点の土器の出土状況を撮影した。

6月27日(木)曇。第32トレンチのD6g5区で第38号住居跡の床面付近に炭化材片の集中を観察した。第220号土坑の土器1・2を取り上げる。

6月28日(金)曇時々雨。第32トレンチのD6h5区で第38号住居跡の床面付近に焼土と灰を検出、炉址であろうか。D6e5区には住居跡西側の立ち上がりを確認した。

7月1日(月)雨。現地作業中止。

7月2日(火)曇。トレンチ水没のため、調査中止。

7月3日(水)曇。第32トレンチはサブトレンチをほぼ完

掘(第12図1)。第38号住居跡を中心とした部分については、中央の1m幅を掘り込み遺物を露出させることとする。第33トレンチの南側は水没のため調査できず、北側のみポンプで排水をしながら掘り下げる。第220号土坑では土器5の下位から、土器6の鉢形を検出した。

7月4日(木)雨。現地作業中止。

7月5日(金)曇。トレンチ水没のため、現地作業中止。

7月8日(月)曇。第32トレンチの中央部を掘り進める。

7月9日(火)曇。第33トレンチの北側の掘り下げがほぼ完了し、住居跡の立ち上がりについて精査しようとしたが、浸水してしまい観察できない(第12図3)。

7月10日(水)曇のち晴。第220号土坑の土器3～6の出土状況を撮影し、土器3・4を取り上げる。

7月11日(木)曇。第26号住居跡の北側輪郭を大よそ確認した。浸水のため底面が泥化してしまっており、床面については精査できない。

7月12日(木)雨。現地作業中止。

7月16日(火)曇。空中写真撮影および現地説明会に備えて、第32トレンチの清掃を始める。

7月17日(水)曇。第32・33トレンチとも土層堆積の検討。



1. 第32号トレンチの図化(7月29日)



2. 第220号土坑の遺物取り上げ(7月29日)

第13図 調査風景(3)

7月18日(木)曇。空中写真撮影。第220号土坑は、南北方向の土層断面図作成のため、東壁際を掘り込む。

7月19日(金)雨。現地作業中止。

7月20日(土)曇。現地説明会。会場への誘導等には「泉坂下遺跡を守る会」が活躍。参加者は、県内外から約90名であった(第12図2)。

7月22日(月)小雨。第32号トレンチの中央部出土物の取り上げを開始。第33号トレンチはほぼ水没。

7月23日(火)小雨。第33号トレンチはポンプで排水しても水が引かず、水没部分を除いた東西壁の土層堆積について検討する。

7月24日(水)曇時々雨。第32号トレンチは遺物の取り上げが完了。第220号土坑のトレンチ東壁部分について土層堆積断面図を作成する。

7月25日(木)曇。第32号トレンチ北壁の土層堆積断面、平面での遺構確認状況について撮影。

7月26日(金)晴。第32号トレンチ北壁の土層堆積断面の作成を始める。第33号トレンチは底面が水没した状態のまま撮影。

7月29日(月)晴のち雨。第32号トレンチの土層堆積断面図および平面図を作成。猛暑のためトレンチにテントを設営して作業を進める(第13図1)。第220号土坑は土器5・6を取り上げた(第13図2)。

7月30日(火)晴。第32号トレンチの断面図および平面図の検討。第33号トレンチの東西壁の土層堆積断面図を作成する。

7月31日(水)晴。第32・33号トレンチの図面の補足。午後、重機による埋め戻し。

8月1日(木)晴。泉坂下遺跡より発掘機材を撤収し、宿尻遺跡へと搬入した。

6・7月に予定していた調査日数約40日のうち、降雨と調査区の水没により、10日間は作業ができなかった。第26号、第38号の住居跡は、ついに最終日も水没したままであった。泥化した状態で強引に調査を進めるよりは、将来の必要に応じて再調査をすべきとの判断から、不完全な観察と記録ながら、現地での調査を終了した。採取した土壌の水洗選別については、整理作業所において発掘期間中から継続し、11月1日に完了した。

Ⅲ 第32トレンチの調査

1 トレンチの概要

第32トレンチは、大グリッドのC6区とD6区を東西方向に横断して設定された。小グリッドの表記では5列に相当する。西端は、第2次調査の第12トレンチに接続し、第5次調査の第28トレンチに一部が重複する。トレンチの幅は2m、長さは21mである。(第14図)

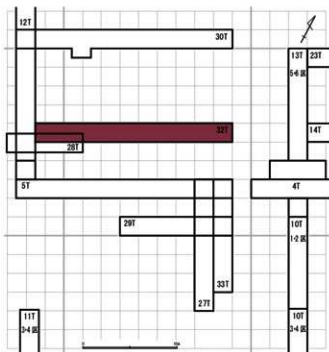
泉坂下遺跡保存委員会において、既往の調査区の配置が検討され、縄文時代の遺構が分布する第12・30トレンチと、弥生時代の遺構が分布する第4・27トレンチとの中間の地区に調査区を設けることが提言された。したがって第32トレンチの調査は、弥生時代中期の西群として括られた遺構分布の西側限界を明確にすることを主目的としているが、併せて縄文時代晩期の東側への伸張についても見極められるのではないかと期待された。

結果として第32トレンチからは、弥生時代の遺構は検出されず、再葬墓の時期の遺物も検出されなかった。一方、特にトレンチの東側においては、縄文時代晩期の遺構と遺物包含層が確認され、多量の資料が検出された。

2 トレンチ西部の遺構と遺物

C6i5区からD6b5区までを第32トレンチの西部として報告する。北壁際のサブトレンチは第Ⅱ3層まで、他は第Ⅱ2層の上りまでを掘り下げた。第12トレンチで検出された縄文時代晩期の第12号竪穴住居跡(S112)は、北壁には出現しておらず、これより南側で第32トレンチをかすめるものと見られるが、第Ⅱ2層上面においては明瞭な輪郭を捉えることができなかった。また、第28トレンチで検出された平安時代の第27号竪穴住居跡(S127)も、北壁には出現しておらず、これも第Ⅱ2層上面においては範囲を捉えることができなかった。

遺構として記録したのは、D6b5・c5区に位置する第227号土坑(SK227)、C6j5区の北壁に出現した第235号土坑(SK235)の2基である。第227号土坑は覆土第3層とした粘土が底面に貼られている。粘土の最大厚は2cmほど。第1・2層は人為的に埋められた土層のように観察されている。周囲には、10cmを超える礫が密に分布



第14図 第32トレンチの位置

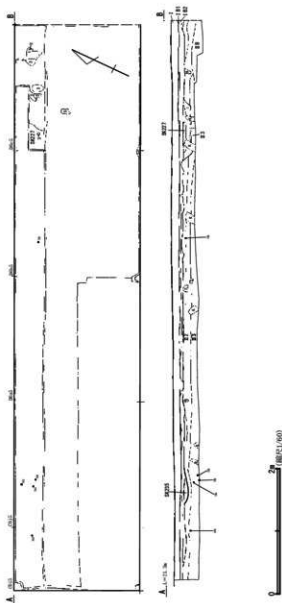
しており、土坑と関連する可能性があることから、これらは取り上げずに埋め戻した。第235号土坑は、部分的に出現した土層であり、既往の調査で検出された中世遺構の覆土に共通している。ともに時代を決定する資料は検出されていない。(第15図)

出土した土器は、縄文時代晩期前葉「大洞B・BC式」の時期にほぼ限定されている(第16図)。東部に堆積する遺物包含層の最下位に相当する時期までであり、これ以降の遺物がほとんど検出されないこと、第227・235号土坑が底面を残したような浅い掘り込みで検出されることも、東部の遺物包含層の上位に堆積した縄文晩期中葉の遺物がD6e5・f5区の境界付近で唐突に途切れることに関連し、耕地として整備するために旧地形が削平を受けていると推定される。

第32トレンチ西部の遺物では、土器(第16図、第34図28、第38図29・30、第41図5)の他に、土製品の土器片円盤(第43図4・5)、石器の石鏃(第45図21)、石鏃(第46図3)、藪石(第48図20)を掲載している。

3 第38号竪穴住居跡

D6c5区からD6i5区までが第32トレンチの東部とい



第15図 第32トレンチ実測図(1)

第222号土坑 (SK222) 堆積覆土

第1層: 黒褐色土層 (10YR3/2) ローム小ブロック微量, ローム粒子少量, Nt-S 微量, 小礫少量, Nt-S 微量, 焼骨粉微量含む 締まり強 粘性中)

第2層: 黒褐色土層 (10YR2/2) ローム小ブロック微量, ローム粒子少量, 小礫微量, Nt-S 微量含む 締まりやや強 粘性中)

第223 A号土坑 (SK223 A) 堆積覆土

黒褐色土層 (10YR3/2) ローム小ブロック少量, ローム粒子少量, 礫少量, 焼土粒子微量, Nt-S 微量含む 締まり強 粘性中)

第223 B号土坑 (SK223 B) 堆積覆土

暗褐色土層 (10YR3/3) ローム小ブロック微量, ローム粒子中量, 礫少量, 焼土小ブロック微量, Nt-S 微量含む 締まり強 粘性中)

第227号土坑 (SK227) 堆積覆土

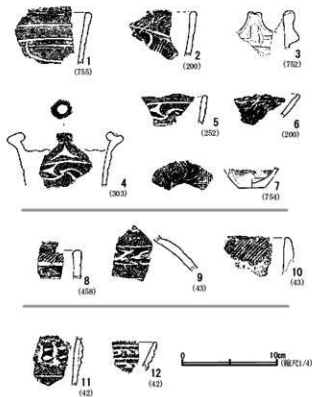
第1層: 黒褐色土層 (10YR3/2) ローム粒子少量, Nt-S 微量, 小礫微量含む 締まり強 粘性中)

第2層: 黒褐色土層 (10YR2/2) ローム小ブロック微量, ローム粒子微量, Nt-S 微量含む 締まりやや強 粘性中)

第3層: 黒褐色土層 (10YR4/1) 砂質粘土多量, ローム小ブロック微量, ローム粒子微量含む 締まり中 粘性中)

第235号土坑 (SK235) 堆積覆土

暗褐色土層 (ロームブロック, 黄白色粘土ブロックが混じる)



1~7: C6i5~C6j5区, 8~10: D6a5区, 11・12: D6b5区

第16図 第32トレンチ西部出土土器

第224号土坑 (SK224) 堆積覆土

黒褐色土層 (10YR3/2) ローム小ブロック微量, ローム粒子少量, Nt-S 微量, 礫少量, 焼骨片微量含む 締まりやや強 粘性中)

第225号土坑 (SK225) 堆積覆土

黒褐色土層 (10YR3/2) ローム小ブロック微量, ローム粒子少量, Nt-S 微量, 小礫微量含む 締まり強 粘性弱)

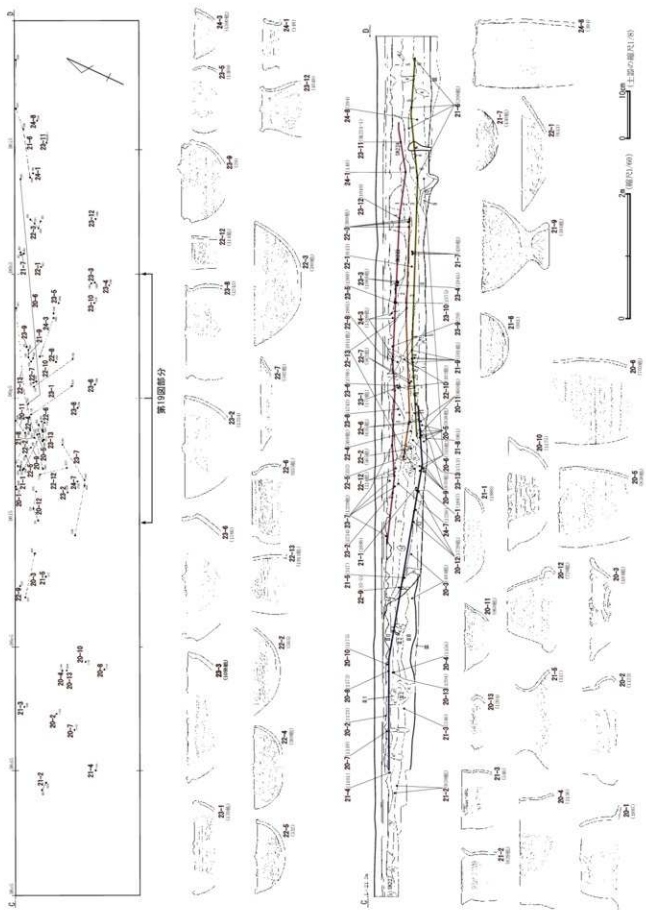


第17図 第32トレンチ実測図(2)

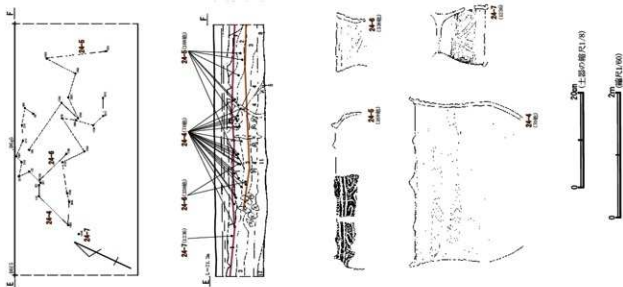


第32トレンチ北壁土層断面図

- 第1層：黒褐色土層 (10YR3/1) ローム粒子微量，焼土粒子微量，小礫微量含む 締まりやや強 粘性中
- 第2層：黒色土層 (10YR1.7/1) ローム小ブロック微量，ローム粒子微量，焼土粒子微量，礫微量含む 締まり中 粘性中
- 第3層：黒色土層 (10YR2/1) ローム粒子微量，焼土粒子微量，小礫微量，焼骨粉微量，炭化物小片微量含む 締まり中 粘性中
- 第4層：黒褐色土層 (10YR2/3) ローム小ブロック微量，ローム粒子少量，NT-S微量，焼土粒子微量，炭化物微量含む 締まり中 粘性中
- 第5層：黒色土層 (10YR2/1) ローム小ブロック微量，ローム粒子微量，小礫微量，焼土粒子微量含む 締まり中 粘性やや強
- 第6層：黒褐色土層 (10YR3/2) ローム小ブロック微量，ローム粒子少量，NT-S微量，焼骨粉微量含む 締まり中 粘性強
- 第7層：暗褐色土層 (10YR3/3) ローム小ブロック少量，ローム粒子中量，NT-S・NT-I 微量含む 締まりやや強 粘性強
- 第8層：暗褐色土層 (10YR3/3) ローム小ブロック微量，ローム粒子中量，NT-S・NT-I 微量含む 締まりやや強 粘性強
- 第9層：にぶい黄褐色土層 (10YR7/2) 灰多量 焼骨片含む 締まり弱 粘性弱
- 第10層：赤褐色土層 (10YR4/8) 焼土 締まり弱 粘性弱
- 第11層：灰黄褐色土層 (10YR4/2) ローム中ブロック少量，ローム小ブロック少量，ローム粒子中量，NT-S微量，焼土粒子微量含む 締まりやや弱 粘性強
- 第12層：にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) ローム小ブロック中量，ローム粒子多量，NT-S微量，焼骨粒微量含む 締まり弱 粘性強



第18図 第32トレンチ遺物出土状況図(1) (第20～24図掲載土器)



第19図 第32トレンチ遺物出土状況図(2) (第24図掲載土器の一部)

うことになるが、ここに検出された住居跡と遺物包含層が第32トレンチの調査を代表する。

表土(第1・1B層)下で検出され、遺構として記録したのは、第222・223A・223B・224・225号土坑の5基である。これらはいずれも極部分的な調査であり、平面および断面図への記録と、覆土の観察を記載するにとどめる。時代を決定する資料を欠くが、覆土の特徴は少なくとも縄文・弥生時代の遺構のものではない。これらの掘り込みにより、遺物包含層の一部は攪乱を受けている。また、他の調査区と同様、動植物の特にモグラによる攪乱は随所に見られた。

表土(第1・1B層)下において縄文時代晩期の土器が出土し、その周囲のD6e5区の東端からD6g5区にかけて、黒色系の土層堆積が広がることが観察された。D6d5区では「大洞BC式」、D6f5区では「大洞C2式」を主体としており、時期が異なることから、2基の重複の可能性を考慮しながらも、この範囲について第38号竪穴住居跡(Si38)の番号を付した。降雨によりトレンチ全体が水没する事態が起きたため、北壁側に幅50cmのサブトレンチを設定し、東方向に傾斜を持たせて掘り下げることで、これをトレンチの排水溝としながら調査を進めることになった。

D6e5区のサブトレンチにおいて、第Ⅱ2・ⅡB層が途絶え、黒色土が堆積することから、これらの土層を掘り込んで遺構が形成されたことは確実であり、住居跡竪穴の西側に相当することが考えられた(第17図)。これは

表土下で検出された黒色土の西端よりも3m余東側に位置し、「大洞BC式」が検出されていた部分よりも東側に相当する。この時点で想定されたのは、「大洞BC式」の包含層を掘り込んで「大洞C2式」の住居が構築された可能性であった。ところが、調査が進むにつれて、「大洞BC式」の遺物を包含する土層は、住居跡の床面を覆うようにD6f5区へ連続するらしく、「大洞C1式」を包含する土層を挟んで、「大洞C2式」を包含する土層が上位に堆積することも明らかになってきた。D6e5区からD6h5区までの床面に段差と捉えられるような高低差はなく、この範囲にはローム土が硬化したブロックが観察されている。つまり、床面からは、これが連続する1基の住居跡のように窺える。第9層の灰層と第10層の焼土層が炉址に伴うもので、これを中央とするならば、床面の直径が13mほどの住居跡ということになる。竪穴の深さは、少なくとも第Ⅱ2層上面からの40cmほどを見積もることができる。仮に、「大洞BC式」を包含する土層がD6f5区の西端あたりで途切れることを、古い住居と床面の高さが等しい新たな住居の掘り込みによると見るならば、2基の住居跡の重複と捉えられなくてもいい。但し、これには、不可解な構造の住居を考えなければならないことになる。いずれにしても、天候による悪条件の下での狭い範囲の調査で、早急に結論を出すことはできない。なお、第9層の灰層中には、多量の焼骨片を含むことが調査中にも注意され、発掘調査で検出された骨がD6h5区に多いのは、この灰層に由来する(第



第20図 第32トレンチ出土土器(1)

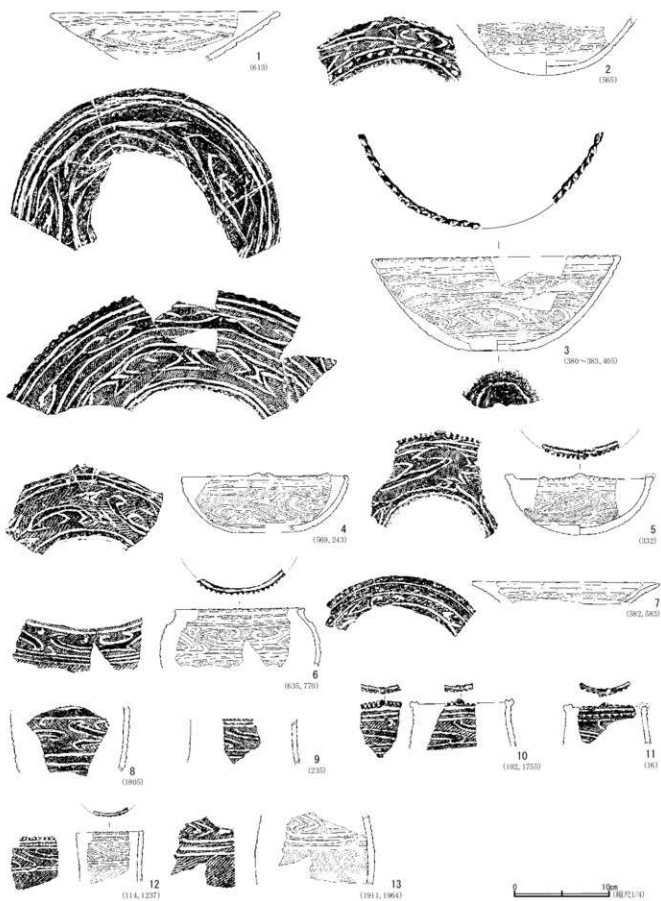


第21図 第32トレンチ出土土器(2)

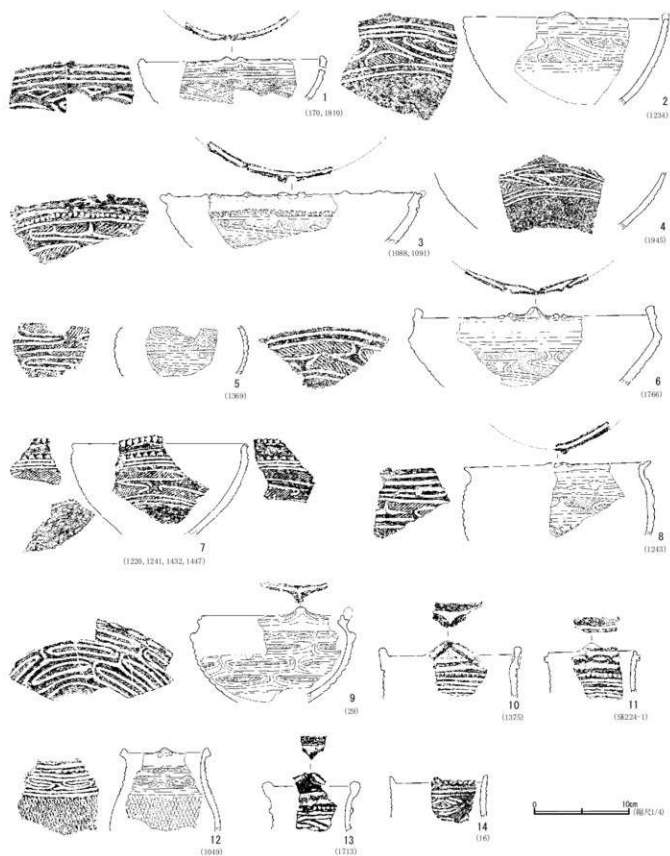
13表)。灰層の一部については、試料として採取し、水洗選別を実施した(第14表)。

サブトレンチ底面に相当する住居跡の床面についても、水没により精査はできていない。住居の時期は、1

基の住居跡であるなら、「大洞BC式」以前の晩期前葉とするのが確実なところであろう。第26号竪穴住居跡については、床面から残存率の高い1個体の「安行3a式」が出土して晩期初頭と判断されたが、覆土最下層の



第22図 第32トレンチ出土土器 (3)



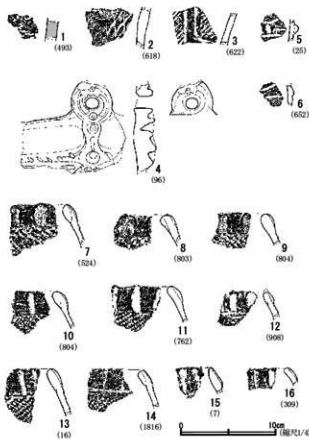
第23図 第32トレンチ出土土器 (4)

第7・8層は主に「大洞 BC 式」を包含する土層であったことも考慮している。2基の住居跡の重複であるなら、

新しい住居は「大洞 BC 式」以後で「大洞 C1 式」以前ということになる。



第24図 第32トレンチ出土土器(5)



第25図 第32トレンチ出土土器(6)

4 遺物包含層

遺物包含層は、第38号竪穴住居跡を覆う土層堆積ではあるが、西方向へは住居跡の西端を超えて広がる事が確認されている。また、「大洞BC式」から「大洞C2式」までの遺物の出土層準を検討してみると、西から東へと下る傾斜が見られ、特に上位に堆積する「大洞C2式」の分布がD6f5区東端の表土下で唐突に途絶えることは、これより上部が削平されていることを推定させる。南北方向への広がりには明らかでないが、第27・33トレンチにおいても遺物包含層が第26号竪穴住居跡の範囲を超える広がりを見せており、その形成時期はほぼ一致している。遺物包含層が形成される端緒は、それぞれに形成された住居跡地点の窪みあったとしても、竪穴をほぼ埋め尽くして後も継続的に遺物包含層が形成され、住居跡の輪郭を超えた広がりが予想される。日立市大近平遺跡(大賀²⁰¹⁵)の晩期においても、住居跡を覆って「遺物包含層1」(13×5m)、「遺物包含層2」(20×18m)が検出されている。今回の報告では、これを住

居跡覆土とは区別して、遺物包含層として報告する。

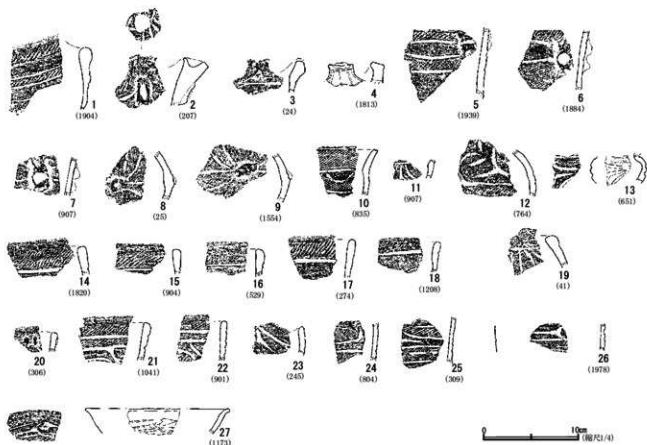
発掘調査の進行については、第38号竪穴住居跡において記載したとおり。最終的に記録された北壁の土層堆積断面図にも、2基の住居跡を考慮した迷いが看取できるはずである。

遺物包含層の土器については、まず、型式を判断できる個体のうち残存率が比較的高いと見られるもの(第20～24図)について、出土した位置を図化した(第18・19図)。型式が判断できても単一の破片で小さなものは、攪乱により、その位置を移動している可能性があることから、この作業から除外した。実際に、同一個体の破片が分布する土器について図化してみると、破片の垂直位置には大きな高低差が見られるものがあった。これらの出土位置の点を、同じ型式のものについて結ぶことで、これを型式ごとの層準として捉えている。なお、出土状況図に示していない遺物については、出土した垂直位置に相当する層位を第3表に記載した。

「大洞BC式」(第20図2～第21図1)はD6d5区からD6f5区に堆積した最下位に相当する土層中から出土している。D6d5区では表土下に出現し、D6e5区では住居跡の掘り込みの壁際に堆積した土層の傾斜に合致するように東方向へ下り、D6f5区では住居跡の床面上に堆積した土層中に包含されて、地表下70cmほど、床面上10cmほどの位置に集中する(第18図に青線で表示)。第II0層と第11層の堆積が、これに相当する。同じ層準には、「大洞B式」の注口土器(第20図1)、「安行3b式」の浅鉢形土器(第20図3)の破片も出土している。但し、住居跡外となるD6d5区辺りでは、「大洞C1式古段階」の土器(第21図2・3)と垂直位置が逆転しており、ここには確認できなかった攪乱があるのか、測量か記録に誤りがあったのかもしれない。

「大洞C1式」(第21図4～第22図1)は、主にD6f5区からD6i5区に堆積し、「大洞BC式」の上位に相当する土層中から出土している。地表下60cmほど、床面上20～25cmほどの位置に集中し、この範囲では堆積がほぼ水平である(第18図に緑線で表示)。第5・6層境界から第3・4層中までを横断するように層準が捉えられている。

「大洞C2式」(第21図4～第22図1)は、層準が2つ認められた。地表下30cmほど、床面上50cmほどの位置に集中するのは、遺物量が多いことから、明瞭である(第18



第26図 第32トレンチ出土土器(7)

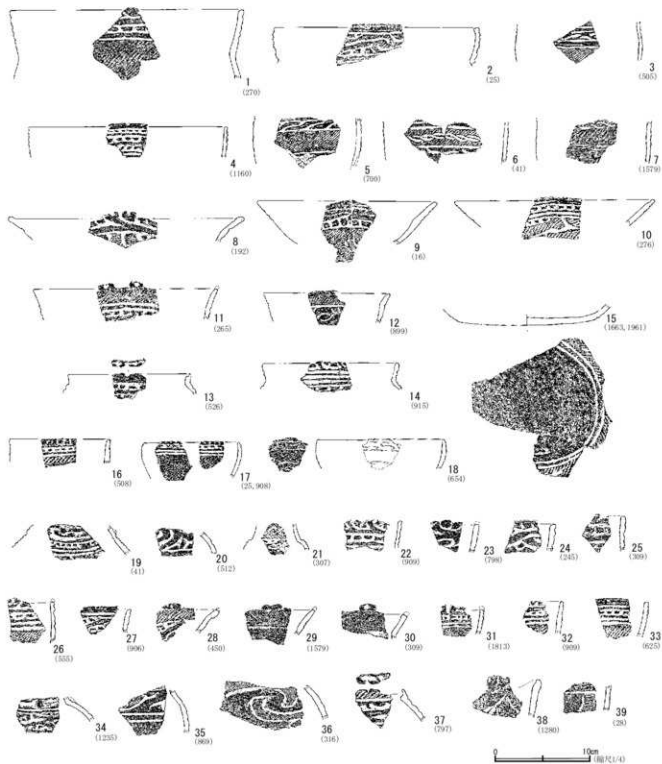
図に赤線で表示)。これは、遺物包含層の最上位である第1層にほぼ相当する。一方で、地表下50cmほど、床面上30cmほどの位置にも分布が認められた。これは、第2層下部から第3層中までを横断するように層準が捉えられている(第18図に橙線で表示)。下位の層準は、「大洞C2式」でも「古段階」(山内#2018)の土器群(第22図3~6・13)、上位の層準は、「中・新段階」(山内#2018)に相当する。これらの層準の間からは、「前浦式」(第24図4~7)が出土しており、「大洞C2式」に伴うことが確実である(第19図)。また、上位の層準付近には、「大洞A式」(第24図3)、弥生時代前期の土器(第24図2、第30図39)も散見されたが、その出土位置は、「大洞C2式中・新段階」の層準と明確に区分することができない。

このようにして捉えられた層準を基礎とすれば、粗製深鉢形や無文浅鉢形などの土器群が伴う細別型式を、出土した位置から検討することができるようになる(第33図)。層準が接近している箇所では、同一個体の大部分の破片(第37図25~27)が「大洞C2式古段階」の層準にありながら、一部(第37図28)が「大洞C1式」の層準に

落ち込んでいる事例も見られるが、粗製深鉢形の変遷の大局は、「大洞BC式」には歯歯状工具による条線文、「大洞C1式・C2式古段階」には網目状燃糸文、「大洞C2式中・新段階」には網目状燃糸文とともに単輪絡条体による燃糸文が特徴的である。積上成形痕と指頭圧痕を残した無文の深鉢形(第37図25~28)は、「大洞C2式古段階」に伴うものらしい。無文浅鉢形については、ほぼ同じ法量と形態が「大洞BC式」の層準(第39図28)、「大洞C2式中・新段階」の層準(第39図27)から出土しており、この器種が異なる細別型式にも組成することが考えられた。

また、同じく層準を基礎として、土製品・石器・石製品・骨角器についても、所属する土器型式の時期を出土位置から検討することができるようになる(第42図)。人工の遺物としては報告に記載していないが、メノウ礫4点が集中して出土したのは、近接して出土した土器(第20図12)からも明らかのように、「大洞BC式」の層準であった(図版5-1-2)。

石棒製作について、「大洞BC式」の層準から出土し

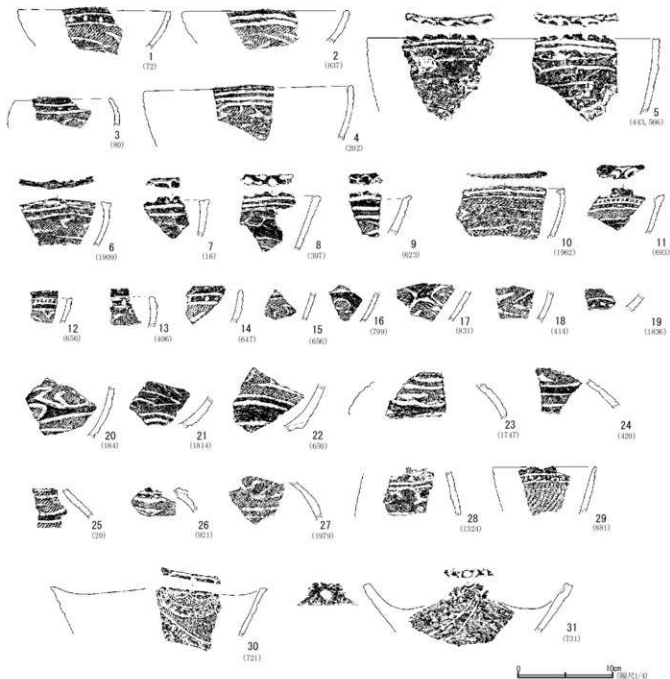


第27図 第32トレンチ出土土器(8)

たのは、三波川変成帯の石材で製作された石剣のみであり、すべてに被熱痕が観察された。つまりは、成品が搬入されて使用されたと考えられる状況である。砥石は小片のみであり、確実に伴うものか、さらに石棒製作の工具であるのか断定できない。「大洞C1式」の層準からは、敲打段階の未成品の大破片(第51図12・13)とともに、固定式であることが確実な砥石が2点(第50図1・2)、さら

に擦切具が1点(第46図6)など石棒製作の工具が出土した。「大洞C2式古段階」の層準にも剥離段階の未成品(第51図6)が、「大洞C2式中・新段階」の層準にも剥離・敲打・研磨段階の未成品とともに砥石(第50図10・11・14~16・18)や擦切具(第46図5)が出土している。

以上の層準と遺物の関係は、北壁沿いのサブトレンチの部分を中心に組み立てられたものである。平面的に



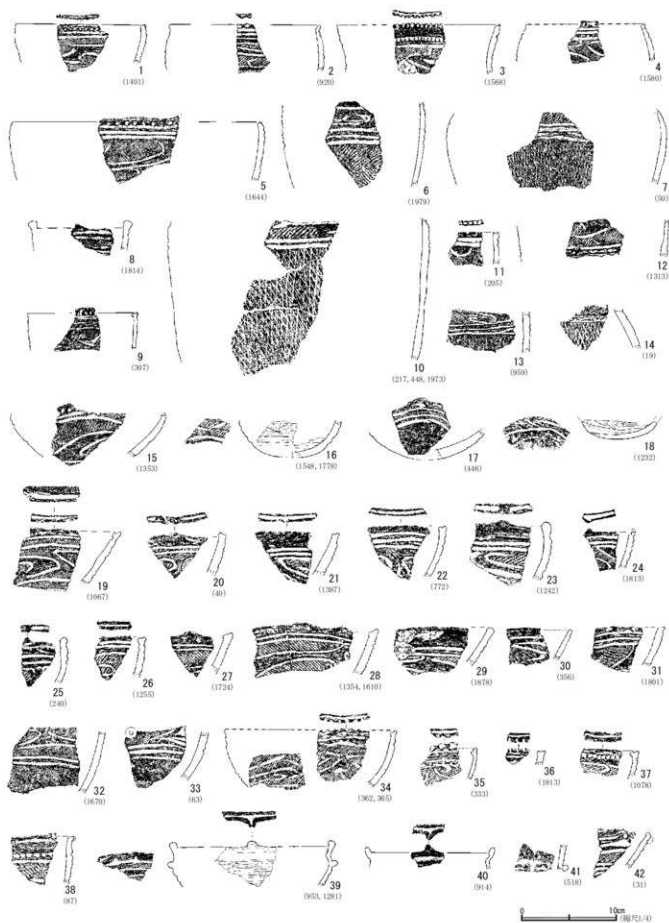
第28図 第32トレンチ出土土器(9)

は、北側に偏った分布を見せるが、これは、南壁沿いの幅50cm部分については基本的に表土のみを除去し、中央の幅1mについては遺物が出土した位置で止めたことによる。遺物の位置は可能な限り点で記録するように努めたが、小破片のほとんどは一括で取り上げるようになった。その場合も地表面からの深さを記録して、最終的な層位に対応する範囲を示した。土壌サンプルを計画的に採取することはできなかったが、第33トレンチとの比較のために、中央の幅1mに露出した遺物を取り上げた後、土柱として残された土壌をグリッドごとに採取

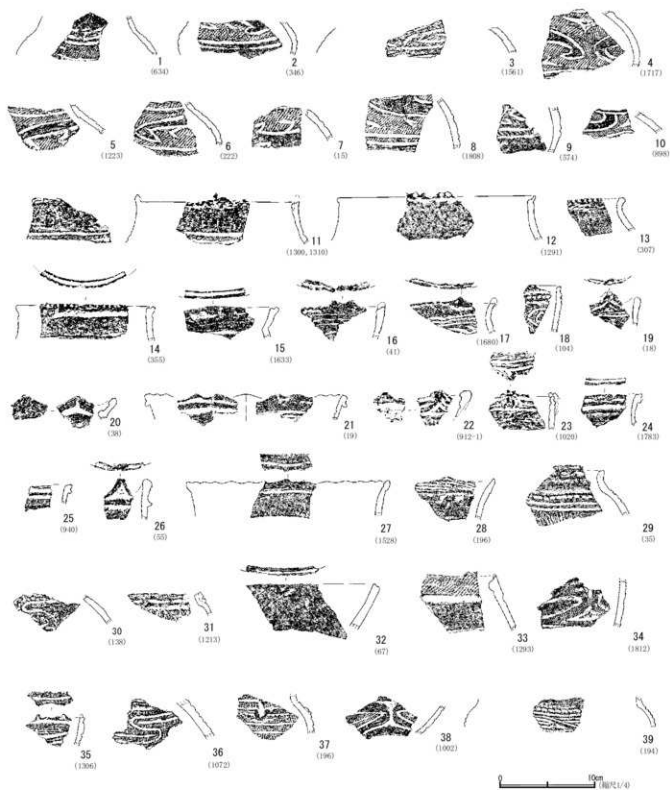
し、土壌中に含まれた遺物を水洗選別した。水洗選別の遺物で報告に加えたのは、石鏃7点、使用痕のある剥片1点、骨角器1点であるが、石棒製作関係の破片の他、動植物遺存体等(第12表)も検出されている。

5 土器

遺物包含層から出土した土器のうち、器高や口・頸・胴・底の各部位が残存し、各部位あるいは最大値の直径を復元したものについては、計測値・推定値を一覧表(第2表)にまとめている。各部位の直径が残存率50%以



第29図 第32トレンチ出土土器 (10)



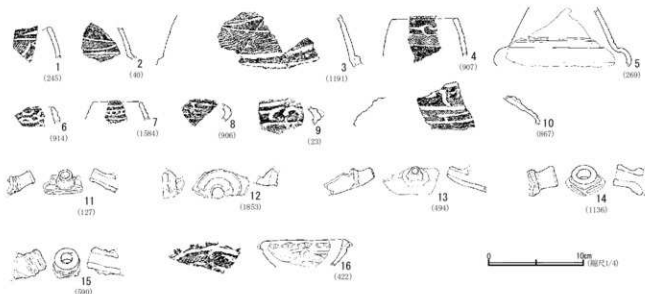
第30図 第32トレンチ出土土器 (11)

上は計測値、50%未満は推定値であり、残存率は特に推定値の信頼度と理解されたい。また、掲載した土器の全てについて出土位置と、観察のうち特記事項のみを一覧表(第3表)にまとめてある。文様については、拓本からの判別が難しい縄文原体にほぼ限定して記載してい

る。

前・中・後期 遺物包含層形成以前の遺物も少量ながら出土しており、縄文時代前・中・後期の遺物を一括した(第25図)。

1は、前期中葉の所謂「繊維土器」である。縄文では



第31図 第32トレンチ出土土器(12)

ないかと見られる施文の一部が残るが、繊維の脱落で器面がほとんど観察できない。既往の調査では「植房式」が確認されている。2は、前期後半の土器である。ハマグリのような放射肋のない貝殻による貝殻波状文が施された胴部破片であり、「浮島式」「興津式」のいずれかは判断できない。第5トレンチで報告された破片(後藤2013)と同一個体の土器である。

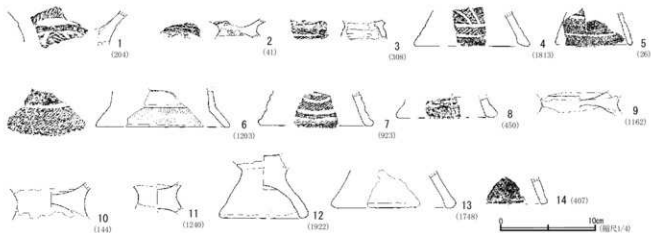
3は中期後葉「加曾利E3式」、4は後期前葉「綱取2式」の深鉢形土器である。これらの時期の土器は、泉坂下遺跡では初めて検出された。4は、破断面のほとんどが溶けたように摩滅している。

5・6は後期後葉「安行2式」の深鉢形土器である。7～16は、口縁が内湾する深鉢形土器であり、「茨城県北部から福島県南部の地域に特徴的な粗製土器」(鈴木2005)に相当する。この土器群には、高萩市小場遺跡(沼田1986)の第25号住居跡に良好な資料が報告されていることから、これに「小場類型」の名称を与えておきたい。「小場類型」については、「A類 口縁部に貼付された隆帯上に、指頭による押圧文が施されたもの」「B類 肥厚した口縁部に、指頭による押圧文が施されたもの」「C類 肥厚した口縁部に、棒状もしくは篋状工具による刺突文が施されたもの。刺突文部分が沈線帯状に区画されたものもある」と分類した。小場遺跡第25号住居跡は「安行1式」に伴い、A類とB類が認められる。A類の縄文は単節RL、B類は単節LRであった。7～15はB類であるが、これにも沈線による区画が施さ

れたもの(14)を認めた。また、縄文には単節RL、と単節LRの両方がある。いずれも口縁部の肥厚は、口縁内側への積上により成形されている。「安行2式」に伴うものと考えられる。16のみはC類に相当し、晩期初頭に下るものかもしれない。

大洞B式・安行3a式 晩期初頭の「大洞B式」及び「安行3a式」の土器群(第20図、第26図、第31図)は、全て破片であり、遺物包含層中に散在する。1～19(第26図)は「安行3a式」、20～25は「大洞B1式」(IV章参照)。「紐線文系」の19は、おそらく搬入された土器であろう。26・27は、「大洞B2式」。口径15cm・胴径25cmを前後する大型の注口土器(第20図1、第31図3)が中型・小型とともに組成する。この大型注口土器は、晩期前葉に特徴的であり、中葉には注口土器そのものの数が少ない。

大洞BC式・安行3b式 晩期前葉の「大洞BC式」の土器群(第20図、第21図、第27図、第31図)と、これに伴う「安行3b式」(第20図、第27図)の土器群は、第11層を中心に遺物包含層を形成していた。残存率が比較的高い破片については、法量と形態を復元して実測図を作成した。「大洞BC2式」の精製深鉢形には、大田房貝塚の「大洞B1式」(第87図)と同じように、大型(第4図4、第27図1)・中型(第4図5・7)・小型(第4図8)の法量がある。形態は、口縁がやや内湾し、胴部が単純に開くもの(第20図5・7・8)と、頸部下が膨らむもの(第20図4・6、第27図2)とがある。縄文は、単節LRが支配的であり、結節



第32図 第32トレンチ出土土器(13)

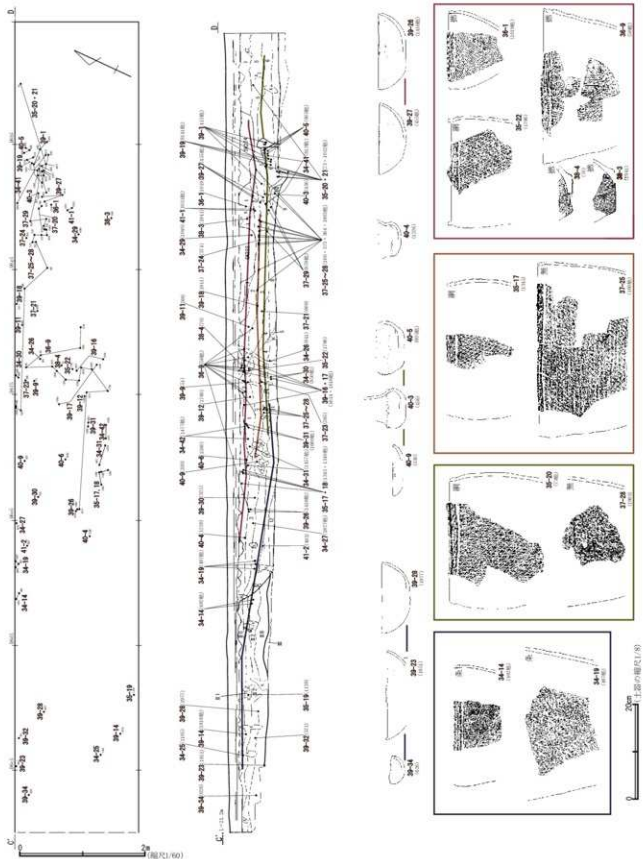
文(第20図5~7)が多用される。この結節文を模倣した沈線文(第20図8、第27図6・7)も見られた。浅鉢形の縄文もほとんどは単節LRであるが、1点(第20図10)のみ反撚り縄文LLを認めた。13は香炉形土器。大近平遺跡(大賀2015)の遺物包含層1に類似がある。「安行3b式」は、浅鉢形(第20図3)の他に、波状口縁(第27図38)、細密沈線文の深鉢形(39)の小破片が検出されている。

大洞 C1式・安行3c式 晩期中葉「大洞 C1式」の土器群(第21・24・28図)は、第3層を中心に遺物包含層を形成していた。精製深鉢形は、3点(第21図2~4)とも小型である。そのうち2点(2・3)には「二溝間の截痕」が施されており、「古段階」(第91図)に位置付けられるものであろう。その他、無文部が窪む浮彫文の様が特徴的な壺形、浅鉢形、台付鉢形を抽出した。ほぼ全体が復元された台付鉢形(第21図9)は、縄文が無で消されており、その施文の痕跡がわずかに観察された。よく似た脚台部が他にも出土している(第32図12)。30(第28図)については、位置付けに苦慮しながらも、口唇部の加飾に「大洞 C1式」との共通を認めて、ここに記載しておく。縄文は、オオバコ状の偽縄文と観察している。31は「安行3c式」の浅鉢形であろう。第5トレンチ(後藤2013)に同一個体の波頂部破片が報告されている。8(第24図)は、3単位の波状口縁で、口縁部が無文、胴部に無節Lの縄文が施文されている。同じ類を見ないが、出土層位から「大洞 C1式」に伴うと判断し、ここに記載した。

大洞 C2式・前浦式 晩期中葉「大洞 C2式」の土器群(第22~24・29~30・32図)は、第1・2層に遺物包含

層を形成していた。第1層と第2層下部の2つの層相が認められ、第2層下部が「大洞 C1式古段階」、第1層が「大洞 C2式新段階」と捉えられる。「古段階」の深鉢形は、胴上部に磨消縄文で文様が構成され、胴下部にも縄文が施文されるものがある(第22図8~13、第23図14、第29図1・3・6)。「中・新段階」の深鉢形は、胴上部に沈線のみで文様が構成され、ほとんどの胴下部には網目状撚糸文が施文されるようになる(第23図10~13)。深鉢形及び浅鉢形、台付鉢形の口唇部には、沈線文と外側の刻みが施されたものが典型である。「新段階」には、口縁部の器内面に沈線が巡り、波頂部に三叉文を描く(第23図9・10・13、第29図39・40)。脚台部(第24図7、第32図)の多くは、「大洞 C2式」のものと考えられ、第5トレンチ D6h8区(第61図)のように、鉢下部が広く無文のもの(第23図2・7、第29図32・33)や、口縁部が屈曲するもの(第23図3・6、第29図39・42)は、台付鉢形と考えられる。「大洞 C2式」に伴い、「前浦式」の3点の深鉢形(第24図4~6)が近い位置から出土している。特に4と5は、形態が異なるものの、作風とでも表現すればよいのか、よく似ている。その他に、破片も2点(第30図33・34)が検出された。なお、「大洞 C2式」の深鉢形で器外面に煤状の炭化物が付着し、煮沸具と考えられる大型(第29図10)と小型(第29図11)の器内面には、赤色顔料の付着が観察された。装飾の赤彩とは考え難く、赤色顔料の製作に伴うものではないかと想定している。

大洞 A式 晩期後葉「大洞 A式」の土器(第24図3)がわずかに出土した。単独の包含層は形成しておらず、D6g5区において「大洞 C2式」に混在する。小型の浅

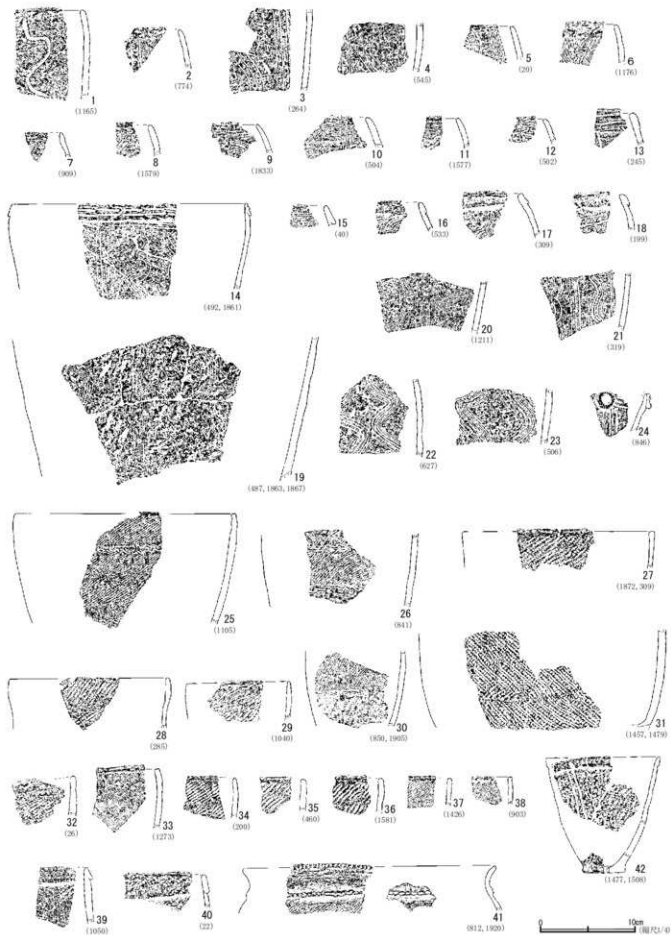


第33図 第32トレンチ遺物出土状況図(3) (第34～41図掲載土器の一部)

鉢形であり、口縁部に「工字文」が施文されている。

弥生前期 弥生時代前期に位置付けられるのではないかと考えている土器群が、少量ながら見られた

(第24図2、第30図38)。単独の包含層は形成しておらず、D6h5・i5区において「大洞C2式」に混在する。38(第30図)には、菱形区画内に縄文が施され、中央に横位の



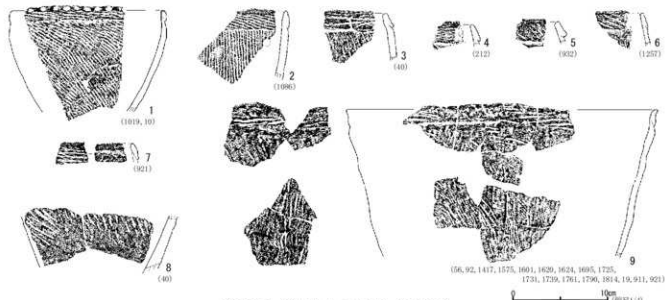
第34図 第32トレンチ出土土器 (14)



第35図 第32トレンチ出土土器 (15)

沈線文という構成が見られる。最近に発掘調査を実施した常陸大宮市中台遺跡では、弥生時代前期の土器群がま

とまって出土しており、今後の整理において、この土器群についても検討を加えることになろう。



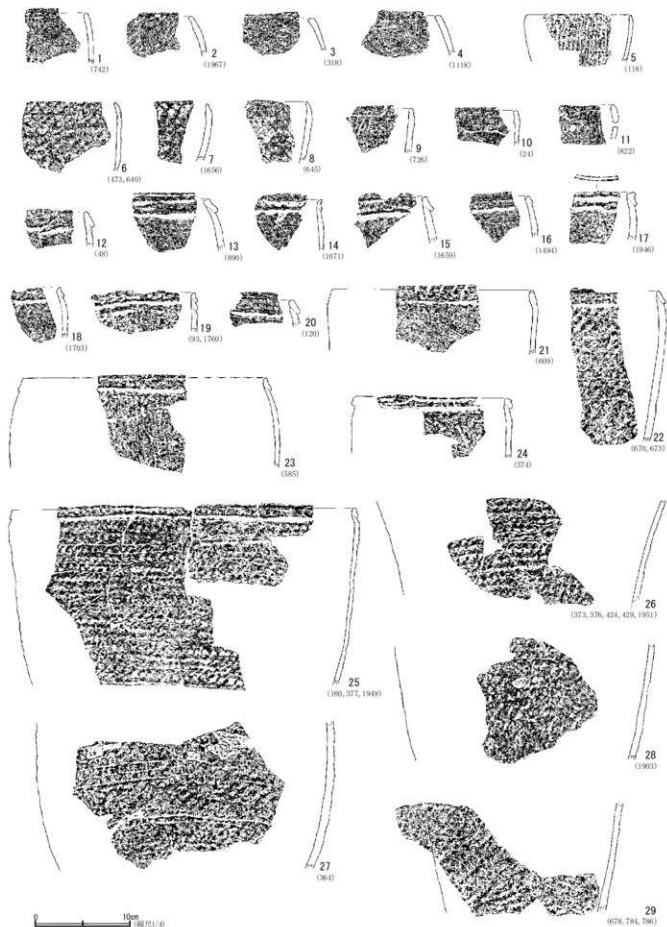
第36図 第32トレンチ出土土器 (16)

粗製深鉢形の法量 晩期の各型式に伴う粗製の深鉢形には、施文により条線文土器、縄文土器、網目状燃糸文土器、燃糸文土器、無文土器のそれぞれがある。しかし、法量については、復元できる資料数が少ないことから、総合しての分類とならざるを得ない。口径を指標とすれば、口径36cm前後の大型(第36図9、第37図25)、口径26cm前後の中型(第34図14・25、第35図17・19・20・22、第37図23、第39図1)、口径15cm前後の小型(第34図28、第36図1、第37図24)の類に分けることができ、中型への集中が窺える。胎土はいずれも砂粒を多く含むことを典型としている。また、器内外面に炭化物が付着したのも多く、これは煮沸具として使用された痕跡と考えられる。

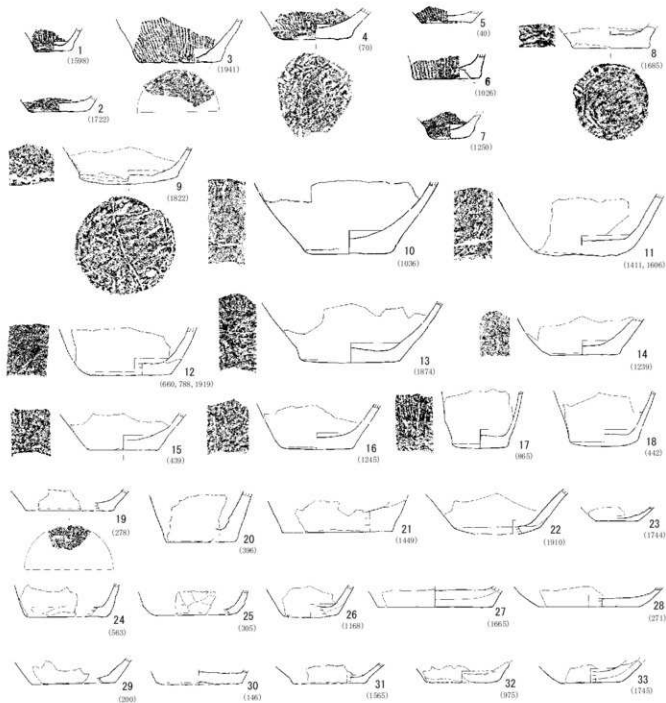
条線文土器 条線文が施された土器(第34図1~24)は、口径が復元された中型(14)の他に、胴径から大型と想定されるもの(19)もある。ほとんどの口縁が内湾する。24のみは、頸部で括れて口縁がやや外反する形態であり、肩部に円形の貼付文が見られる。これと共通する形態、貼付文は、第27トレンチ第180号土坑の土器に見ることができる(後藤2016)。口縁部には、複合口縁と単純口縁があり、単純口縁の方が多い。複合口縁には、半截竹管状工具で引掻くような横位の短沈線文が施されたもの(13・14)、横位の条線文が施されたもの(15)がある。複合口縁の成形と胴部条線文の順序は、観察できたもの全てが、複合口縁の成形の後に胴部条線文を施文している。単純口縁には、口縁部から直に縦位

の条線文を施すもの(1~8)と、口縁部に横位の条線文が巡るもの(9~12)とがある。横位と縦位の施文順序には、横位の後に縦位、縦位の後に横位の両方が観察された。胴部の条線文は、波状と直状を交互に施文する構成を基本とする。条線には、幅広な1本(1)、5本前後(2~4など)、10本前後(19・22など)がある。14の条線文は、横位と縦位直状が3条に見えるが、縦位波状には5本まで確認でき、条の間隔が一致することからも、これらは同一の施文具による。

縄文土器 口縁部を含む破片については、ほぼ器外面全体に縄文が施文された土器であったと考えられるが、胴部の大破片については確実でない(第34図25~40)。口径が復元された中型(25)、小型(28)の他に、その中間の法量(27)、小型を下回る法量(29)、さらに胴径から大型と想定されるもの(31)もある。やや内湾する口縁もあるが、ほとんどは直立に近い。口縁部には、複合口縁と単純口縁があり、単純口縁の方が多い。複合口縁の2点(39・40)は、口縁がやや内湾する。複合口縁の成形と胴部縄文の順序は、観察できた40が、複合口縁の成形の後に胴部縄文を施文している。これは口縁部にも縄文が施文されており、原体の回転は口縁部も胴部も横方向である。縄文原体は、単節がLR、無節がLにはば限られており、31に施文された1段3条(細条2と太条1)の単節のみRLである。この31は、器内面の下端に底部へ続くと考えられる突出があり、そうすると底径が20cmほどに推定されることから、特異な形態のもの



第37図 第32トレンチ出土土器 (17)

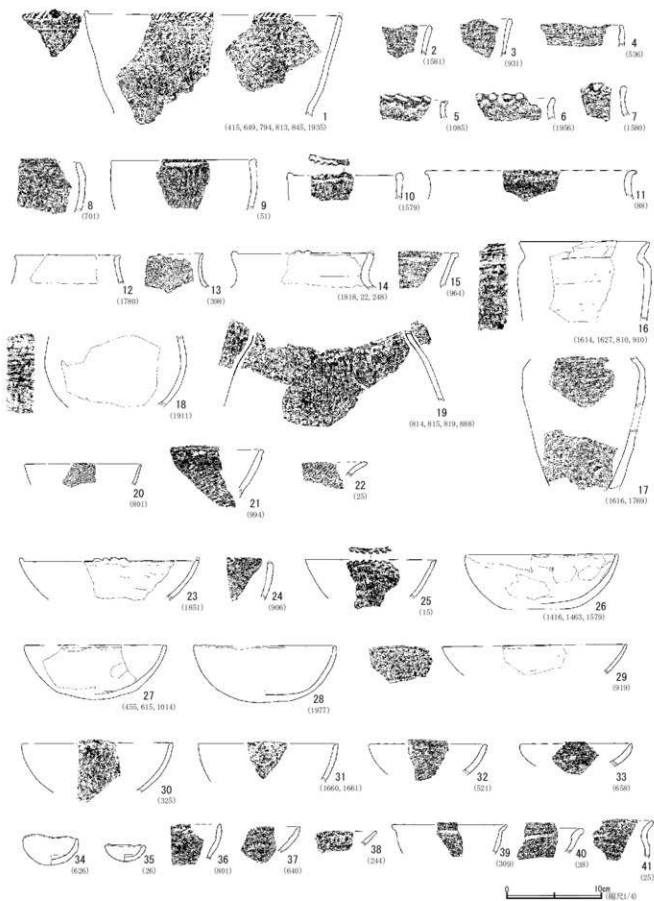


第38図 第32トレンチ出土土器 (18)

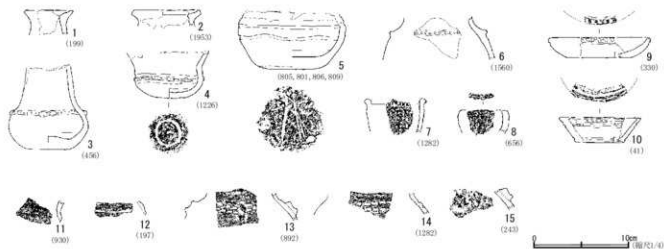
である。25・26には結節文も施文されており、これらは「大洞BC式」に伴うことが考えられる。41は、形態が異なり、頭部が括れて口縁部が外反する。口唇部には篋状工具による刻みが施され、口縁部が無文、頭部に刺突が加えられた隆帯が巡る。出土層位からは、晩期中葉に伴うと考えられる。

網目状燃糸文土器 単軸絡条体第5類A種の網目状燃糸文が施された土器(第35図1~21)には、口径が復元された中型(第35図17・19・20・22)がある。ほとんどの

口縁が内湾する。口縁部には、複合口縁と単純口縁があり、条線文土器とは逆転して複合口縁の方が多い。単純口縁の3点(1~3)は、網目の変形が長軸を横位にすることから、絡条体の回転も横方向と見られる。一方、複合口縁は、口縁部では網目の変形が長軸を横位にし、胴部では網目の変形が長軸を縦位にするものが多い。つまり、口縁部では横方向、胴部では縦方向に絡条体が回転されている。14・19のみ胴部が横方向の回転であり、これらの複合口縁は無文である。複合口縁には、棒状工



第39図 第32トレンチ出土土器 (19)



第40図 第32トレンチ出土土器 (20)

具で引掻くような横位の短沈線が施されたもの(4)もある。10には、複合口縁を帯状に形成した繫目が残されており、22には、口唇を小波状に突出させている。複合口縁の成形と胴部襷糸文の順序は、観察できた14が、複合口縁の成形の後に胴部襷糸文を施文している。絡条体の条の燃りは、1段にRとLの両方があり、0段はrのみであった。なお、17の口唇部には、ネズミの齧り痕がされている。

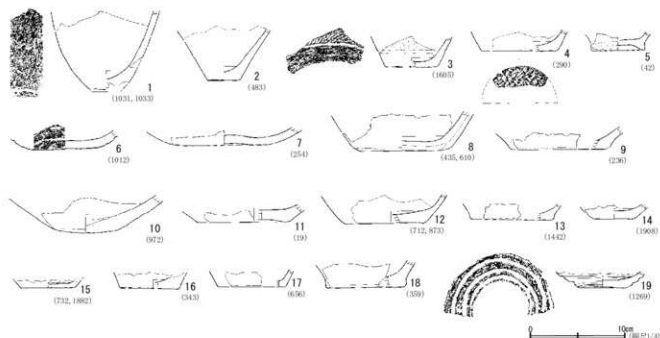
襷糸文土器 単軸絡条体第1類の襷糸文が施された土器(第36図1~9)には、口径が復元された大型(9)と小型(1)がある。小型は口縁が内湾する形態、大型は口縁が開く形態。ほとんどは口縁が内湾し、全て複合口縁である。口縁部にも襷糸文が施文され、口縁部は横方向に、胴部は縦から斜め方向に絡条体が回転されている。複合口縁の成形と胴部襷糸文の順序は、観察できた全てが、胴部に襷糸文が施文された後に口縁部を成形している。それは、口縁部の重なりの下に襷糸文の施文が斜ること、剥落した口縁部の破断面に襷糸文の印象が残されている(7)ことから確実である。条線文及び網目状襷糸文の土器とは、この成形と施文の順序を異にする。絡条体の条の燃りは、1段にRとLの両方があり、0段はrのみであった。

無文土器 無文の粗製土器には、口縁が内湾する形態(第37図1~29、第39図4)、口縁が開く形態(第39図1)、頸部で括れて口縁が外反する形態(第39図5~7・16)がある。口縁が内湾する形態には、口径が復元された大型(第39図25)、中型(23)、小型(24)、さらに中型と小型の中間の量もある。口縁が開く形態は中型、頸部で括

て口縁が外反する形態は小型(第39図16)。口縁が内湾する形態の口縁部には、複合口縁と単純口縁があり、複合口縁が多い。単純口縁のうち、体部が削りて調整され斜めの擦痕が残る類(第37図7図1~4)は、出土層位から晩期前葉に伴う。既往の調査では、第27トレンチ第185号土坑(後藤2016)に残存率の高い破片(第86図2)が出土している。その他は、ほとんどが晩期中葉に伴う。

粗製深鉢形の底部 砂粒を多量に含む胎土と、成形や調整が共通することから、粗製深鉢形の底部と判断したものを一括した(第38図1~33)。底部付近の施文は、条線文が1点(1)、網目状襷糸文が1点(2)、襷糸文が4点(2~6)であり、偽縄文ではないかと見られるものも1点(7)がある。他には施文が見られないが、全てが無文土器というわけではなく、網目状襷糸文などは底部付近にまで施文を残さないもの(第35図21)が多く、むしろ襷糸文に底部付近まで施文を残すものが現れたと見られる。底面痕跡として木葉痕が4点(3・4・8・9)で、そのうち2点が襷糸文である。他は底面まで器面の調整が及んでおり、底面痕跡は残されていない。底部付近から底面にかかる器面調整が、襷糸文土器では施されなくなると考えられよう。

さて、遺物包含層の層序からは、口縁部が内湾する粗製深鉢形の有文土器が、条線文・網目状襷糸文・襷糸文の順序で変遷することが推定された。条線文から網目状襷糸文への変遷には、単純口縁から複合口縁へと主体が交替する。また、網目状襷糸文から襷糸文への変遷には、複合口縁の成形と胴部施文の順序が逆転し、底部から底面にかかる器面調整が欠落するようになる。口縁が



第41図 第32トレンチ出土土器(21)

聞く形態の縄文土器は、晩期前葉に特徴的であり、中葉には、縹系文や無文で口縁が聞く形態の深鉢形が製作されている。無文土器は、単純口縁で削り調整の擦痕を残すものから、複合口縁で撫で調整へと変遷した。

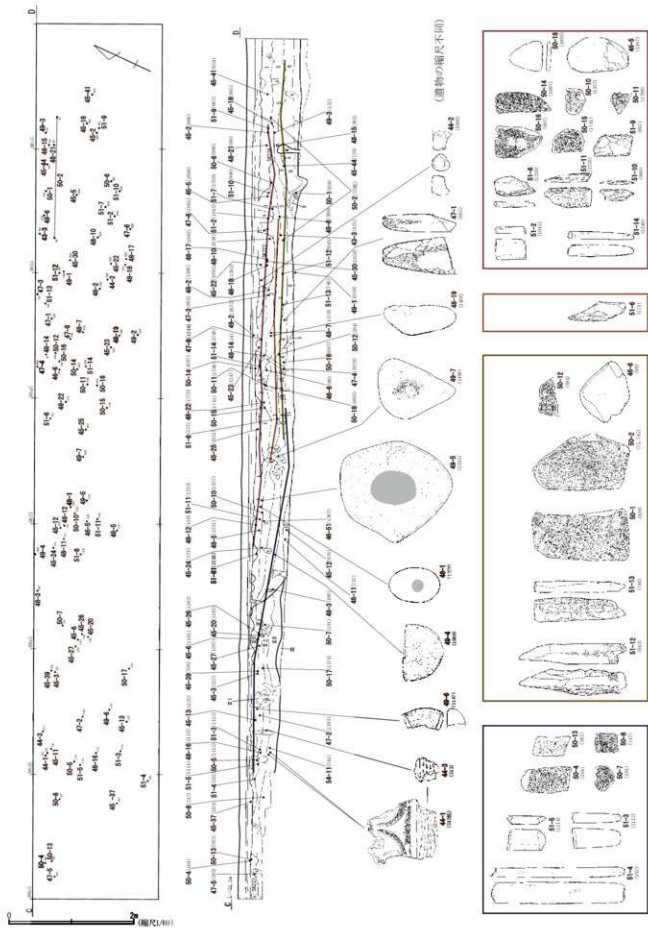
その他 以上の他に、無文あるいは縄文のみ、一部に刺突文といった装飾性に乏しい、主として小型の器種を第39・40図に一括した。残存率の比較的高いものには、出土層位から細別時期を特定できるものもあるが、特に無文の破片については、これがほとんどできない。胎土に多量の砂粒を含み、粗製深鉢形に胎土が共通するものも少なくない。浅鉢形は、縄文のものも少なくない(第39図20・21)、無文のものが圧倒的に多い(第39図23～41)。26(第39図)の口縁部には、焼成前に2孔が一对で穿たれている。残存率が高いことから、穿孔は1ヶ所に限られることがほぼ確実である。器内面の孔周囲に剝離が観察され、これは、紐を通して使用された痕跡ではないかと考えている。小型無文の壺形(第40図2)は、器内外に赤色顔料が付着し、受け口状の口縁から器内面にかけて顕著である。隣接する第27トレンチからは、やはり口径50mmほどの小型無文の壺形が出土し、特に器内面への赤色顔料の付着が観察されている(後藤2016)。これらは、赤色顔料を内部に保存した土器と捉えられるものかもしれない。刺突文は、超小型の深鉢形の胴部に、横・縦(第40図7)、縦(第40図8)の列状に施文されている。

壺形の頸部下に刺突文が施され、胴部を区画したものもある(第40図13～15)。11は、器面が磨きにより平滑に調整され、器内外面が赤彩されている。弥生時代後期の南関東系の赤彩土器のような印象であり、異質である。

第41図には、粗製深鉢形以外の底部を一括した。1・2は、底径が極端に小さく「安行式」の底部である。2は、第11層から出土しており、「大洞BC式」に伴う「安行3b式」波状口縁深鉢形の底部なのであろう。6～12は、底部からの胴部の立ち上がりが緩やかで、浅鉢形になるものと推定される。そのうち8・9は、底部外縁によく似た摩滅(実測図斜線部)が形成されている。大型の浅鉢形の使用痕として注意しておきたい。

参考文献

- 大賀 健 2015『大近平道跡発掘調査報告書 一 中所沢川尻線(市道640号線)道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』(市報告第101集) 日立市教育委員会
 後藤俊一 2013『泉坂下遺跡Ⅱ』(市報告第16集) 常陸大宮市教育委員会
 後藤俊一 2016『泉坂下遺跡Ⅴ』(市報告第26集) 常陸大宮市教育委員会
 山内幹夫 2018『縄文晩期の土器 一ふくしまの亀ヶ岡式一』(まほろん文化財講座 発表要旨, 2018.9.1)



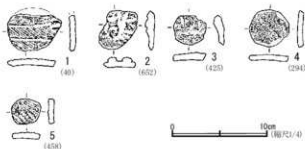
第42図 第32トレンチ遺物出土状況図(4) (第43~52図掲載土製品~付角器の一部)

6 土製品

土製品には、土器の破片を素材として加工された土器片円盤と、土で造形されて焼成された土器以外の製品がある。(第43・44図、第3表)

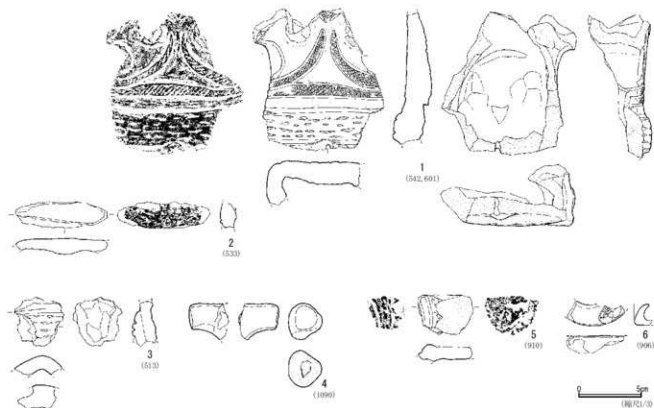
土器片円盤 加工されたことが確実と判断したのは5点であり、土器片円盤として報告する(第43図1~5)。「円盤」と呼びながらも、略円形のものばかりでなく、不整形のものも含んでいる。1・3は周縁を敲打により調整しただけであり、後期「安行式」のものについて「周縁敲打調整土器片」(鈴木1986)と呼んだものに近い。但し、「周縁敲打調整土器片」が「周縁部に近い突起および肥厚部分を敲打によって剝離させる点」に特徴が認められたのに対して、1・2は突起を、3は口唇部をほぼそのまま残していることが異なる。また、5は一部、2は半分以上、4はほぼ全周の破断面に磨痕が形成されていることが、「周縁敲打調整土器片」とは決定的に異なる。1~5の素材は、晩期初頭を中心とした土器に限られている。

土 偶 土偶の破片は5点で出土し、そのうち2点が接合した(第44図1~5)。接合した破片(1)と、他の2点(2・3)も同一個体と判断されることから、3個体の



第43図 第32トレンチ出土土製品(1)

土偶ということになる。1~3は、D6d5区から出土し、「大洞BC式」に伴うと推定される。土偶の胸部から腰部に相当する腹面から左側面の破片である。胸部は、それぞれ板状の腹面と側面を接合して中空に成形されており、これにやはり中空に整形された腕部が接合されている。内面は、主に指頭で調整されるが、一部に篋状工具の痕跡も残る。乳房の表現は突起が貼付されていたが、これがほとんど剥落しており、左の貼付面には沈線状の窪みが観察される。胸部から腹部へは、沈線区画の磨消縄文が施され、無文部は磨かれて窪み、縄文帯がレリーフ状に浮き出ている。腰部には貼付の隆起帯が巡る、その隆起帯上には篋状工具による刺切の短沈線が充填されている。股間部には、直径4mmほどの穿孔があり、孔の



第44図 第32トレンチ出土土製品(2)

周囲には貼付があった剥落痕が残る。胸部から腹部は、縄文部にも無文部にも赤色顔料が付着し、腰部隆起帯下の無文部にもこれが観察されるが、隆起帯上には認められない。胎土には金雲母を含む。4は、右腕部の破片であり、芯の周囲に粘土を巻き付けるようにして成形されている。5も中空土偶の胸部破片である。内面には積土痕が残る、指頭により調整されている。

耳飾り 耳飾りの破片が、D6d5区から出土した(第44図6)。「大洞BC式」に伴うと推定される。外径72mm(残存率19%)、内径38mmほどに復元される。内底状の外面の一部に細い隆帯を貼付し、隆帯上には刻みが施されている。剥落の痕跡から、これはC字状を呈すると見られる。このような法量、形態、装飾の耳飾りは、常総市築地遺跡(江原2018)、古河市中田新田遺跡(鈴木1986)など茨城県では南西部域において「安行式」に伴う。茨城県北部の晩期の耳飾りは総じて小型であり、法量のみならず形態、装飾も異質であることから、「安行3b式」とともに搬入されたものと推定される。

参考文献

江原美奈子 2018『築地遺跡 宮前前遺跡2(財団報告第427集)茨城県教育財団』
鈴木素行 1986『中田新田遺跡』『古河市史 資料 原始・古代編』古河市 263-322頁

7 石器

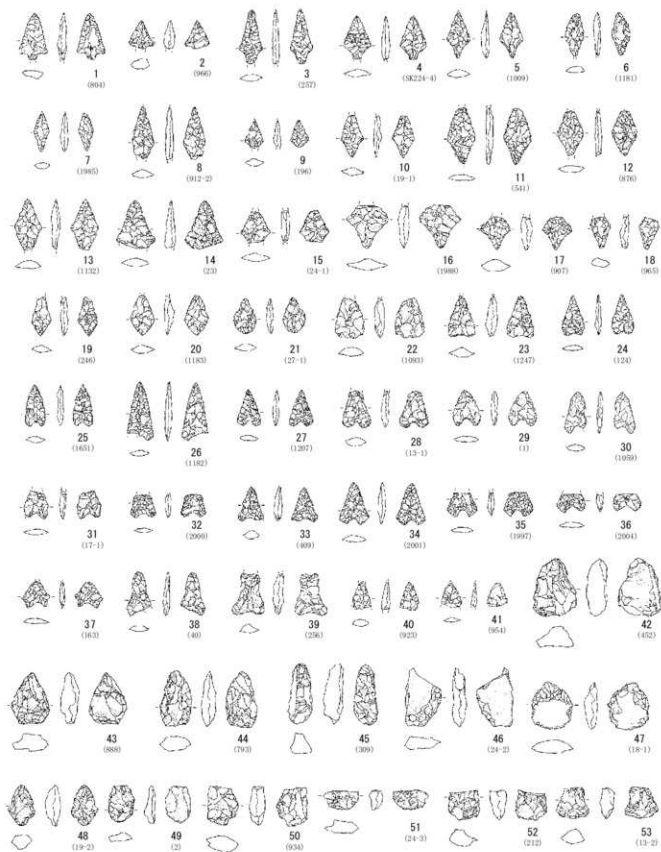
石器として報告するのは石鏃、石錐、使用痕のある剥片、削器、磨製石斧、打製石斧、礫斧、石錘、磨石、敲石、凹石、石皿、台石、砥石である(第45～50図、第5表)。

石鏃 部分的な破片を含めて41点の石鏃が検出された。そのうち発掘調査で出土したのは35点、水洗選別で抽出されたのが6点である。水洗選別はD6d5～15区の極一部の土壌を対象としたものであり、発掘調査と水洗選別で検出される石鏃の量比については、次章の第33トレンチで検討している。

41点の石鏃の石材は、メノウが30点、チャートが2点、オパールが1点、珪質頁岩が2点、その他として玉髓が1点、黒曜石質火山ガラス(田切美智雄氏による鑑定)が4点、赤チャートが1点である。その比率は、メノウが73%、チャートが5%、オパールが2%、珪質頁岩が5%、その他が15%。メノウが主体で70%以上の比率を占めることは、第33トレンチと同じであるが、点数が少な

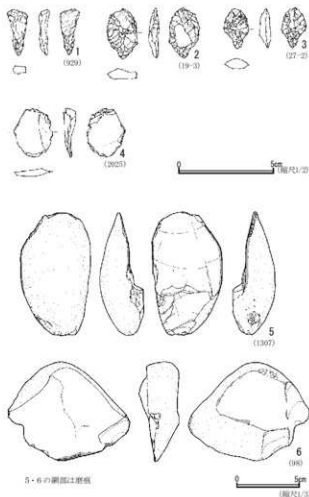
いこともあって、他の石材の比率はやや異なる。常陸太田市本覚遺跡(鈴木2005)では、縄文時代晩期を主体とした85点の石鏃がメノウ66%、チャート16%、オパール7%、珪質頁岩7%、その他4%と捉えられており、メノウが突出して多いこと、チャート・オパール・珪質頁岩という石材を組成することが共通している。泉坂下遺跡の第1トレンチから検出された剥片類について実施した石材の分析(鈴木2011)では、点数の多い順にメノウ80.9%、オパール6.8%、チャート3.2%、珪質頁岩2.8%であり、石器製作に伴う剥片類の石材組成によく対応している。メノウの色調は橙色と白色が混じり合い、比率の多寡はあっても橙色を含むものが多い(図版12)。これは、玉川で採集されるメノウに見られる特徴であり、諸沢のメノウが白色透明を典型とするのとは異なっている。黒曜石質火山ガラスは、赤色系の色調で、所謂「十勝石」などに見られる赤色系の黒曜石に近い印象である(図版12)。赤チャートは、「八溝山系の石」で、「那珂川流域で採取できる石であり、久慈川以北の河川では採集できない」(早川2015)ことが報告されている。

石鏃は、基部の形態を指標として大きく有茎鏃、無茎鏃、尖・円基鏃に分類されている(鈴木1981)。残存部位から、この分類が適用できるのは39点であり、有茎鏃が20点(第45図1～20)、無茎鏃が18点(22～39)、円基鏃が1点(21)であった。第33トレンチと同じく、有茎鏃が無茎鏃をやや上回り、尖・円基鏃が組成する。20点の有茎鏃には、凹基有茎は含まれておらず、平基からやや凸基が2点(1・2)、凸基が18点(3～20)で、凸基有茎が典型的である。18点の無茎鏃は、平基が1点(22)、凹基が17点(23～39)で、凹基無茎が典型的である。この凹基無茎鏃のなかには、平面形が五角形に近い一群(33～35)が認められる。所謂「五角形鏃」よりも最大幅が基部近くにあり、平面形が変形に近い凸基有茎鏃の一群(第76図18～23)の凸基部分に挟りを加えたような形態のものである。検出された層位からは、晩期中葉のものとして推定される。類例は、泉坂下遺跡の第27トレンチ(後藤2016)、次章の第33トレンチからも検出されており、ひたちなか市大田房貝塚(藤本1977)、高萩市小場遺跡(沼田1986)にも報告されている。晩期中葉の地域的な石鏃型式の可能性を考慮して、これを「泉坂下型」と呼んで今後の検討に備えたい。



第45図 第32トレンチ出土石器(1)





第46図 第32トレンチ出土石器(2)

石鐮の形状に成形された石器、あるいは押圧剥離による調整の初期段階のものを石鐮未成品として掲載した(42~53)。このうち石鐮の形状に成形された石器については、近年、石鐮とは別器種の「石鐮模造品」(大工原2020)であることが説かれている。なお、石鐮未製品に分類した48の石材である黒メノウについては、「村松海岸で見られる礫の中から発見された。同様な礫は、現在までの調査で那珂湊の海岸の特定の範囲に高い密度で分布することが判明した」(菊池2018)と報告されている。

石鐮 発掘調査で3点が検出された(第46図1~3)。石材はメノウが2点、チャートが1点である。1・2は摘み部までが整形されている。

使用痕のある刮片 使用痕が明瞭な1点を掲載した(第46図4)。水洗選別で検出されている。左右の側縁に、刃こぼれに相当する微細な剥離が観察される。

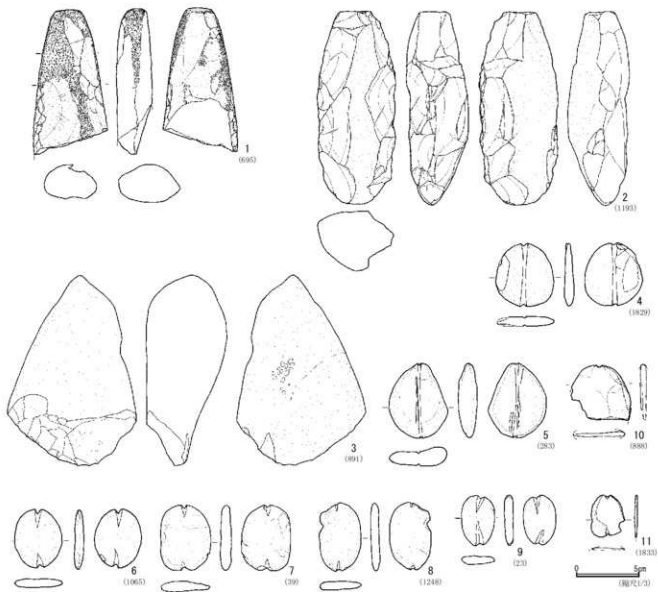
刮器 比較的大型のものであり、石棒製作などに使用された擦切具が2点出土した(第46図5・6)。5は、ホルンフェルスの分割礫を素材として、両側縁が使用さ

れている。側縁のやや大きな剥離は、刃部の摩滅が及ぶことから使用以前のもの、両側縁の細かな剥離は使用後のものである。両側縁とも、摩滅が進行して丸みを帯びており、右側縁の摩滅の中には段が生じている。6は、砂岩の分割礫が素材であり、自然面に被熱の痕跡があることから、火撥ねにより分割されたものであるかもしれない。縁辺は全体的に凸凹状であるが、使用されているのは右側の直線的な部分である。やはり縁辺は摩滅が進行して丸みを帯びている。裏面の剥離周辺部にもわずかな摩滅が観察された。

磨製石斧 未成品として2点を報告する(第47図1・2)。1は、敲打段階の未成品である。表裏面に自然面が大きく残ることから、成品に近い法量・形状の礫が素材に選択されている。縁辺が剥離で成形され、その部分を中心に敲打が進行している状態で欠損したと見られる。頭頂部のみ研磨が施されている。石材はホルンフェルス。2は、縦長の打製石斧状に成形されている。このような法量・形態で使用された打製石斧が他に検出されおらず、磨製石斧の剥離段階の未成品として捉えた。やはり、表裏面に自然面が大きく残り、成品に近い法量・形状の礫が素材に選択されているように見える。石材もホルンフェルス。既往の調査では、C地区および第10トレンチから出土した磨製石斧がホルンフェルス(後藤2015)であり、この石材の磨製石斧は、遺跡地内で製作されていたことが考えられる。

礫斧 扁平に近い厚手の礫を素材として、一部に加工を施し刃部が作出されている(第47図3)。石材はホルンフェルス。裏面の中央部に敲打痕が残されており、敲石に転用されたことが考えられる。このような礫斧は、次章の第33トレンチで7点が出土した他、第1トレンチ(鈴木2011)に5点、第14トレンチ(後藤2016)にも1点が報告されている。

石錘 両端に縄掛け用の加工を施した切目石錘は8点が出土した(第47図4~11)。扁平な小礫を素材としており、石材はホルンフェルスが4点、粘板岩が2点、緑色片岩と泥岩がそれぞれ1点である。端部にのみ切目が施されたものが多いが、切目から溝が全周するもの(4・5)もある。最重量は5の50.0g、最軽量は9の10.6g。泉坂下遺跡では、既往の調査で37点の切目石錘が報告されている。長軸の両端部に切目を加工したものが典型

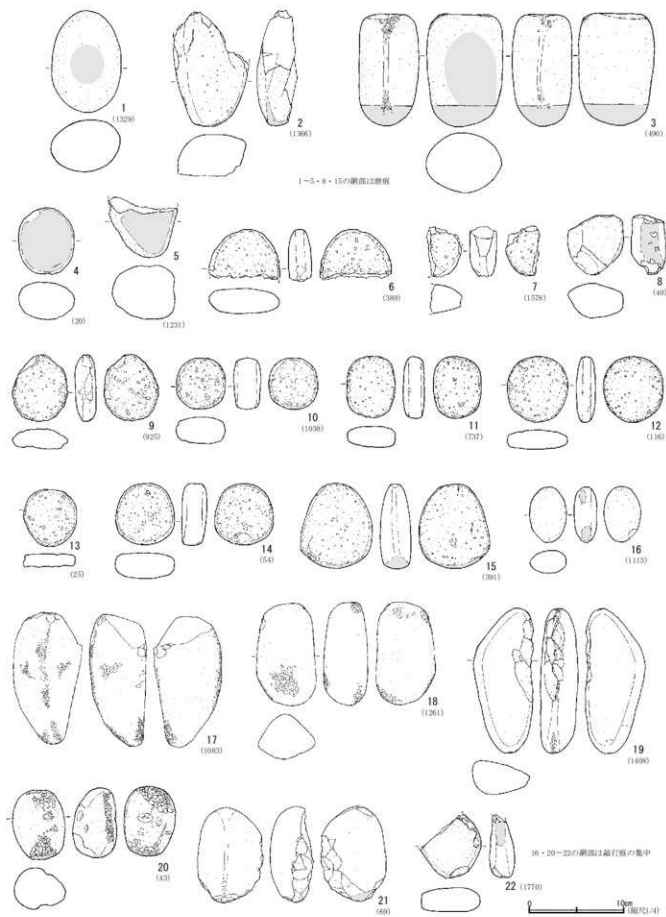


第47図 第32トレンチ出土石器(3)

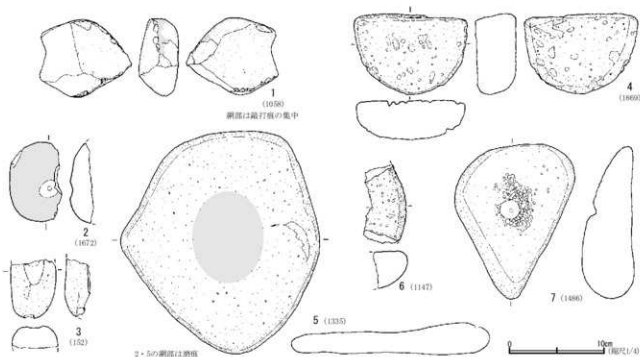
であり、長軸に加えて短軸にも切目を加工したものは検出されていない。完形に近いものでは最重量が82.4g、最軽量が9.0gであるが、30-40gと50-60gの2つの範囲に集中する傾向が窺われる。石材はホルンフェルスが最も多く、粘板岩と砂岩がこれに次ぐ。

磨石 15点(第48図1-15)を磨石として報告するが、3には敲打痕が残されており、敲石としても使用されている。石材は安山岩が10点、砂岩が3点、花崗岩(2)とアブライト(5)がそれぞれ1点である。本覚遺跡の磨石については、「Ⅰ類—使用に伴い平坦な側面が形成されることから円柱を輪切りにしたような形態となる。石材は多孔質安山岩に限定され、しかも多数の細かな孔のある石質のものが選択されている」、「Ⅱ類—平面

及び断面の形状は楕円形を基本とするが、素材の礫の形状により少しの変異が見られる。石材は多孔質安山岩の他に、砂岩と石英斑岩がある。側面に使用の痕跡を残すものがあっても、平坦面は形成しない。使用の進行により平滑面は光沢を有する」(鈴木2005)と分類しており、泉坂下遺跡についても、6・7・9~14はⅠ類に相当し、1・4・5は石材を異にしてもⅡ類に相当する。Ⅰ・Ⅱ類とは異なるものとして、2・8・15に側面の一部のみを使用する類を認めた。そのうち安山岩の15は、表裏面も使用されており、最終的にはⅠ類の形態に至る途上のもかもしれない。また、3は主に半球状の下端部を使用しており、選択された素材が特異な形状の礫である。14は、表裏面および側面に赤色顔料の付着が認められ



第48図 第32トレンチ出土石器(4)



第49図 第32トレンチ出土石器(5)

た。これは、赤色顔料の粉碎具として使用されたと考えられる。

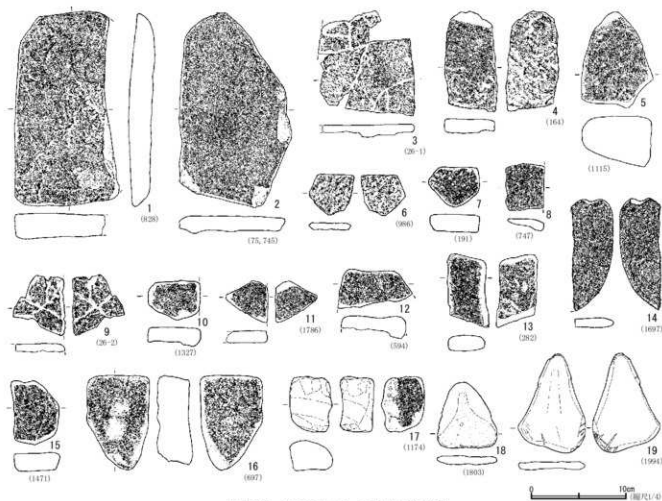
敲石 8点を敲石として報告する(第48図16~22, 第49図1)。丸みのある礫を使用したものと、礫を分割あるいは剥離して縁辺を鋭角に加工したもの(第48図21)とがある。16~20・22は、長軸端部の側面が主に使用されており、17・20には中央付近の平面を使用した痕跡も複合する。なかでも20の表裏面には深く大きな敲打痕が見られる。19は、扁平で長い形状から、鈍のように振った両極打法の敲打具で、石棒製作における剥離段階の工具ではなかったかと考える。また、21は、分割礫に剥離が施された縁辺を使用しており、作出された尖りを利用した敲打具で、これも石棒製作における敲打段階の工具ではなかったかと考えている。

凹石 凹石として報告するのは小型の2点(第49図2・3)、大型の1点(7)であるが、他に砥石を転用した小型の1点があり、これは砥石に含めて報告している。2は、Ⅱ類の磨石を転用したものである。表土中のものであり、農機具による鉄錆が付着している。3は、下端に剥離痕が残されており、敲石に転用されたものかもしれない。7の凹部付近には敲打痕が集中しており、これは、敲石との組合せで使用された痕跡と考えられる。

軽石製砥石 軽石を素材とするものを、後述する砥石と区別するために「軽石製砥石」の呼称で報告する(第49図4)。表面と上部の平坦面が、対象を研磨した使用面に相当する。

石皿 石皿は2点が出土した(第49図5・6)。5は円盤状の礫を素材としており、石材は閃緑岩。中央が使用されており、その部分が窪むことから石皿と捉えた。6は、多孔質安山岩で製作された石皿の破片である。

砥石 研磨による表面の摩滅、擦痕が認められる礫を砥石として抽出し、19点を掲載した(第50図1~19)。細片は他にも検出されている。砥石は、法量、重量、形態、使用面の位置から、大きく2つに分類できる。1つは、砥石を固定し、対象物を動かして研磨したと考えられる法量、重量、形態、使用面の位置のもの。これは「固定式」あるいは「置き砥石」とも呼称される。もう1つは、対象物を固定し、砥石を動かして研磨したと考えられる法量、重量、形態、使用面の位置のもの。これは「可動式」あるいは「手持ち砥石」とも呼称される。1~11は、固定式砥石と、その破片と推定されるものである。石材はすべて軟質砂岩であり、3のみ砂粒が粗い。完形の法量が推定できる1・2は、長さ20cm前後、幅10cm余、3も幅は10cm余である。使用面の



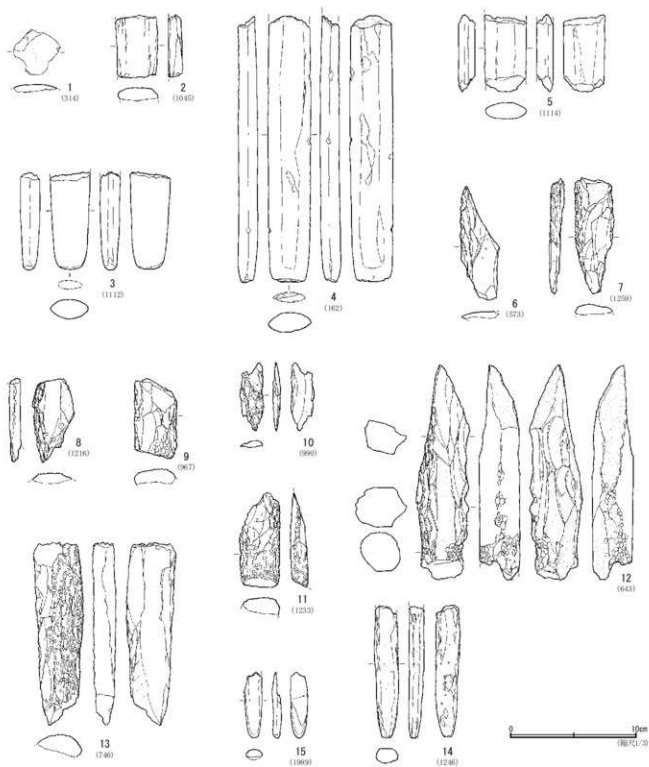
第50図 第32トレンチ出土石器(6)

他は、摩滅した自然面であり、扁平な河川礫を素材としている。久慈川の本流ではなく支流から採集された「浅川層」の砂岩と推定される。完形に近いものは片面のみが使用された状態、破片には表裏の両面が使用されたものも見られる。12～19は可動式砥石である。石材は、1～17が軟質砂岩、18・19が砂岩である。12～14は、固定式より小さく軽い扁平な礫を、15～17は固定式砥石の破片を素材としている。16については、固定式として2面が使用された後に破片に分割されている、可動式として破断面にかかるような使用面が形成され、さらに凹石に転用された。12は幅中央付近が緩やかに窪み、17には溝状の窪みが形成されている。これら軟質砂岩の砥石には、被熱の痕跡が明瞭なものが多い。18・19は、平面が略三角形の形状の扁平な礫を素材としている。平面から側面にかかる部分が使用され、18は片面の2辺、19は両面の3辺に痕跡が残されている。19には、片面の中央に緩やかな窪みが形成され、沈線状の傷が1箇所に集中して見られる。これらの砥石は、主に石

棒製作に使用された研磨具であったと考えられる。研磨段階の前半には固定式砥石が使用され、砂粒の粗い砥石から細かな砥石へという使い分けも想定される。この段階の作業では、石棒に横方向の研磨痕が残された。後半には可動式砥石が使用され、石棒に縦方向の研磨痕が残された。固定式と可動式を組合わせた研磨工程により、石棒は製作されている。

参考文献

- 菊池芳文 2018「謎の黒馬塚」『東海村の自然誌Ⅱ』東海村教育委員会 44頁
- 鈴木道之助 1981「図録石器の基礎知識Ⅲ」柏書房
- 鈴木素行 2005「本覚遺跡の研究」(私家版)
- 鈴木素行 2011「泉坂下遺跡の研究」(私家版)
- 鈴木素行 2016「泉坂下遺跡における石棒製作について」『泉坂下遺跡Ⅴ』(市報告第26集) 常陸大宮市教育委員会 146-160頁
- 大工原豊 2020「関東地方の石器変遷」『縄文石器提要』考古調査ハンドブック20 ニューサイエンス社 353-384頁
- 沼田文夫 1986「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書9 小場遺跡」(財団報告第35集)茨城県教育財団
- 早川麗司 2015「十上台遺跡群(十上台中遺跡・十文字遺跡・藤ヶ作遺跡・西上台遺跡)」(市報告第102集)日立市教育委員会
- 藤本亦城 1977「那珂川下流の石器時代研究Ⅰ」(私家版)



第51図 第32トレンチ出土石製品

8 石製品

石 棒 石製品として報告するのは、石棒のみである(第51図、第5表)。1点は水洗選別で抽出され、他は発掘で出土した。石棒には、成品として使用されたものと、未成品や製作に伴う剥片や碎片とがあり、14点(第51図1~14)を報告した。他にも水洗選別で抽出された

40点ほどの破片・碎片があるが、これについては記載していない。

1は、凝灰岩を素材とした石棒の胴部破片であり、研磨面にはわずかに擦痕が残る。被熱により暗褐色を呈し、変色は破断面にも及ぶ。凝灰岩製の石棒については、類例を集めて検討を加えてあり、器種は石剣に限



第52図 第32トレンチ出土骨角器

られ、晩期「大洞B式・安行3a式」に伴うと推定される(鈴木2020)。

2の石剣は、石材が雲母片岩である。これは三波川変成帯ではなく八溝山系のもので鑑定されており(田切美智雄氏による)、泉坂下遺跡の周辺地域において製作されたと考えられる。但し、縁辺を中心に整形・研磨され、胴部の断面形状が長六角形を呈することは、三波川変成帯の石材で製作された石剣(4・5)に共通する。被熱により表面は赤化している。

3～5の石剣は、石材が三波川変成帯の緑色片岩である。そのうち4は、図示した表面から4分の3ほどの厚さまでが緑色片岩で、裏面までの4分の1ほどは石墨片岩(図版9参照)と鑑定されている(田切美智雄氏による)。胴部の断面形状は、3が凸レンズ状、4・5は長六角形を呈する。3・4には、被熱による部分的な赤化が認められる。

6～14は、石棒製作の未完成品と剥片で、石材はすべて粘板岩である。6・7は剥離段階、8～13は敲打段階、14は研磨段階に位置付けられる。7の側縁の敲打痕は、両極打法により台石との衝突で付いたものであろう。8～13の敲打痕は部分的であり、クレーターはいずれも大きいことから、敲打段階でも初期のものである。8・11・12は、長軸端部に自然面を残しており、8・12は頭部、11は基部に相当する。12は、敲打が集中し頭部の括れを作出していると推定される位置の上位に頭部が想定されるが、成品の頭部よりかなりの余分があり、しかも上端は不整なままである。これは、上端の切断が予定された製作の手順と考えられ、「敲き切り」あるいは「擦り切り」により、これが切断されることになる(鈴木2016)。余分が切断された破片は、第33トレンチから出土している(第81図4)。14は、石剣ではあるが、側縁一部が平坦に研磨され、断面も六角形に近く、粗雑な作りという印象を受ける。側縁の平坦面には、横方向の太く

明瞭な擦痕が残ることから、固定式の砥石(置き砥石)により研磨されている。表表面には、固定式の砥石による横方向の加えて、可動式の砥石(手持ち砥石)による縦方向の擦痕も残る。それでも研磨しきれず、一部に剥離痕や敲打痕が残されている。

15は、粘板岩で製作された石剣である。被熱により全体が赤化している。

参考文献

- 鈴木素行 2016「泉坂下遺跡における石棒製作について」『泉坂下遺跡Ⅴ』(市報告書第26集)常陸大宮市教育委員会 146-160頁
鈴木素行 2020「凝灰岩の石剣 一側東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作について」『Ⅲ-1』『常陸大宮市史研究』第3号 107-118頁

9 骨角器

骨角器として報告するのは2点であり、1点は発掘調査で骨類として一括で取り上げられて整理時に抽出され、もう1点は水洗選別で検出された(第52図、第6表)。

1は、極部分的な破片であるが、破断面以外は研磨されている。2は、髪針の針部破片であろうか。

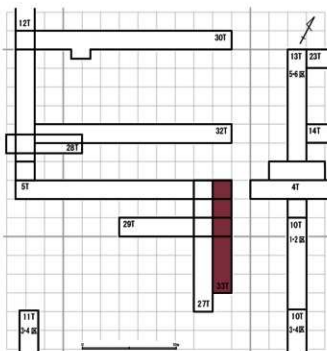
IV 第33トレンチの調査

1 トレンチの概要

第33トレンチは、大グリッドのD6区とD7区を南北方向に縦断して設定された。小グリッドの表記では1列に相当する。第4次調査の第27トレンチに隣接して平行し、第1次調査の第5トレンチと第5次調査の第29トレンチに一部が直交する。設定したトレンチの幅は2m、長さは12mである。(第53図)

第27トレンチで検出された縄文時代晩期の第26号竪穴住居跡(SI26)については、泉塚下遺跡保存委員会において、その規模と形態をより詳細に把握すべきことが提言された。住居跡の西側限界は、第5次調査の第29トレンチによりほぼ明らかとなっていたことから、東側限界の調査について検討したところ、大グリッドのD区とE区の境界には水田面の段差が造成されており、ここに使用中の水道管が埋設されていて、東西方向にトレンチを設定することは回避せざるを得なかった。そこで、第29トレンチで検出された住居跡の輪郭を追跡することとし、隣接して平行する位置に第33トレンチを設定したのである。

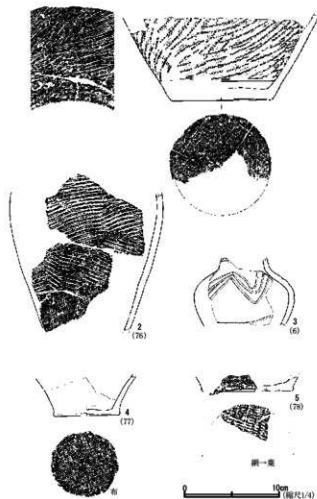
また、第27トレンチの発掘調査では、石棒製作の痕跡を調査するために、土壌の一部を採取して水洗選別を実施しており、その結果、石棒製作に関わる碎片とともに、微細な遺物を多量に検出していた。石鏃などの石器や玉類などの石製品、骨角器の破片を報告に追加し、魚類の遺存体は、漁労活動の痕跡を示すものではないかと注目された。さらに、赤色顔料の細片や、高師小僧なども検出されている。第33トレンチの発掘調査では、第27トレンチで記録された土層断面を参考に、層位に略対応するように土壌を採取すれば、層位ごとの遺物として検討することが可能であると考えられた。そこで、まずは住居跡の範囲内に想定されるD6i9・D6i10・D7i1区の3つの小グリッドについて、ほぼ相当する深度の土壌を第1・4・5・6・8層の各層に分けて採取することにした。但し、第27トレンチの平面図(第61図)からも明らかのように、住居跡の床面を掘り込む深さで後世の土坑や攪乱が重複しており、採取する土壌には、深度に想定される遺物包含層とともに、後世の土坑や攪乱により再堆積



第53図 第33トレンチの位置

した土壌も含まれることになる。平面的に掘り下げる発掘調査の進行中に、この違いを見極めて土壌を採取することは、まず不可能であると考えられた。土層の断面から後世の土坑や攪乱がない部分を見極められるのは、遺物包含層の層序堆積が断面で観察される部分に限られることから、第27トレンチとの境界に幅50cmのベルトを残して掘り進めることにした。第27トレンチにおいて記録された東壁の土層断面図と、第33トレンチの西側土層断面を確認した上で、いくつかの部分を選んで土壌を5cmごとの厚さで採取し、これを分析のための基準とすることを目論んだわけである。しかしながら、降雨に伴う10日間という調査不能日数と、トレンチの下部が水没した状態が最終日まで続いたことで、基準となる土壌サンプルの採取は断念せざるを得なかった。設定したトレンチの幅は2mであったが、このような事情で、実際には幅1.5mの調査区のまま発掘調査を終了した。

土壌サンプルの水洗選別は、発掘調査と並行して整理作業所において進められた。基準となる土壌サンプルが採取されていたならば、これについては1mm方眼の篩までの残留物を対象とすることを考えていたが、水洗には、作業の効率を考慮して3mm方眼の篩を使用した。

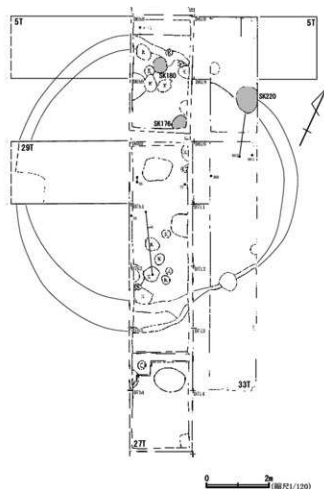


第54図 第27トレンチ出土土器

2 第220号土坑

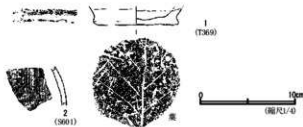
第4次調査の第27トレンチでは、第176号土坑(SK176)が明らかに弥生時代の遺構であり、第180号土坑(SK180)も弥生時代の遺構と報告されている(後藤由2016)。第176号土坑はD6h9区から検出され、遺物包含層の第5層以下を掘り込んで構築されていた。部分的な調査のため、全体の規模と形態は明らかでないが、第5層上面からの深さは約45cmを測る。その覆土の「中～下層」から、大型の壺形土器と見られる底部付近の破片(第54図1)が出土している。遺物包含層からは、「上層」と記載された第4層上部の垂直位置を中心として弥生時代の土器の破片が検出されていた。底面の布目痕(1, 4)、胴部の付加糸縄文(1, 2)は、弥生時代中期のものと考えられ、3条の沈線による波状文(3)、底面痕跡の網状痕(5)については、弥生時代前期に遡ることも考えられる。

土坑の検出 第33トレンチのD6i9区では、第4層相当の深さを掘り下げている中に、弥生時代中期の土器



第55図 第27・33トレンチにおける弥生時代の遺構と遺物の出土位置

の破片が出土していた。これらは、第26号竪穴住居跡としての遺物番号で取り上げていたが、やがてほぼ完形の土器4点が底部を上にした状態で埋没していることが明らかになり、その埋没の深度から、縄文時代の遺物包含層を掘り込んだ土坑に包含されていることが予想された。平面的な観察で土坑の輪郭を明確に捉えることは困難であったが、第220号土坑(SK220)の番号を付与して後は、大よその輪郭内の遺物を土坑の覆土に所属するものとして取り上げることにした。最終的には土坑の覆土を含む土層断面も検討した上で土坑の輪郭を決定したが、第220号土坑として取り上げた遺物とともに、第26号竪穴住居跡の遺物として取り上げた弥生時代の土器は、ほとんどが土坑の輪郭内から出土したものであった。明らかに土坑の外側から同一個体の破片が出土したのは、土器13(第60図)の破片が1点のみであり、これはD6i0区から検出された。覆土に含まれる弥生時代の遺物については、土坑の周囲に分布していたものが



第56図 第33トレンチ出土土器(1)

流入して包含されることになったという状況ではない。D6i0区にはほぼ同じ垂直位置の第4層中から、刷毛目状の条痕文が施された壺形土器の破片(第56図)も検出されているが、これは、条痕の細かさから弥生時代前期に遡ることが考えられる。一方、第220号土坑の覆土からは、縄文時代の土器や石器の破片も少なからず出土しており、なかには、同一個体の破片が遺物包含層から検出されているものもいくつか確認できた。これらは、遺物包含層の第6層までを掘り込む土坑の構築(第62図)で覆土中に包含されることになったものと推定されることから、遺物包含層の遺物とともに一括して報告しており、遺物の挿図および観察表から検査が可能である。

土坑の規模と形態 土坑の東側の一部は調査区外にあることから、全体は明確ではないが、少なくとも南北方向の長軸が84cm、東西方向の短軸が75cmほどの規模はあったと推定される。形態は、倒卵形に近い楕円形であって、正円形ではなさそうである。底面は、平面形の中央ではなく北東寄りにあり、第4層上面から35cmを測る。底面から南西の壁までには、段を有してやや平坦な面が形成されており、この面の上位に最初に検出された4点の土器が位置していた。この面は、覆土よりも締まりがあり、掘り下げる途中にも底面ではないかと想定されていたが、東西方向の土層断面図を作成するために一部を掘り抜いたところ、下位には弥生時代の土器が包含されており、底面であることを確認した。縄文時代に堆積した土層と、弥生時代に掘削されて再堆積した土層の硬度差が、掘り込む手応えの違いとして感じられたものと考えている。

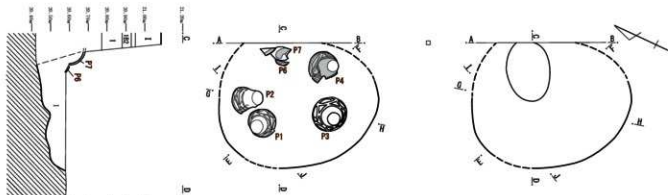
遺物の出土状況 土器の出土状況は、全てが一度に把握できたわけではなく、土器1～4を記録して東西ベルトを除去した後に土器5・6が検出され、南北の土層断面に掛かる土器5の全容が明らかになるまでには、覆土中に包含された破片を記録しながら底面まで掘り進め

た。(図版6参照)

土器1～4はいずれも、底面を上に向けて出土した。但し、土器1・2は鉢形であるから正しく底部であるのに対して、土器3・4は蓋形であることから厳密には天井部と表現すべきかもしれない。そうすると鉢形は逆位、蓋形は正位の状態ということになるのではあるが、蓋形にも容器としての機能は具備されており(鈴木2017)、4点とも容器としての底部を上にした逆位と表現しておきたい。これら4点の土器は、内部の土壌ごと取り上げ、机上で少しずつ土壌を掘り進めたところ、鉢形の土器1と蓋形の土器4の底付近(底から0.5～2cmほど)には土壌が堆積しない空間が残されていた。これは、もともと逆位の状態で埋設された姿勢を変えていない証拠となる現象であろう。やや傾くことはあっても、土の面に対して伏せるように4点の土器が埋置されたと考えられる。なお、土器2・3については底面まで土壌が充満しており、土器2の内部には縄文時代晩期「大洞C1式」の比較的大きな破片(第66図27)が入り込んでいた。ほぼ同じ垂直位置から、土器6・7も出土している。土器7は、壺形土器のほぼ上半部に相当し、土器5の上位にあって、土坑の底面からは15cmほど浮いている。土坑の土層断面図に土器の出土状態を描写した本体(No.101)とは別に、極近くから2点の破片(No.75、5584)、縦長に筒状の空洞が残されていることからモグラの生痕と見られる攪乱中からも1点の破片(No.95)が出土している。全て胴上部に相当する破片であり、胴下～底部の破片は見出せない。もともと壺形のほぼ上半部のみが正位に埋置されていたと考えられる。土器6は、台付土器の脚台部であり、これも容器部分の破片は検出されていない。調査区内には裾部の破片(No.77)のみであったが、土器7の壺形について胴下部の有無を確認するため壁面を刺してみたところ遺物の手応えがあり、結果として土器6の大きな破片(No.112)を掘り出すことになった。土坑の土層断面図を作成した壁面からは東に18cm、グリッド区画としての第33トレンチ東際からは15cmほどの位置であり、垂直位置は土器7に近い。

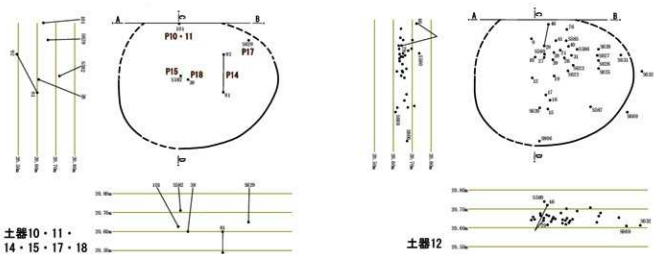
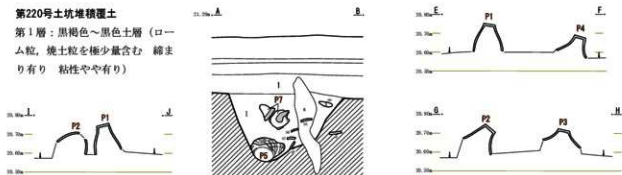
土器5は、土坑最深部の底面にほぼ横位の状態で検出された。

その他の破片は、土坑の覆土中に散在する。同一個体の破片数が多い土器12と土器13を比較してみると、



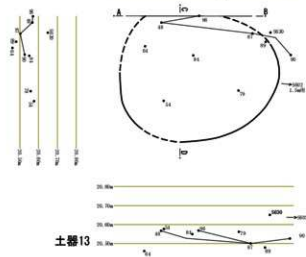
第220号土坑堆積層土

第1層：黒褐色～黒色土層（ローム粒，焼土粒を極少量含む）締まり有り 粘性やや有り



土器10・11・
14・15・17・18

土器12



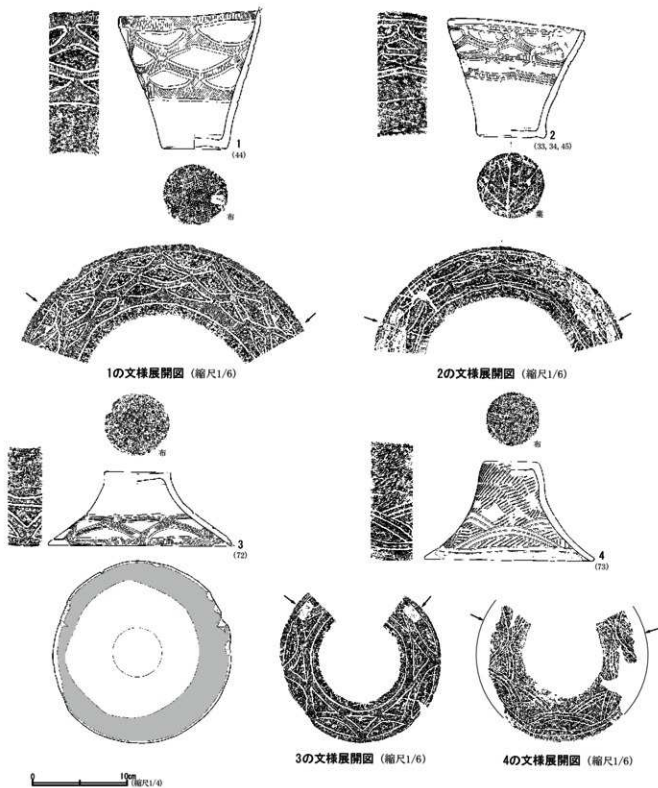
土器13



左：土器1（内部の底付近には土が堆積していない）

右：土器2（内部から土器片を検出）

第57図 第220号土坑実測図・遺物出土状況

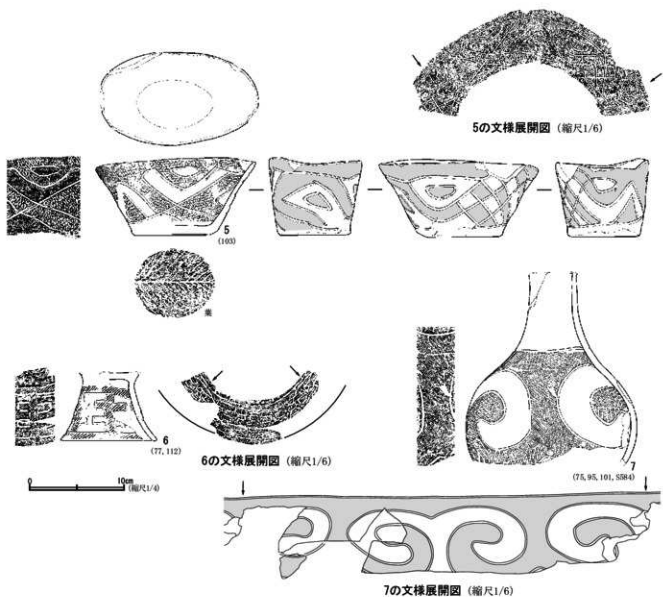


第58図 第220号土坑遺物 (1)

土器13が標高20.50～20.60mに破片が集中するのに
対して、土器12は、より浅い標高20.60～20.70mに
破片が集中する。土器14 (№81・92)・18 (№38) は土器
13に、土器10 (№82,101)・11 (№101)・15 (S582)・17
(S629) は土器12に、それぞれ伴う標高を示している。
周囲から流入した状況にないことから、これらは、時間

的な前後関係を有して、土坑内に土壌とともに破片が埋
められたと推定される。土壌の分層はできないものの、
土坑の下位に土器13を含む土壌を埋めた後、上位には
土器12を含む土壌が埋められた。

土器1～4については、土器1・4の内部に残された空
洞の存在から、伏せた状態で埋置され、その姿勢を大き



第59図 第220号土坑出土遺物(2)

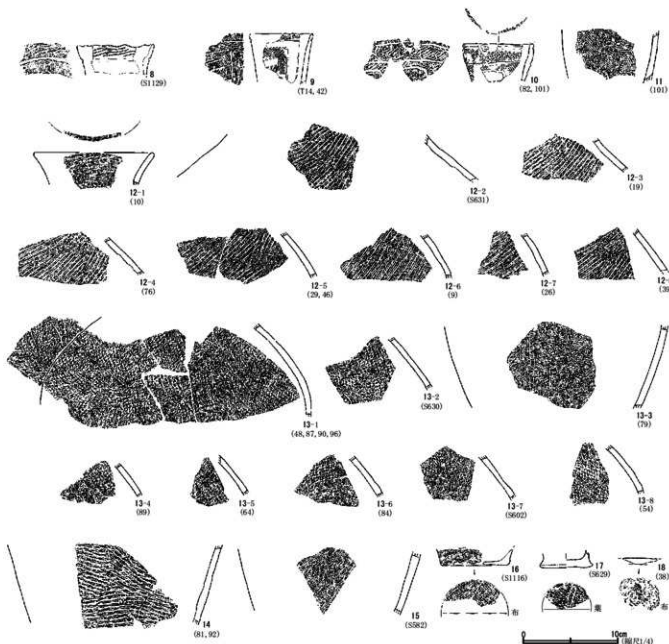
く変えていないことを推定した。そうすると、沈み込みなどで埋置の垂直位置は移動したとしても、それぞれの土器の下位と上位にある破片との位置関係は変わらない。土器1の下位からは土器13の破片(No.54)と土器14の破片(No.92)、土器3の下位からは土器13の破片(No.79)と土器14の破片(No.81)が検出されており、土器13を含む土壌が埋められたのは、土器1~4が埋置される以前であることが確実である。一方、土器4の下位からは土器12の破片(No.31・40)、上位からは土器12の破片(S.585・S.586)が検出されており、土器12を含む土壌が埋められる途中に、土器1~4が埋置されたことが推定されるのである。

土器13を含む下位の埋土は、土器5を覆う。つまり、

これを埋めるための土壌であったことが想定されてくる。その後、土器1~4・6・7とともに、土器12を含む上位の埋土が全部を被覆したと考えられるのである。

遺物 土坑内に埋置されたと考えられる土器1~7と、覆土中から出土した土器8~18の計18個体を第220号土坑に伴う遺物として報告する。

土器1(第58図1) 鉢形土器。口縁部から底部までが残存し、ほぼ完形である。計測値は器高148mm、口径145-152mm(残存率94%)、底径63-67mm(残存率100%)。平口縁で、口唇部にも偽縄文が施されている。口縁から胴上部には沈線区画の磨消縄文で文様が構成される。文様は6単位。縄文は、カナムグラ茎状原体による偽縄文。



第60図 第220号土坑出土遺物(3)

底面には布目痕が残されている。器外面には煤状の炭化物が付着し、器内面の胴部は暗褐 - 黒褐色に変色している。

土器2 (第58図2) 鉢形土器。口縁部から底部までが残存し、器外面の一部が剥落するものの、ほぼ完形である。計測値は器高124mm、口径140-148mm (残存率100%)、底径70mm (残存率100%)。平口縁で、口唇部には施文がない。口縁から胴上部に沈線区画の磨消縄文で文様が構成される。土器1とほぼ同じ構成ながら、最下段の三角形区画の沈線を施文後に磨消して、上位の三角形区画と下位の横位帯とに分離している。文様は8単位。縄文は、カナムグラ茎状原体による偽縄文であり、この

施文部分に赤彩の痕跡が観察される。底面には木葉痕が二重に残されている。胎土に多量の骨針を含む。器内外面には炭化物が付着している。

土器3 (第58図3) 蓋形土器。口縁部から天井部(底部)までが残存し、ほぼ完形である。口唇部を大きく欠損する部分も破断面を調整した擬口縁が形成されており、剥離状の欠損は使用に伴うものと見られる。計測値は器高78mm、口径192mm (残存率73%)、天井径(底径)70mm (残存率100%)。平口縁で、口唇部にも偽縄文が施されている。口縁から胴下部には沈線区画の磨消縄文で文様が構成される。文様は6単位。縄文は、カナムグラ茎状原体による偽縄文。底面には布目痕が残されており、布目痕の下

には一部に網代痕状の窪みが観察される。胎土に多量の骨針を含む。器内面の口縁部には、煤状の炭化物の付着による環状の変色部分があり、その内側は直径140mm前後である。これは土器1・2の鉢形土器の口径に概ね一致しており、この器種が鉢形土器の蓋として使用されたことが考えられる。文様の単位数は、土器1に対応する。

土器4 (第58図4) 蓋形土器。口縁部から天井部(底部)までが残存し、ほぼ完形である。口唇部を大きく欠損する部分は、後世の攪乱によるものと見られる。計測値は器高104mm、口径180mm(残存率33%)、天井径(底径)56-58mm(残存率100%)。平口縁で、口唇部には施文がない。口縁から天井部まで縄文が施されている。縄文原体は付加条第1種LR+2R。口縁部付近に三角形区画あるいは青海波状の文様が構成され、沈線内の縄文が磨消されている。文様は4単位。底面には布目痕が残されている。胎土に多量の骨針を含む。器面への炭化物の付着は特に認められない。

土器5 (第59図5) 鉢形土器。口縁部から天井部(底部)までが残存し、ほぼ完形である。口唇部の欠損は使用に伴うと見られ、口縁部の欠損も後世のものではない。計測値は器高82mm、口縁部は長軸169mm・短軸97mmの楕円形(残存率71%)、底部も長軸85mm・短軸73mmの楕円形(100%)である。歪みがあるものの平口縁で、口唇部には施文がない。口縁から底部までに全周して文様が構成されており、それは三角形区画を基本としながらも単位文様の繰り返しではない。縄文は、オオハコのような植物種子部分による偽縄文。底面には木葉痕が明瞭に残されている。胎土に極少量の骨針を含む。器面への炭化物の付着は特に認められない。

土器6 (第59図6) 台付土器の脚台部。高環形土器であろうか。土坑内から容器部分の破片は出土していないが、脚台部については、回収できなかった破片があったと見られる。計測値は残存高74mm、脚台部の括れ部径52mm(残存率100%)、裾部径102mm(残存率36%)。沈線区画の磨消縄文で文様が構成され、文様は6単位。縄文原体は付加条第1種LR+2Rで、この施文部分に赤彩の痕跡が観察される。胎土に多量の骨針を含む。焼成の不良によるものか、器体は脆弱な状態にある。

土器7 (第59図7) 小型壺形土器の頸~胴上部。頸部上端の破断面は研磨で調整されており、口縁部の欠損後

に擬口縁が形成されている。胴下部の破断面は、成形の繋ぎで分割したようである。攪乱中に一部の破片(№95)が含まれていたように、後世の攪乱による欠損と移動があり、回収できなかった破片もあると見られる。但し、土坑内から胴下部に相当する破片は出土していない。計測値は残存高203mm、擬口縁部分の径50mm(残存率54%)、頸径47mm(残存率62%)、胴径181mm(残存率46%)。沈線区画の磨消縄文で渦文が構成され、文様は2単位。縄文は、カナムグラ茎状の原体による偽縄文で、この施文部分に赤彩の痕跡が観察される。胎土に多量の骨針を含む。

土器8~18 (第60図) 8は小型壺形土器の口縁部。口径81mm(残存率19%)。全体で18単位ほどの波頂が推定される小波状口縁。口縁部には付加条縄文が施されており、縄文原体はR-S。頸部は赤彩されていたようにも見えるが確実ではない。胎土に多量の骨針を含む。9は胴部が筒状の小型土器。口径66mm(残存率9%)。平口縁で、口唇部には刻みが施されている。口縁~胴部には沈線区画の磨消縄文で文様が構成され、縄文部分には赤彩の痕跡が観察される。縄文原体は単節LR。胎土に少量の骨針を含む。10も胴部が筒状を呈した小型土器であり、口縁部がやや膨らむ。平口縁で、口唇部には縄文が施されている。口縁~胴部には沈線区画の磨消縄文で文様が構成される。縄文原体は単節LR。11は深鉢形土器であろうか。最大径102mm(残存率19%)。胴部には、縄文が施されており、縄文原体は単節LR。胎土に中量の骨針を含む。12は大型壺形土器。口縁部から胴上部までの破片であり、48点が検出された。口径128mm(残存率15%)で、胴径は50cm以上になると推定される。単純な平口縁であり、口唇部には縄文が施されている。頸部は明らかでないが、口縁部と胴部に縄文が施され、縄文原体は付加条第1種LR+2R。器内面の一部が剥落している。胎土に多量の骨針を含む。焼成の不良によるものか、器体は脆弱な状態にある。胎土と器体の状態、さらに文様が、第4次調査で検出された第176号土坑の土器(第54図1)によく似ており、同一個体の可能性がある。13も大型壺形土器。胴上部の破片であり、12点が検出された。胴径284mm(残存率38%)。胴部には縄文が施されている。縄文原体は特異なもので、複節RLRで、しかも0段多条ではないかと見ている。胎土に少量の骨

針を含む。14は大型壺形土器の胴下部。胴部に縄文が施され、縄文本体は付加条第1種LR+2R。器内面の一部が剥落している。胎土に多量の骨針を含む。15は大・中型壺形土器の胴下部。胴部に縄文が施され、縄文本体は付加条第1種LR+2Rカ。16～18は底部。底面は16・18が布目痕、17が木葉痕である。16・18の胎土には多量の骨針を含む。

小括 第220号土坑は、弥生時代中期中葉に形成された遺構であり、出土した土器群は「野沢式」(土器7)、「格式」(土器5・7)、「龍門寺式」(土器1～4)等と呼称されている。「泉坂下Ⅰ・Ⅱ期」(鈴木編2011)と呼んだ再葬墓群の土器群より確実に時期が下るものである。

底面から出土した土器5には副葬品、あるいは「東台類型」(鈴木2010)と呼んだ土器棺の可能性があり、これが埋め戻されていることと土坑の規模から、乳幼児の墓塚が想定される。土器12を含む土壌を埋めながら、土器1～4が伏せて埋置されており、これらは、供献のための土器であったと考えられる。

参考文献

- 鈴木素行 2010「続・部田野のオオツタノハ ―茨城県域における弥生時代「再葬墓後」の墓制について―」『古代』第123号 1-51頁
 鈴木素行 2017「天か地か ―茨城県域における弥生時代の土製器―」『茨城県考古学協会誌』第29号 37-58頁

3 第26号竪穴住居跡

第26号竪穴住居跡(Si26)は、第4次調査の第27トレンチにおいて既に報告された住居跡である。幅2mのトレンチのほぼ中央に竈址が位置し、住居跡の南北方向の端部が捉えられたが、住居跡の形態と規模をより明確にするために、第5次調査では第29トレンチ、第6次調査では第33トレンチが設定された。第29トレンチでは、住居跡の西方向の端部が検出されている。これにより住居跡の規模はほぼ把握できたことから、第33トレンチは、形態の確定を主な目的とする。

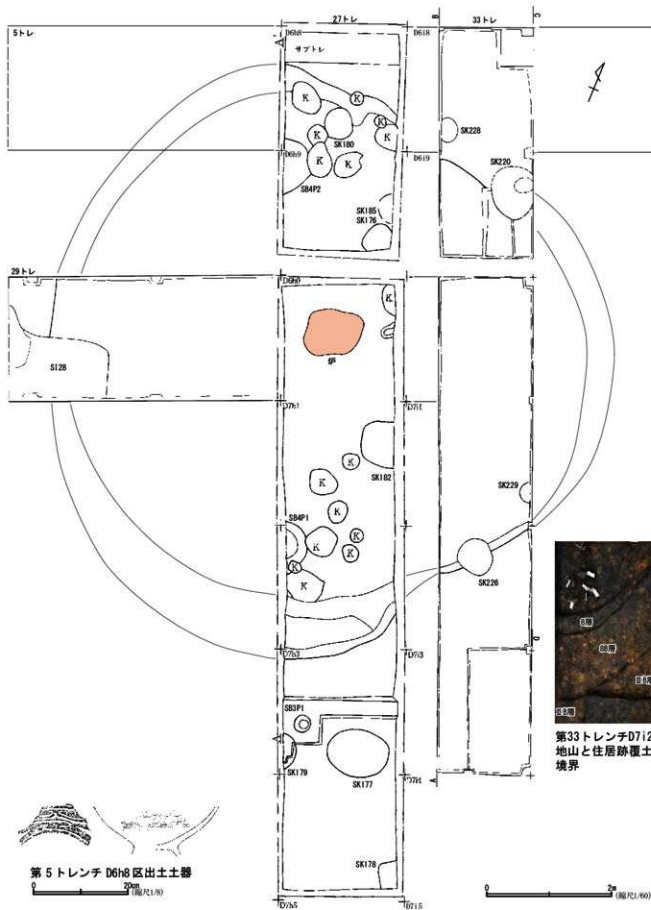
重複する遺構 第33トレンチの表土(第Ⅰ・Ⅱ層)下で検出され、遺構として記録したのは、第220号土坑の他に第221・226・228～234号土坑の9基である。これらはいずれも極めて部分的な調査であり、平面および断面図への記録と、覆土の観察を記載するにとどめる。平面図の記録を欠く土坑には、発掘の進行中には捉えることができず、トレンチ壁の断面図作成に伴う観察

第62図の土層説明

第221号土坑(SK221)堆積覆土
暗褐色土層(ローム粒、焼土粒を含む 締まり有り 粘性無し)
第226号土坑(SK226)堆積覆土
暗褐色土層(ロームブロック、黄白色粘土ブロックが混じる)
第228号土坑(SK228)堆積覆土
黒色土層(ローム粒、№1粒を含む 締まり有り 粘性有り)
第229号土坑(SK229)堆積覆土
第1層:褐色土層(ロームブロックを多量に含む 締まり有り 粘性有り)
第2層:暗褐色～黒褐色土層(ローム粒を含む 締まり有り 粘性有り)
第2層より下向には粘土ブロックが混じる
第230号土坑(SK230)堆積覆土
第1層:暗褐色土層(ロームブロックを多量に含む 締まり有り 粘性無し)
第2層:暗褐色土層(ローム粒、焼土粒を少量含む 締まり有り 粘性無し)
第231号土坑(SK231)堆積覆土
第1層:暗褐色土層(ローム粒、焼土粒を含む 締まり有り 粘性無し)
第2層:暗褐色土層(ロームブロック、ローム粒を多量に含む 焼土ブロック、焼土粒を含む 締まり有り 粘性無し)
第232号土坑(SK232)堆積覆土
黒褐色土層(ローム粒、焼土粒を少量含む 締まり有り 粘性無し)
第233号土坑(SK233)堆積覆土
黒褐色土層(ローム粒、焼土粒を含む 締まり有り 粘性やや有り)
第234号土坑(SK234)堆積覆土
黒褐色～黒色土層(ローム粒、焼土粒を少量含む 締まり有り 粘性有り)

で最終的に土坑を認めたものがある。これらは、底面が住居跡の床面にまで達していない。床面まで掘り込んでいたのは、第221・226・229・230・231号土坑の5基であり、第226号土坑を除いて土坑が住居跡よりも新しい。第221号土坑は、平安時代の土師器片が覆土中から出土していたことから、発掘調査時にも土坑の存在を注意していた。これは平安時代以後のものと同位置付けられる。第226号土坑は、住居跡の壁と重複するものの、両者の関係を捉えることはできなかった。堆積覆土は平面で観察している。D6i0区の北東隅には、第230・231号土坑に相当すると見られる円形の掘り込みを住居跡の床面に確認し、覆土中に白色灰および焼土ブロックが包含されることを観察していたが、降雨による水没のため写真や図面に記録することはできなかった。

住居跡の規模と形態 第33トレンチのD7i2区では住居跡の床面からの壁の立ち上がりを明確に捉えることができた(第61図)。第Ⅱ層上面まで掘り下げた段階で北側から第8層～第8B層～第Ⅱ層の順序で土層が露出し、第8B層と第Ⅱ層の境界が住居跡の壁に相当する。床面から立ち上がる壁の下端と、壁の上端との幅が



第61図 第33トレンチ(第26号竪穴住居跡)実測図(1)



第27トレンチ西壁土層断面図

- 第1層：灰層
 第2層：土色土
 第3層：土色土
 第4層：土色土
 第5層：土色土
 第6層：土色土
 第7層：土色土
 第8層：土色土
 第9層：土色土



第27トレンチにおける土層の出土層位



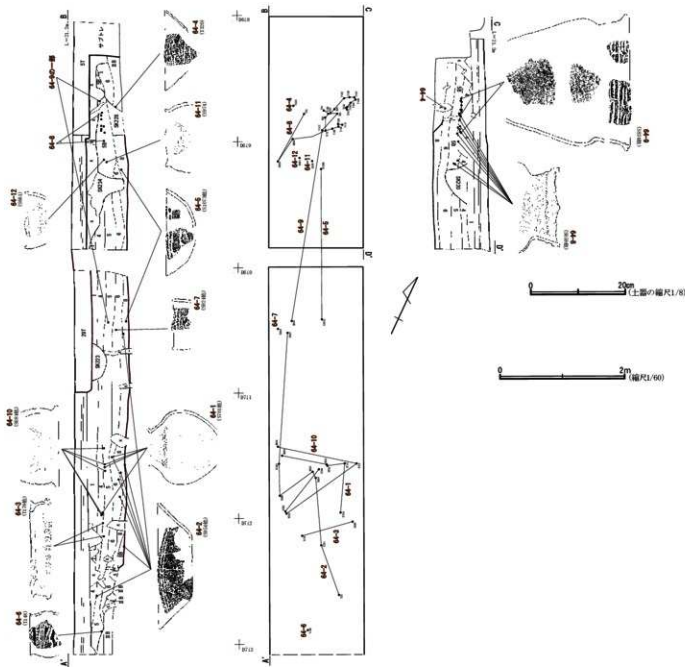
第33トレンチ西壁土層断面図



第33トレンチ東壁土層断面図

- 第1～8層は第27トレンチの所見に準じる
 第5B層：土色土
 第8層：土色土
 第8B層：土色土

第62図 第33トレンチ(第26号竪穴住居跡)実測図(2)



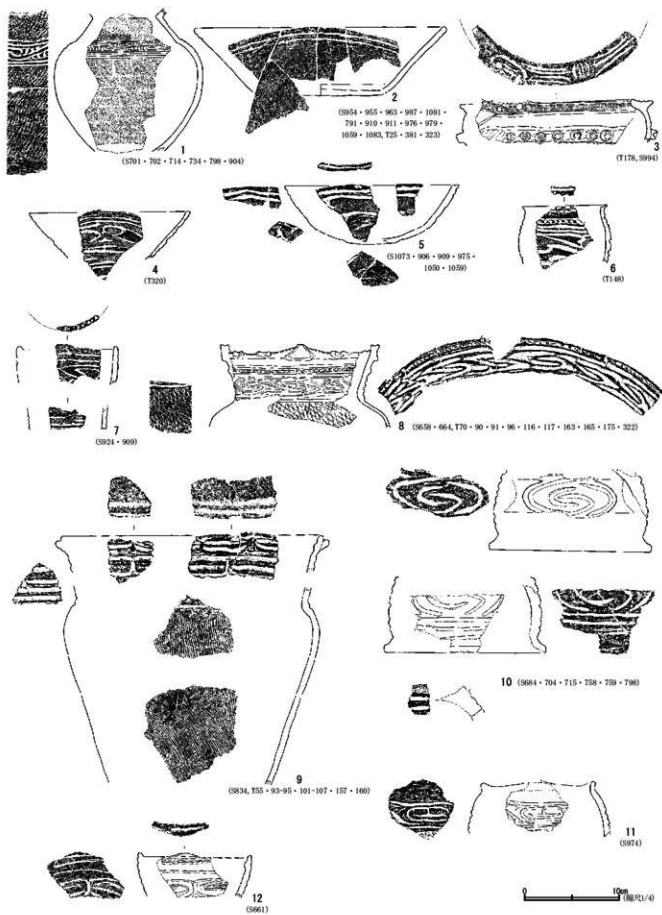
第63図 第33トレンチ遺物出土状況図(1) (第64図掲載土器)

第27トレンチの平面図と異なるのは、第33トレンチでは第8B層を竪穴内に堆積した覆土として捉えたのに対して、第27トレンチでは第8層までをこれに相当させたことによる。D619区では壁を明確に捉えられず、第Ⅲ層上において床面と地山の境界を住居跡の輪郭としている。このような南北の輪郭からは、第27トレンチで検出されたが址が中央に位置したことがほぼ確実となり、住居跡のおおよその直径は、床面で8.5mほどと推定された。

第27トレンチでは、第26号竪穴住居跡から南方方向に2mほど離れて第179号土坑が位置し、この覆土中から

縄文時代後期後葉「安行2式」に伴う粗製の深鉢形土器が出土している。第179号土坑は、基本土層の第Ⅱ2層を掘り込んで構築されており、縄文時代晩期に構築された第26号竪穴住居跡の深さは、少なくとも第Ⅱ2層上から90cmほどを見積もることができる。これが垂直ではなく、なだらかな傾斜面を形成するのは、住居廃絶後の崩落によるものと想定される。

なお、第27号トレンチでは床面から縄文時代晩期初頭「安行3a式」が出土したが、第33トレンチにおいては、住居跡に帰属することが確実な遺物は検出されていない。



第64図 第33トレンチ出土土器 (2)

4 遺物包含層

遺物包含層は、第26号竪穴住居跡を覆う土層堆積ではあるが、南北方向へは住居跡床面の範囲を超えて広がることが確認されている。南方向へは、2mほどであり、北方向の限界は捉えられていない。第32トレンチで検出された第38号竪穴住居跡の床面の直径が13mほどであったとしても、その南端は第33トレンチにはかろうじて及ばない。但し、2基の住居跡の間隔は1mほどとなり、これらが同時に存在したことは考え難い。新しい1基が住居として機能していた期間、古い1基は住居跡の窪地として隣接していた。最下層の遺物包含層の形成には、住居跡壁の崩落が土壌を供給しており、新しい住居が廃絶された後は、両住居跡を隔っていた部分も崩壊し(第62図)、両住居跡は一部で連続した窪地と化していた。特に「大洞C1式」以降の遺物包含層の形成は同時に進行し、土層の一部は連続することも考えられる。

隣接する第27トレンチでは、第33トレンチと比較して、残存率の高い土器が多量に出土し、石器や石製品も多くが見られた(後編#2016)。土器の出土層位を検討すると、次のような層序と土器型式の関係が捉えられた。

第4層…「大洞C2式」～弥生中期

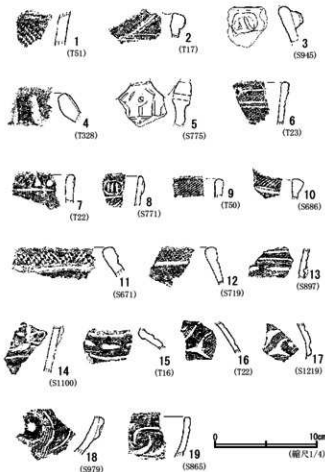
第5層…「大洞C2式」

第6層…「大洞C1式」

第8層…「大洞BC式」

床面…「安行3a式」

第33トレンチの調査では、この層序を基礎として、一括で取り上げる小破片の遺物や、土壌の水洗選別で抽出される微細な遺物についても、可能な限り分解に対応できるように試みた。その具体的な方法は、第27トレンチにおける第4・5・6・8層の深さと厚さの平均を求め、土層がほぼ水平堆積と予想される第33トレンチのD6i9・D6i0・D6i1という3つのグリッドについて、表土(第1・1B層)を除去した面から地表下49cmまでを第1層、それ以下は12cmごとに第4・5・6・8層として採取するものであった。したがって、第33トレンチを平面的に掘り進める中で土層の変化に対応したのではなく、土坑を含む視乱の土壌を区別したものでないことを了解されたい。第33トレンチでは、器形の復元できる土器は少なく、器形を復元した土器にも小破片を接合したものが含まれる。「大洞BC式」(第64図)が第



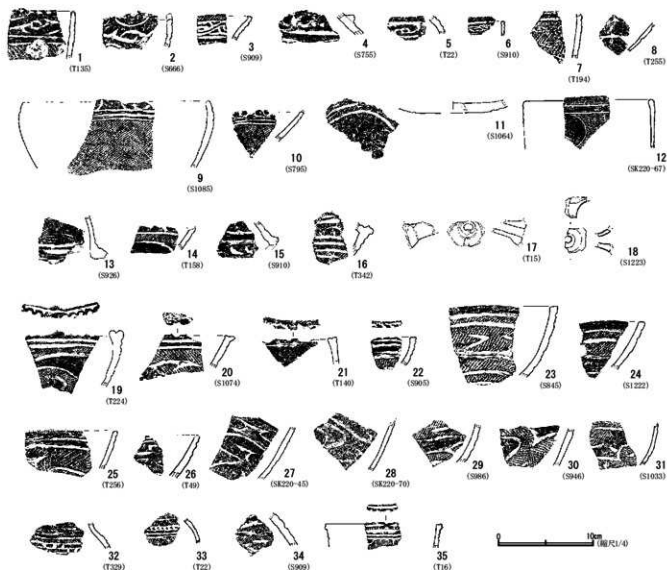
第65図 第33トレンチ出土土器(3)

8層ではなく、第4・5・6層に分散して出土した(第63図)のは、第229号土坑による視乱があったのではないかと見ている。「大洞C1式」「大洞C2式」については、概ね層序に合致した出土状況が認められ、石棒もこの層位に集中していた。

なお、第4次調査の方法を踏襲して、住居跡範囲内のものを第26号竪穴住居跡の遺物「S126-Na」の続きで、住居跡範囲外のを第33トレンチの遺物「33T-Na」で取り上げた。これを遺物包含層として一括するにあたり、調査時の番号を振り変えることはせず、それぞれの遺物番号に「S」「T」を冠して区別している。

5 土器

遺物包含層から出土した土器のうち、器高や口・頸・胴・底の各部位が残存し、各部位あるいは最大値の直径を復元したものについては、計測値・推定値を一覧表(第7表)にまとめてある。各部位の直径が残存率50%以上は計測値、50%未満は推定値であり、残存率は特に



第66図 第33トレンチ出土土器(4)

推定値の信頼度と理解されたい。また、掲載した土器の全てについて出土位置と、観察のうち特記事項のみを一覧表(第8表)にまとめてある。文様については、拓本からの判別が難しい縄文原体にほぼ限定して記載している。

中期・後期 遺物包含層形成以前の遺物も少量ながら出土している(第65図)。

1は、中期後葉「加曾利E2式」の頭～胴部であろうか。これ1点のみであるが、第32トレンチと同じく中期後葉の土器が検出されている。2は、後期後葉「安行2式」の波状口縁深鉢形の口縁部。隆起帯上は篋状工具による刻みである。4は、「小場類型」B類(本章参照)に相当し、「安行2式」に伴うものであろう。

大洞B式・安行3a式 泉坂下遺跡では、後期末

の零細な資料の中に、「瘤付土器」と「安行2式」の両型式を見出している。晩期初頭に「安行3a式」が組成することは、第26号竪穴住居跡の床面から出土した個体(第62図)により確実である。10～12(第65図)の「安行式」については、「安行3a式」と考えている。「安行1・2式」の波状口縁深鉢形に施文される単節縄文はことごとくLRであったが、この3点には単節縄文のRLが施文されている。「瘤付土器」「大洞B1式」が施文する単節縄文への転換が見られるのである。13～19(第65図)と、13(第66図)の注口土器については、大田房貝塚貝層中の土器(第87図)を基準として、「大洞B1式」に位置付けられるものであろう。

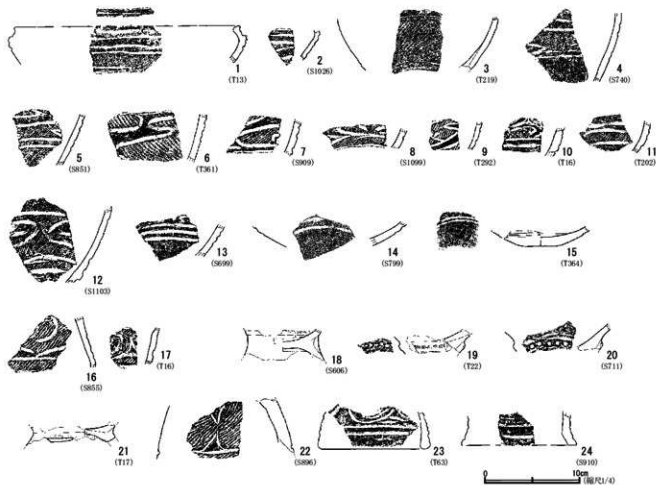
大洞BC式・安行3b式 晩期前葉の「大洞BC式」の土器群(第64・66図)は、第8層に遺物包含層を形成し



第67図 第33トレンチ出土土器(5)

ている。隣接する第27トレンチでは、全体が復元された中型の注口土器が出土した(第62図)。第33トレンチでは、層位を移動した破片が接合して壺形(第64図1)が、

第8層を中心とした垂直分布から「大洞BC式」に伴うと考えられる浅鉢形(第64図2)が復元されている。9(第66図)の壺形は、胴部最大径付近に握口縁を形成し、鉢



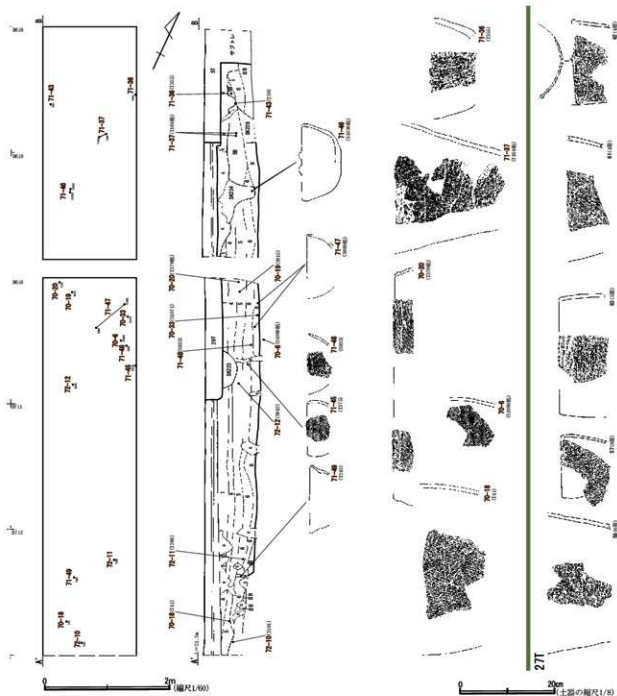
第68図 第33トレンチ出土土器(6)

形として再利用されたと考えられる。器内面には、破断面を調整した剥離の痕跡が残されている。注口土器は破片(第66図14~16)が出土しており、注口部の破片(第66図17・18)を含めて全てが晩期前葉のものである。深鉢形の7(第66図)には結節文, 6(第66図)にはこれを模倣した沈線文が施されている。「安行3b式」は、細密沈線文の深鉢形の破片(第66図12)が出土した。第27トレンチにも同一個体の破片が報告されている。3(第64図)は、類例が見いだせず、第4・5層から出土したものであるが、ここに記載した。器種としては鉢形になるのだろうか。内湾する口縁部の上位に平坦面を形成し、沈線により文様を構成するとともに、突起が作出されている。突起部分には、口縁から平坦面までを斜めに貫通する焼成前の2孔が穿たれている。胴部には、横位の沈線区画内に円形の貼付文が並び、貼付文の中心には刺突が施されている。器面は内外とも磨きにより平滑に調整されている。

大洞C1式・安行3c式 晩期中葉の「大洞C1式」

の土器群(第64・66図)は、第6層に遺物包含層を形成している。隣接する第27トレンチでは、全体が復元された浅鉢形が2点出土した(第62図)。第33トレンチでは、第6・8層から浅鉢形が2点(第64図4・5)、小型の深鉢形が1点(第64図6)出土している。

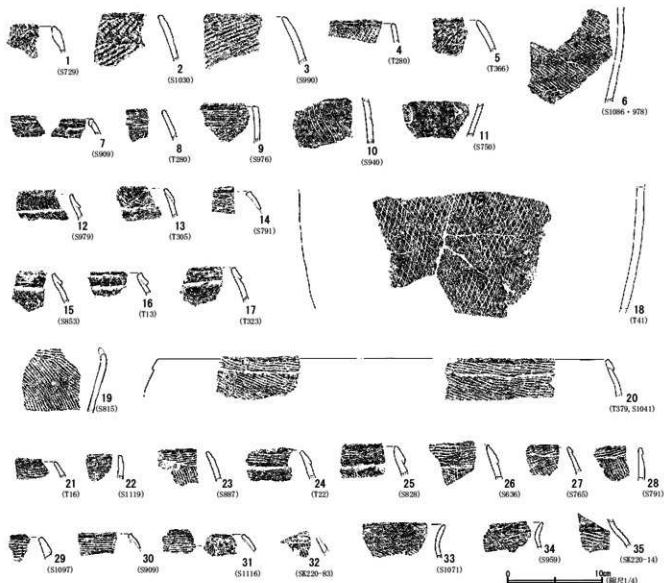
大洞C2式・前浦式 晩期中葉の「大洞C2式」の土器群(第64・67・68図)は、第5層を中心として遺物包含層を形成している。D6i8・i9区において第5B層の上部から、中型の深鉢形(第64図8)と大型の深鉢形(第64図9)が共伴して出土した。中型の8は、胴上部に沈線文で文様が構成され、胴下部には単軸絡条体第5類Aの網目状燃系文が施されている。大型の9は、胴上部に太い沈線文で文様が構成され、胴下部には単軸絡条体第1類の燃系文が施されている。胴上部の文様構成は、横位の太い沈線文が下位の三叉文によって縦に区切られている。これらは、「大洞C2式新段階」(山内#2018)に位置付けられ、単軸絡条体第5類Aの網目状燃系文と単軸絡条体第1類の燃系文が共存することを示す。7(第64図)



第69図 第33トレンチ遺跡出土状況図(2) (第70～72図掲載土器の一部)

は小型の深鉢形である。口唇部の、特に突起付近が発泡した状態で、器面が赤みを帯びた灰色の色調を呈している。常総市築地遺跡第22号竪穴住居跡では、「発泡した土器片や焼成粘土塊が多く出土している」(江原@2018)ことが報告されている。第33トレンチでは、発泡した土器片(第64図7 D610区・第6層)、発泡した石剣(第81図11, D618区・第6層)、焼成粘土塊(第75図8～10, D610区・第8層)が出土し、土壌の水洗選別ではD712区・第6層に「発泡体」として分類したものが集中していた。10(第

64図)は、台付鉢形の脚台部であり、連接三角に近い形状の透かし孔が4単位と推定される。脚台部(第68図18～24)の多くは、「大洞C2式」のものと考えられ、21にも同じような透かし孔の一部が残る。鉢下部が広く無文のもの(第67図35～38, 第68図4)や、口縁部下が屈曲するもの(第67図61, 第68図1)、脚台部へと続く成形痕が観察されるもの(第68図3)は、台付鉢形と考えられる。「前浦式」は、2点の破片(第68図16・17)が検出された。なお、20(第67図)の器外面にはネズミの齧り痕が観察さ



第70図 第33トレンチ出土土器(7)

れた。確認できたのは、第32トレンチの1例(第35図17)に加えて2例のみであり、ひたちなか市君ヶ台遺跡の縄文時代中期後葉に形成された遺物包含層(鈴木 $\text{\textcircled{R}}$ 2019)と比較して、その数量は極端に少ない。

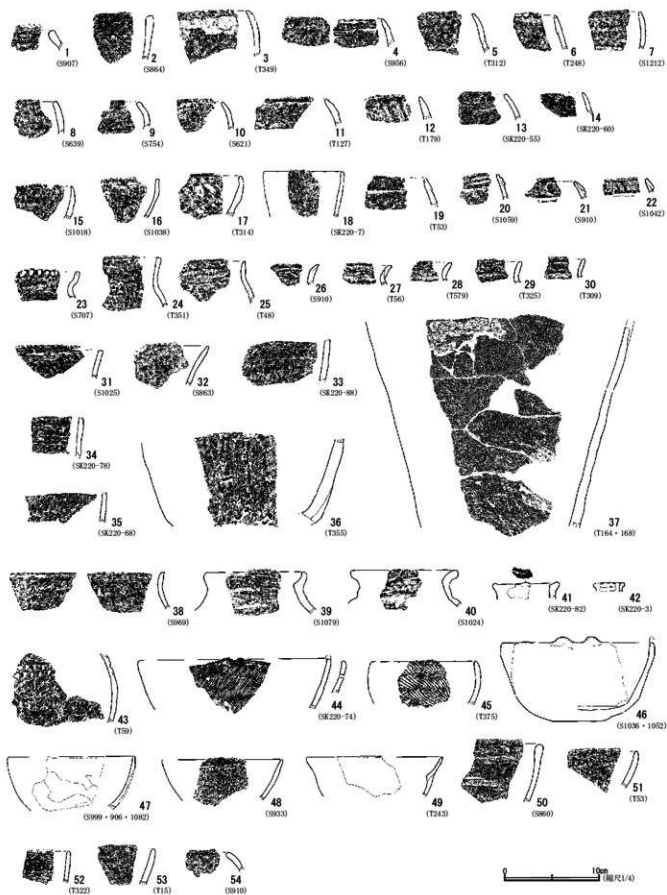
大洞 A 式 晩期後葉の「大洞 A 式」が僅かに検出された。第220号土坑覆土と第1層から出土した2点(第67図24・25)であり、単独の包含層は形成しない。とも「工字文」が施された壺形の胴上部破片である。

粗製深鉢形の法量 晩期の各型式に伴う粗製の深鉢形の法量については、第32トレンチの資料をもとに、口径36cm前後の大型、口径26cm前後の中型、口径15cm前後の小型に分類した。これを基準とすれば、第27トレンチから出土した粗製深鉢形(第69図、遺物番号は後藤 $\text{\textcircled{R}}$ 2016を引用)は、63が中型、57・62が小型で、胴部の

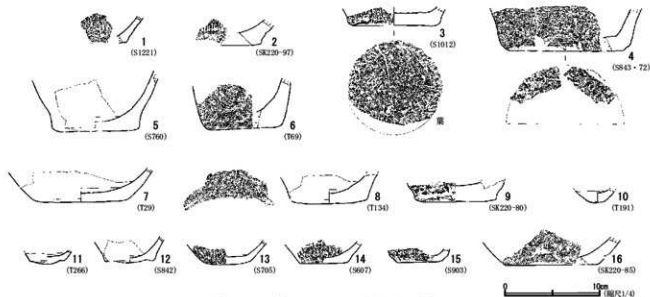
みの58が大型、61が中型と推定される。第33トレンチでも、胴部みの18(第70図) \cdot 37(第71図)は大型と推定されるが、20(第70図)は、口径が476mmと推定されている。残存率は2つの破片を合計しても13%にすぎないが、超大型であることが確実である。

条線文土器 第33トレンチにおいては、小破片(第70図7~11)が僅かに出土したに過ぎないが、第27トレンチでは、第8層から大破片が出土して「大洞 BC 式」に伴う。全て単純口縁であり、口縁部には横位、胴部には縦位の条線文が施されている。

縄文土器 小破片(第70図1~6)が僅かに出土したに過ぎないが、これらは第8層に集中して「大洞 BC 式」に伴う。全て単純口縁であり、単節LRが多く、単節RL(第70図6)、無節L(第70図5)もある。



第71図 第33トレンチ出土土器(8)



第72図 第33トレンチ出土土器(9)

網目状燃糸文土器 単軸絡糸体第5類Aの網目状燃糸文が施された土器(第70図12~18)のうち大型と推定される18は、第5層から出土した。第27トレンチでは、中型と推定される胴部(第69図61)が第4層から出土している。口縁部は全て小破片であり、複合口縁のみである。12は、胴部を施文した原体が複合口縁の下端部に圧痕を残しており、複合口縁を成形した後に胴部を施文したことが明らかである。

燃糸文土器 単軸絡糸体第1類の燃糸文が施された土器(第70図19~32)のうち超大型の20は、第4層から出土した。第27トレンチでも、小型(第69図62)が第4層から出土している。口縁部には、単純口縁(19~23)と複合口縁(20・24~32)があり、複合口縁が多い。単純口縁も、口縁部には燃糸文が横方向に施文されている。複合口縁を成形する前に胴部を施文したことは、20など複合部が重なる部分にも燃糸文が施文されており、31など剥落した複合口縁の破断面に燃糸文の印象が残されていることから明らかである。32には補修孔が穿たれている。器表面は淡褐色、破断面は黒褐色で、サンドイッチ状に色調が異なるが、補修孔部分は淡褐色である。焼成後の穿孔であるならば、黒褐色が露出するはずであるが、焼成前の穿孔としては孔周囲の盛り上がりが見えられない。これは、焼成前に乾燥の段階で生じた亀裂に対して、焼成後の補修を見越して施された処置ではないかと考えられた。類例に注意したい。

無文土器 無文の粗製土器(第71図1~37)には、口

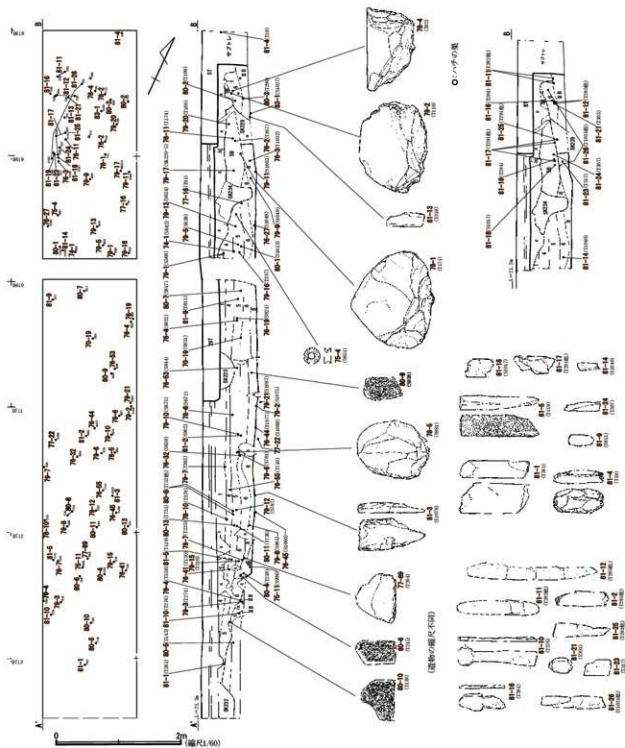
縁が内湾する形態、口縁が開く形態、頸部で括れて口縁が外反する形態がある。口縁が内湾する形態の口縁部には、複合口縁と単純口縁があり、第32トレンチとは逆転して、単純口縁が多い。しかも、複合口縁として掲載した4点の破片(第19~22)は、小破片であることから胴部全体が無文であるか確実でない。単純口縁には、口縁部を器内面側から積上げ、その痕跡を明瞭に残すもの(第71図4~6)がある。

粗製深鉢形の底部 底部付近の施文は、網目状燃糸文が1点(第72図1)、燃糸文が2点(2・3)で、燃糸文の1点(3)には底面痕跡として木葉痕が残されている。

その他 以上の他に、無文あるいは縄文のみ、一部に刺突文といった装飾性に乏しい、主として小型の器種を第71図38~54に一括した。また、第72図7~16には、粗製深鉢形以外の底部を一括した。10は、底径が極端に小さく「安行式」の底部である。

参考文献

- 江原美奈子 2018『築地遺跡 宮原前遺跡2——戦国遺468号首都圏中央連絡自動車道建設事業地内埋蔵文化財調査報告書——(財団報告第427集) 茨城県教育財団
 鈴木素行 2019『君ヶ台遺跡(第7次)・松原遺跡(第4次)・相対古墳群(第2次)・東原遺跡(第3・4次)』ひたちなか市道跡調査会
 山内幹夫 2018『縄文晩期の土器 一ふくしまの亀ヶ岡式——(まほろん文化財講座 発表要旨, 2018.9.1)』



第73図 第33トレンチ遺物出土状況図(3) (第74～83図掲載土製品～骨角器の一部)

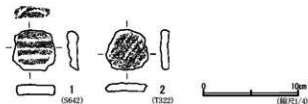
6 土製品

土製品には、土器の破片を素材として加工された土器片円盤と、土で造形されて焼成された土器以外の製品があり、さらに土器の一部であるのか土器以外の土製品であるのか判断ができなかったものも含めている。(第74・75図、第9表)

土器片円盤 加工されたことが確実に判断したのは2点であり、どちらも略円形であることから、土器片円

盤として報告する(第74図1・2)。1は、「大洞C1式」の浅鉢形土器の口縁部破片が素材であり、口唇部を残して側縁が成形されている。2は、晩期前葉の粗製深鉢形土器の胴部破片が素材であり、側縁の全周が成形されている。どちらも破断面に研磨の痕跡は認められない。

土 錘 水洗選別で第8層から2点の有溝土錘が検出された(第75図1・2)。縄掛け用の溝は、長軸を全周とする。2点とも、長さは49mmであり、重さは20g前後と



第74図 第33トレンチ出土土製品(1)

よく似ている。長さも重さも、切目石鍾の範囲内にある。形態は、土鍾が長楕円形～長方形に対して、石鍾が円形～楕円形を典型とするが、石鍾のうち石剣の破片を転用したものは、土鍾の形態に近い。隣接する第27トレンチからも1点が出土している。これは、「上層」(後編p2016)と記載されており、第4層に相当する。長さ49mm、重さ31.6g。類例は、高萩市小場遺跡(沼田1986)やひたちなか市大田房貝塚(藤本1977)に認められる。

土 偶 第5層から1点の中空土偶が出土した(第75図3)。胴部の破片である。磨消縄文の無文部が彫刻的であり、「大洞C1式」に伴うと考えられる。沈線や縄文の凹部にうっすらと赤彩の痕跡が残るようにも見えるが、確実ではない。内面には、成形の積上痕が部分的に残る。隣接する第27トレンチからも中空土偶の破片が出土しているが、それとは別個体である。

耳飾り 第5層から1点の耳飾りが出土した(第75図4)。一部を欠損するが、全体を窺うことができる。平面形状は環状、断面形状は滑車形であり、外径が33mm、内径(孔径)が13mm、滑車形括れ部の直径が23mmを測る。表面には同心円の沈線が2条、裏面には1条巡る。表面の色調は淡褐色、一部黒色～灰褐色であり、彩色の痕跡は見られない。隣接する第27トレンチからも耳飾りが出土しているが、外径16mmと法量が異なることから、対になるものではない。

玉 類 水洗選別で第4・5・6層からそれぞれ1点ずつ小玉が検出された(第75図5～7)。検出されたグリッドも異なり、これらが連なっていたというような状況にはない。

焼成粘土塊 不整形で、成形や調整の痕跡が希薄なまま焼成されたものを焼成粘土塊として一括する。3cmを超えるものはなく、すべてが水洗選別で検出されている。細かな破片は他にもあるが、比較的大きな3点を掲載した(第75図8～10)。8・9は粘土組状で、一方の端部



第75図 第33トレンチ出土土製品(2)

に相当する。9は、その粘土組に振じれが生じている。10は板状であり、棒状のものによる圧痕が残されている。目的があって製作されたものではなく、結果として生成されることになったものという印象であり、土器製作に伴うものではないかと想定している。胎土として見た場合、8は赤色粒子がやや目立ち、8～10のいずれにも金雲母や骨針は含まれていない。

球状製品 第8B層から球状に成形された製品が出土した(第75図11)。一部に赤色顔料の付着が明瞭であ

り、淡褐色と黒色の表面全体が赤彩されていたと推定される。

その他、土器の一部であるのか土器以外の土製品であるのか判断ができなかったものが2点ある(第75図12・13)。12は、表裏に施文があり、2孔が穿たれている。垂飾りのようにも見えるが、弧状に残存する上縁から下方に向かって肥厚している。13は、全体が浅い容器状に湾曲している。外面には、沈線内に貼付が剥落した痕跡が認められる。内面には、渦状の隆帯が貼付されている。

参考文献

沼田文夫 1986『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書9 小場遺跡』(財団報告第35集)茨城県教育財団
藤本赤城 1977『那珂川下流の石器時代研究1』(私家版)

7 石器

石器として報告するのは石鐮、石錐、搔器、使用痕のある剥片、削器、礫斧、石錘、磨石、敲石、凹石、石皿、台石、砥石である(第76～80図、第10表)。

石 鐮 部分的な破片を含めて75点の石鐮が検出された。そのうち発掘調査で出土したのは28点、水洗選別で抽出されたのが47点である。水洗選別はD6i9・D6i0・D7i1区の土壌を対象としており、この3つのグリッドに限定するならば、発掘調査の20点に対して、水洗選別の46点ということになり、発掘調査では実際に含まれていた30%程度しか検出できず、水洗選別を実施しない場合には、70%程度が未検出のままとなった。それでも、泉坂下遺跡では、石鐮の主要な石材が白色系のメノウであることから、検出率としては高い方と考えなければならない。75点のうち67点を掲載した(第76・77図)。

75点の石鐮の石材は、メノウが53点、チャートが8点、オパールが8点、珪質頁岩が4点、その他として玉髓と黒曜石質火山ガラス(田切美智雄氏による鑑定)がそれぞれ1点である。その比率は、メノウ71%、チャート11%、オパール11%、珪質頁岩5%、その他が1%。

残存部位から、有茎鐮、無茎鐮、尖・円基鐮の分類が適用できるのは52点であり、有茎鐮が27点(第76図1～27)、無茎鐮が23点(31～53)、尖基鐮が2点(28・29)であった。本覚遺跡では有茎鐮が37点、無茎鐮が28点、尖・円基鐮が8点、泉坂下遺跡の第1トレンチでは有茎鐮が4点、無茎鐮が2点、円基鐮が1点であり、有茎鐮

が無茎鐮をやや上回ること、尖・円基鐮が組成することが共通している。27点の有茎鐮には、凹基有茎は含まれておらず、平基からやや凸基が5点(第76図1～5)、凸基が22点(6～27)で、凸基有茎が典型的である。23点の無茎鐮は、平基が2点(第76図31・32)、凹基が21点(33～53)であり、凹基無茎が典型的である。この凹基無茎鐮のなかには、「泉坂下型」が3点(33～35)含まれており、検出された層位からは、やはり晩期中葉のものと推定される。以上の石鐮のうち有茎鐮の1点(第76図7)、無茎鐮の1点(第76図44)には黒色の付着物が観察され、基部付近であることから、これは矢柄への接着の痕跡と考えられる。成分分析は実施していないが、この付着物は、アスファルトのように見える。

背面に押圧剥離の痕跡を残した微細な剥片が水洗選別で抽出されており、2点(第77図13・14)を掲載した。石鐮の製作あるいは再生に伴う調整剥片と考えられる。

石鐮の形状に成形された石器、あるいは押圧剥離による調整の初期段階のものを石鐮未成品として掲載した(15～25)。

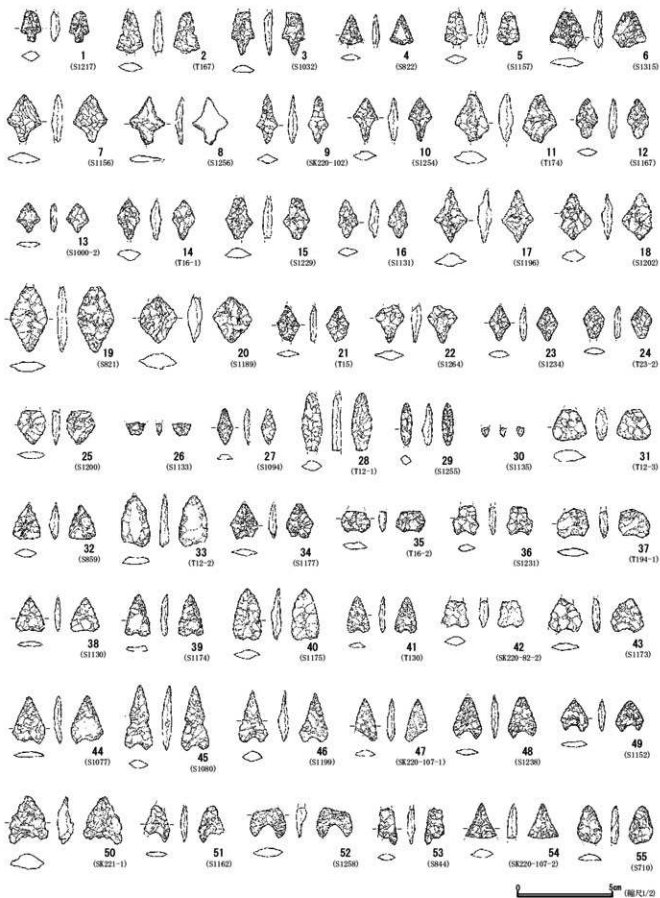
石 錐 石錐は、発掘調査で1点、水洗選別で7点の計8点が検出され、そのうち4点を掲載した(第77図26～29)。8点の石材はメノウが7点、石英が1点であり、メノウが石材の典型である。26の1点のみ摘み部から錐の軸までの破片であり、他はすべて錐先端の微細な破片である。

搔 器 搔器は、水洗選別で抽出された1点のみである(第77図30)。石材はメノウで、剥片の縁辺に急角度の刃部が作出されている。

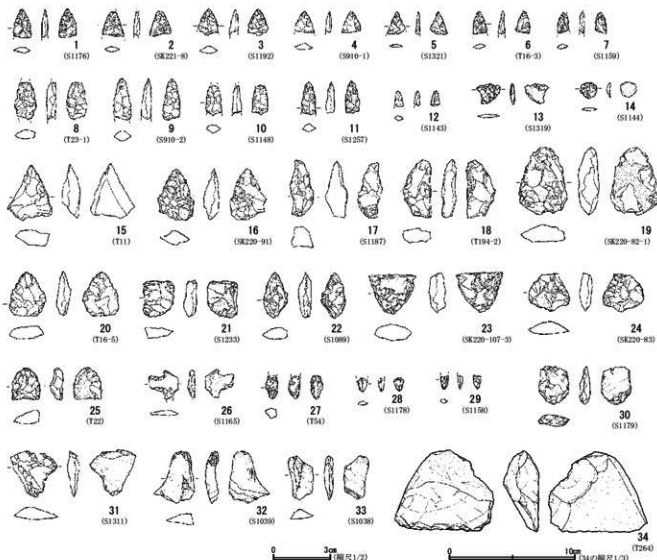
使用痕のある剥片 発掘調査及び水洗選別(第12表)で検出された多量の剥片の中から、使用痕が明確な3点を掲載した(第77図31～33)。31の右側縁、32の左側縁、33の右側縁には、刃こぼれに相当する微細な剥離が観察される。このような剥片の中に、石棒製作の文様を彫刻した線刻具も含まれると考えられるが、特定はできない。

削 器 ホルンフェルスの分割礫を素材として、刃部を作出している(第77図34)。比較的大型で、刃部が直線的なことから、擦切具として準備されたことも考えられたが、刃部には、擦切具としての摩擦は進行していない。

礫 斧 発掘調査で7点が出土した(第78図1～7)。



第76図 第33トレンチ出土石器(1)



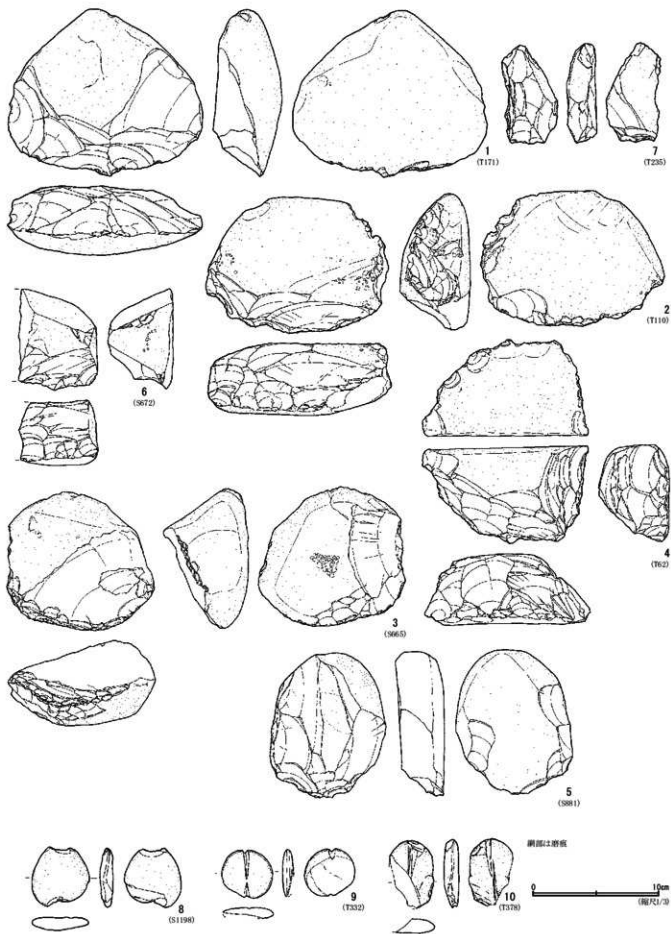
第77図 第33トレンチ出土石器(2)

丸みのある礫の一部に加工を施し刃部が作出されている。扁平に近い厚手の礫をそのまま素材にしたもの(1・2)と、立体的な礫を分割して素材にしたもの(3・4)とがある。石材はホルンフェルスが5点、硬質砂岩と流紋岩がそれぞれ1点で、ホルンフェルスが石材の典型である。大型(1~6)の刃部はすべて片刃、小型(7)のみ両刃状に剥離されている。刃部先端は、3のみ潰れが明瞭である。但し、3は、裏面の中央部や側縁に敲打痕が残されており、敲石に転用されたことが考えられることから、転用後に生じた潰れであるのかもしれない。2・6の右側縁にも敲打痕の集中が認められる。

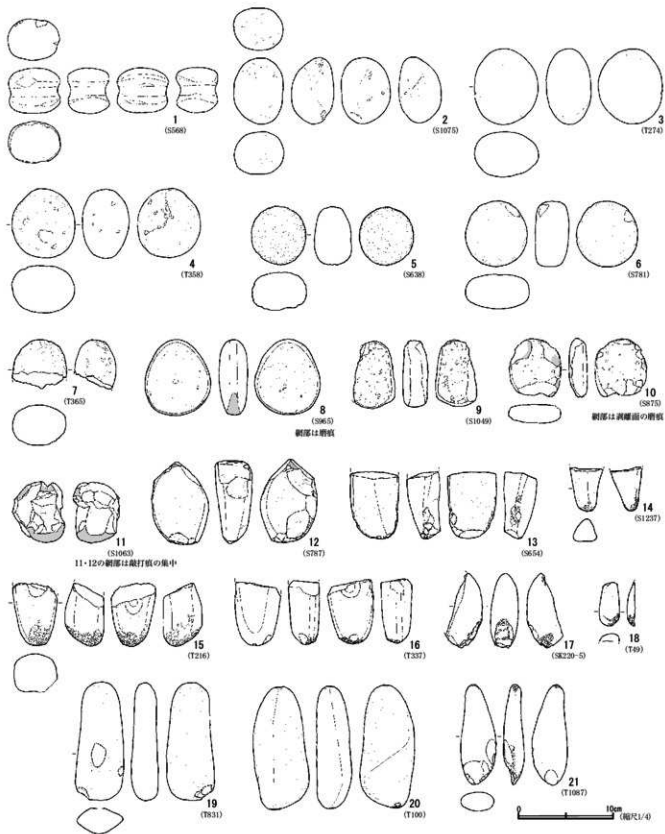
石錘 発掘調査で2点、水洗選別で1点が検出された(第78図8~10)。扁平な小礫を素材として、両端に縄掛け用の加工が施されている。石材はすべてホルンフェルス。8の加工は主に剥離によるもので、下端にの

み切目に加えられている。9は切目のみ。10は両端とも剥離と研磨で調整され、表裏面に切目の溝が付けられている。切目の加工には、削器の擦切具が使用されたと考えられる。すべて一部を欠損しているが、完形の重量が20~40gほどのものになる。

磨石 発掘調査で出土した10点を磨石として報告する(第79図1~10)。石材は安山岩が7点、石英(2)、砂岩(3)、礫岩(9)がそれぞれ1点である。そのうち1は、表裏面が磨石としての使用面に見えることから磨石に分類したが、敲打により側面を全周する溝状の窪みが形成されており、特異な形態のものである。2~4の3点には、表面に赤色顔料の付着が認められた。2は全体的に薄く、3・4は側面に比較的濃く残されている。これらは、赤色顔料の粉砕具として使用されたと考えられる。隣接する第27トレンチからも、赤色顔料が付着し



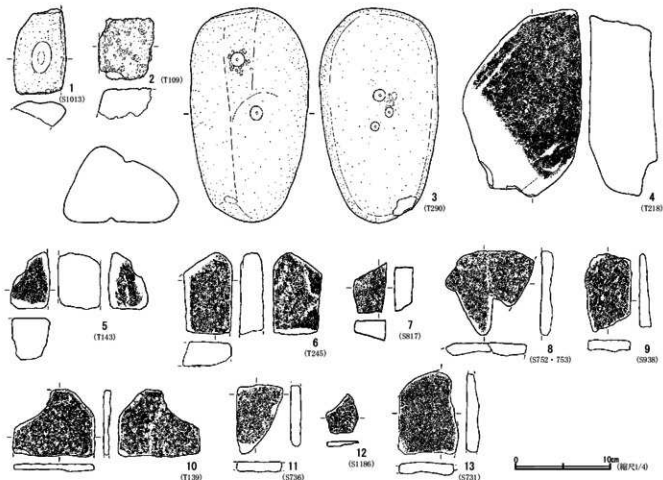
第78図 第33トレンチ出土石器(3)



第79図 第33トレンチ出土石器(4)

た石英の磨石が出土しており、石英という石材の磨石については、赤色顔料の粉砕具に特化して使用されたものかもしれない。安山岩と砂岩は、泉坂下遺跡における磨石の石材として、多用されている。3～6・10は表裏

面と側面、7は表面のみ、8・9は側面のみが主に使用された。特に、「使用に伴い平坦な側面が形成されることから円柱を輪切りにしたような形態」の「I類」(鈴木 2005)は、石材が安山岩に限定されている。10は、磨石



第80図 第33トレンチ出土石器(5)

として使用された後、被熱で黒化し、周縁から剥離が施され、その剥離面の一部には使用痕らしい摩擦が観察される。

敲石 発掘調査で出土した10点と水洗選別で抽出した1点を敲石として報告する(第79図11~21)。そのうち3点(15・16・19)は、凹石が敲石に転用されている。また、1点(11)は、オパールの石核を敲石に使用しており、これについては石棒や磨製石斧などの整形具であったことが想定される。その他は、棒状から楕円形の礫を素材としており、凹石の転用も含めて石材は砂岩が圧倒的に多い。すべて長軸の端部に使用痕が集中するものである。

凹石 敲石に転用された3点(第79図15・16・19)の他に、これらとほぼ同じ法量・形態と推定される小型の凹石が1点(第80図1)、大型の凹石が1点(3)がある。ともに発掘調査で出土した。3の凹部付近には敲打痕が観察される。

石皿 発掘調査で石皿の破片が出土した(第80図

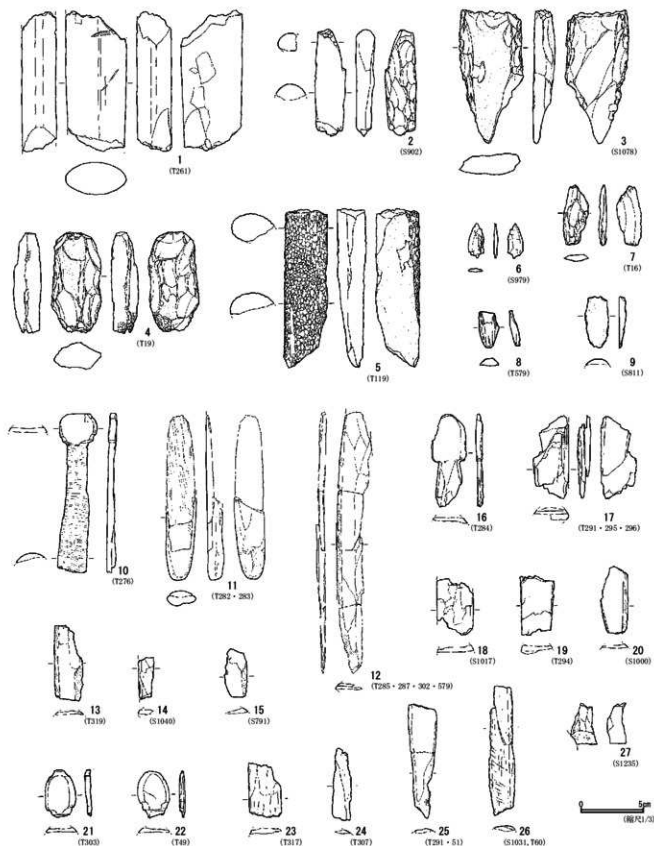
2)。石材は多孔質安山岩。使用面に薄く赤色顔料の付着が認められる。

台石 発掘調査で出土した大型の礫の一部にわずかな敲打痕が残されており、石器製作に使用された台石と考えられる(第80図4)。

砥石 発掘調査と水洗選別で検出された砥石のうち9点を報告する(第80図5~13)。破片は他にも出土しており、全て板状の固定式砥石の破片である。但し、固定式砥石の破片を可動式砥石に転用するものもあり、細片については確実でない。石材はすべて軟質砂岩。砂粒が粗いもの(5・7~9・11・12)、細かいもの(10・13)、粗と細の中間的なもの(6)がある。被熱の痕跡が明瞭なものが多い。

参考文献

鈴木素行『2005「本覚遺跡の研究」(私家版)』



第81図 第33トレンチ出土石製品(1)

8 石製品

石製品として報告するのは、石棒・独結石(第81図)と垂飾り・玉類(第82図)である(第10表)。

石棒 石棒には、成品として使用されたものと、未成品や製作に伴う剥片や砕片とがあり、接合の上、26点(第81図1~26)を報告した。他にも発掘調査で検

出された24点、水洗選別で抽出された264点の破片・破片があり、これについては、第27トレンチの分析(鈴木2016)と同様に一覧表(第10表末尾)を付してある。石材は、1点を除いてすべて粘板岩である。

1は、三波川変成帯の緑色片岩を素材とした石剣の胴部破片である。表面の傷は発掘時に付いたものであるが、裏面の剥離は火撥ねによるものである。被熱痕が認められ、成品として使用されたと考えられる。第5層「大洞C2式」の層位から出土したが、胴部が47mmと幅広であることから、製作の時期は、晩期前葉に遡ることが考えられる。

2は、もともと断面が円形あるいは楕円形に製作された石棒を再加工し、石剣を製作する途上の未成品ではないかと考えられる。研磨面には、擦痕がほとんど観察されない。

3～9は、石棒製作の未成品と製作に伴う剥片。3は剥離段階の頭部に相当する破片であろう。4の敲打痕は、「敲き切り」(鈴木2016)に伴うものであり、剥離段階の端部が切断された破片である。5は敲打段階の未成品であり、節理面で割られるように欠損したものであろう。敲打痕のクレーターは比較的大きい。6・7は剥離段階に生成された剥片。8・9は、擦痕が明瞭であることから、研磨段階の未成品として捉えた。

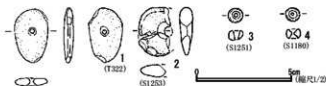
10～26はすべて、粘板岩を素材として製作され、明瞭な被熱痕が認められる。形態を異にする頭部があることから明らかなように複数の個体があり、石材の性状などから識別を試みたところ、少なくとも4個体が含まれていると判断された。

個体A 第81図10～15。基部付近の断面形状から石剣と判断される。被熱により表面が粉っぽい印象を受ける。火撥ねにより多数の破片に分割され、表面はほとんど赤化しているが、内部に灰色を残す。基部(11)は被熱により発泡したような状態。

個体B 第81図16～20。胴部の断面形状から石剣と判断される。被熱の痕跡の赤化は、個体A・Cより色がかなり薄い。

個体C 第81図21・22。被熱により表面が粉っぽい印象を受ける。同一の頭部が火撥ねにより薄く剥がれたものであるが、接合はしない。

個体D 第81図23～26。石材には鉱物の脱落痕の



第82図 第33トレンチ出土石製品(2)

ような微細な空洞が観察される。被熱の痕跡は、黒化として残されている。

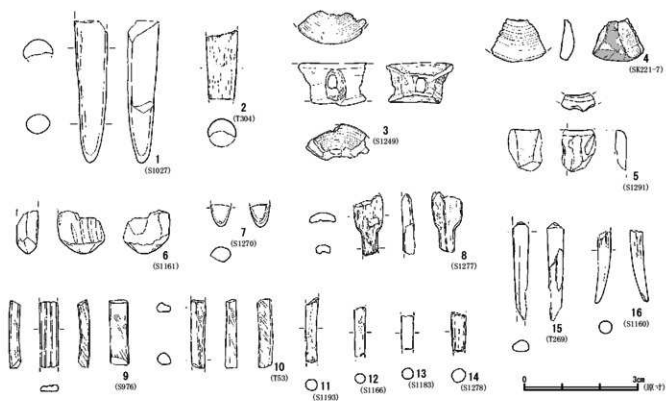
遺物包含層を完掘していないことから、残存する部位などは確定したわけではない。また、水洗選別で検出された破片の中には、これらと同一個体と見られるものもあるが、特に個体Aと個体Bの胴部破片の識別は難しく、一覧表には同一個体の判断を記載していない。

独鈷石 独鈷石は、1点(第81図27)のみであり、水洗選別で検出された。小破片ではあるが、敲打により括れ部が作出されており、独鈷石と判断した。石材はホルンフェルスであり、既往の調査で出土した独鈷石は、第18トレンチ(後藤≒2014)と第27トレンチ(後藤≒2016)の破片がホルンフェルス、C地区(後藤≒2015)の完形が砂岩であった。

垂飾り 垂飾りとして報告するのは2点(第82図1・2)であり、1点は水洗選別で検出された。石材はともに凝灰岩で、扁平な小礫に穿孔したものである。このような垂飾りは既往の調査でも、隣接する第27トレンチ(第26号型穴住居跡)から水洗選別で凝灰岩の1点(後藤≒2016)、第1トレンチ(第2号型穴住居跡11内)から水洗選別で泥岩の1点(鈴木≒2011)が出土している。

玉類 玉類は水洗選別で3点の小玉が検出され、2点(第82図3・4)を報告する。3は、石材が翡翠で、一方向から穿孔されている。4は、石材が蛇紋岩で、二方向から穿孔されている。未報告の小玉は、石材が翡翠の微細片で、D6g5区第4層の土壌サンプルに含まれていたものである。このような小玉は既往の調査でも、隣接する第27トレンチ(第26号型穴住居跡)から発掘の2点と水洗選別の2点以上(後藤≒2016)、第1トレンチから1点(鈴木≒2011)が出土している。

覆土を掘り込まず、水洗選別を実施していない調査との比較は難しいものの、第27・33トレンチには使用痕を有した石棒とともに、垂飾り・玉類、さらには骨角器の装身具が集中することは注意される。



第83図 第33トレンチ出土骨角器

9 骨角器

骨角器として報告するのは14点であり、そのうち3点は発掘調査で、11点は水洗選別で検出された(第83図、第11表)。発掘調査では2点の出土位置を記録したが、もう1点は、骨類として一括で取り上げられ、整理時に抽出された。

1は鹿角の先端部であり、2にはその同一個体の可能性がある。鹿角の表面に特徴的な凸凹は見られないが、それは先端部の自然面であり、研磨や端部の使用痕はほとんど認められない。泉坂下遺跡では、多量の石核・剥片、さらに未成品や調整剥片が認められることから、石器を製作していたことは確実であり、押圧剥離のための工具の存在が想定される。将来の検討のために報告に揭げておく。

3・4は、サメの椎骨である。3は縦長の2穴が椎体の側面に2対で開く椎骨である。全体の4分の1ほどが残存し、直径は45mmほどであったと推定される。穴の状態が残存するのは1穴のみで、これと対になるもう1穴は破断面に観察される。加工の痕跡は認められないが、鼓形の形態から耳飾りとして使用されたか、あるいは4のような製品の素材であった可能性が考えられる。4は、

椎頭部分の破片であり、内面が研磨されている。研磨が及んでいないのは椎体の穴の部分で、これも縦長の2穴が椎体の側面に2対で開く椎骨である。類例は福島県寺脇貝塚(馬目=1966)にあり、中央を穿孔し内面を研磨した環状の製品が5点出土している。垂飾りであり、1個の椎体から2点が製作できて対になることから、耳飾りではないかと想定される。なお、3の一部は灰色を帯びるが、これが被熱によるものか、化石化によるものかの判断は難しい。

5は、鹿角製の弓形製品。極部分的な破片ではあるが、中心孔の直径は14mmほどと推定される。外面には鹿角の自然面の凹部が残る。6・7は、端部に研磨痕が観察された破片。8は、鹿角製であろうか、髮針の頭部破片である。9～16も、髮針の針部の破片ではないかと見られる。

参考文献

馬目順一=1966「寺脇貝塚」郡城市教育委員会

測定	法記	フィロ	層位	地層	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
---	0801	D69	層土	砂片	粘板石	10	5	1	<0.1	
---	01423	D69	層土	砂片	粘板石	9	4	1	<0.1	
---	0141	D69	層土	砂片	粘板石	7	4	1	<0.1	
---	1284H	D69	層土	砂片	粘板石	8	2	1	<0.1	
---	0143	D69	層土	砂片	粘板石	7	4	1	<0.1	
---	01442	D69	層土	砂片	粘板石	6	5	1	<0.1	
---	0842	D69	不・覆	砂片	粘板石	39	19	3	2.9	焼板
---	0741	D69	不・覆	砂片	粘板石	24	10	5	1.4	
---	0841	D69	不・覆	砂片	粘板石	14	12	4	0.6	焼板
---	0741	D69	不・覆	砂片	粘板石	23	11	1	0.4	
---	0841	D69	不・覆	砂片	粘板石	19	11	2	0.4	焼板
---	0841	D69	不・覆	砂片	粘板石	17	11	2	0.4	焼板
---	01211	D69	不・覆	砂片	粘板石	15	7	2	0.2	
---	0842	D69	不・覆	砂片	粘板石	13	8	1	0.2	焼板
---	0842	D69	不・覆	砂片	粘板石	12	7	2	0.2	焼板
---	0741	D69	不・覆	砂片	粘板石	12	5	1	<0.1	
---	01241	D69	不・覆	砂片	粘板石	9	4	1	<0.1	
---	0841	D69	不・覆	砂片	粘板石	8	4	1	<0.1	焼板
---	0742	D69	不・覆	砂片	粘板石	7	5	1	<0.1	
---	0841	D69	不・覆	砂片	粘板石	7	3	1	<0.1	焼板
---	0841	D69	不・覆	砂片	粘板石	6	3	1	<0.1	焼板
---	0741	D69	不・覆	砂片	粘板石	4	3	1	<0.1	

*「長さ・幅・厚さ」の単位はmm、「重さ」の単位はg。

*「備考」の「石材鑑定」は岩切実習簿氏による。

第11表 第33トレンチ出土骨角器一覧表

測定	法記	グロッ	層位	地層	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
08430H1	S 1027	D68	8	押江洲礫石 ^o	ニホンジカ・角	37	8	5.5	1.6	
2	T 304	D68	6	押江洲礫石 ^o	ニホンジカ・角	18	8.5	5	0.6	S1027と同・カ
3	S 1249	D71	6	江崎川 ^o	エイ・ヤマシロ・葉片	17	10.5	8	0.4	水洗
4	S8221-F	D71	6	江崎川 ^o	エイ・ヤマシロ・葉片	10	13	3.5	0.2	水洗
5	S 1291	D69	6	岩前川 ^o	ニホンジカ 7・角?	11	8.5	5	0.3	水洗
6	S 1161	D71	6	不明	ニホンジカ・角	11.5	11	6	0.5	水洗
7	S 1270	D69	5	不明	ニホンジカ・角	6	5	4	0.1	水洗
8	S 1277	D69	6	岩崎川 ^o	ニホンジカ 7・角?	16	8	3	0.3	水洗
9	S 976	D71	8	岩崎川 ^o	葉片・不明	17.5	5	3	0.4	水洗
10	T 53	D71	1	岩崎川 ^o	葉片・不明	18	3.5	3	0.3	水洗
11	S 1193	D69	8	岩崎川 ^o	ニホンジカ 7・角?	17.5	3	3.5	0.2	水洗
12	S 1146	D69	6	岩崎川 ^o	葉片・不明	13	2.5	2	0.2	水洗
13	S 1183	D69	5	岩崎川 ^o	ニホンジカ 7・角?	9	3	3	0.1	水洗
14	S 1278	D71	8	岩崎川 ^o	ニホンジカ 7・角?	10.5	4	3.5	0.1	水洗
15	T 269	D72	8	岩崎川 ^o	ニホンジカ・角	25.5	4	3	0.3	
16	S 1160	D71	6	岩崎川 ^o	ニホンジカ 7・角?	17.5	3	3	0.2	水洗

*「長さ・幅・厚さ」の単位はmm、「重さ」の単位はg。

*「石材」は、パブリックサービス株式会社情報から引用。

V-92頁 参考文献

二階堂卓信 2019「高師小館」が出た! 「ふるさと歴史」第2集
東海村教育委員会 38-39頁

1 泉坂下遺跡第5・6次調査出土の動物遺存体の同定

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

泉坂下遺跡は、那珂台地から東に下った久慈川右岸の低段丘上に位置する。これまでの発掘調査により、縄文～平安時代にわたる集落や墓域などが確認されている。また、弥生時代中期の再葬墓遺跡として残存状況が良好な遺構が確認され、墓域の全貌が判明したことも知られている。今回、第5次調査、第6次調査において検出された骨類について、その種類を明らかにするために骨同定を実施した。

1 試料

試料は、第5次調査、第6次調査から採取された骨類である。第5次調査では、73試料の内、骨角器のサンプル番号136と613の2試料が対象とされている。この他、比較的保存状態が良好なサンプル番号3・25・26・118・552・693・696も観察した。

第6次調査では、32・33トレンチにおいてドットで取り上げられた骨の他、水洗選別により多数の骨が得られており、これらの中から分析試料が選択されている。ドットで取り上げられた骨は、20試料である。一方、水洗選別された試料は、23試料である。この他、試料全体を観察して、比較的保存状態が良好な骨も観察した。なお、試料の詳細については、結果とともに表示する。

2 分析方法

試料を実体顕微鏡および肉眼観察を行い、形態的特徴から種・部位を特定する。

3 結果

第5次調査、第6次調査を通じて検出された種類は、二枚貝類、軟骨魚綱(エイ・サメ類)、硬骨魚綱3種類(アユ・サケ科?・タイ科)、両生綱(カエル類)、鳥綱、哺乳綱3種類(ネズミ類・イノシシ・ニホンジカ)である(表1)。第5次調査の結果を表2、第6次調査の結果を表3に示す。以下、調査年次ごとに結果を記す。

表1. 検出動物分類群一覧

軟体動物門	Phylum Mollusca
二枚貝類	Class Bivalvia
	二枚貝類 Ord. et. fam. indet.
脊椎動物門	Phylum Vertebrata
軟骨魚綱	Class Chondrichthyes
軟骨魚綱	Subclass Elasmobranchii
	エイ・サメ類 Ord. et. fam. indet.
硬骨魚綱	Class Osteichthyes
魚綱	Subclass Actinopterygii
サケ目	Order Salmoniformes
アユ科	Family Plecopterygidae
アユ	Plecoglossus altivelis altivelis
サケ科?	Family Salmonidae?
サケ科?	Fam. et. gen. indet.
スズキ目	Order Perciformes
スズキ目	Suborder Percoidei
タイ科	Family Sparidae
タイ科	Gen. et. sp. indet.
両生綱	Class Amphibia
類尾目	Order Anura
	カエル類 Fam. et. gen. indet.
鳥綱	Class Aves
	鳥綱 Ord. et. fam. indet.
哺乳綱	Class Mammalia
ネズミ目(齧歯目)	Order Rodentia
ネズミ科	Family Muridae
ネズミ類	Gen. et. sp. indet.
ウシ目(偶蹄目)	Order Artiodactyla
イノシシ科	Family Suidae
イノシシ	Sus scrofa
シカ科	Family Cervidae
ニホンジカ	Cervus nippon

<第5次調査>

出土した骨は、いずれも焼けている。骨角器(サンプル番号136)は、イノシシの第2/5中手骨/中足骨、ニホンジカの角、獣類の部位不明破片である。骨角器(サンプル番号613)は、ニホンジカの角の可能性のある破片である。

この他、イノシシの下顎骨(SI26:サンプル番号552)、ニホンジカの末節骨(SI33:サンプル番号3)、ニホンジカの右桡骨近位端(SI33:サンプル番号118)、獣類の椎骨片(サンプル番号693)・大腿骨近位端片(サンプル番号696)がみられる。

<第6次調査>

二枚貝類は、1点(遺物番号2026)のみ確認されるが、種類不明の破片である。

魚類では、エイ・サメ類の椎骨(遺物番号2027, 1249)、エイ・サメ類の椎骨の可能性のある破片(遺物番号7)、アユの尾椎(遺物番号1199)、サケ科椎骨の可能性のある破片(サンプル番号053-04)、タイ科の歯10点、タイ科の可能性のある鱈類(遺物番号1294)、魚類の椎骨2点・鱈類9点・部位不明破片2点がみられる。

表2. 第5次確認調査出土骨同定結果

試料種別	サンブル番号	トレンチ	遺構	種類	部位	左右	部分	数値	調査	加工	備考
骨角類	136	29	—	イノシシ ニホンジカ	第2/5中手骨/中足骨 角		破片	1	○	○	遠位端本化骨列外
				鹿類	不明		破片	1	○	○	
	613	30	—	ニホンジカ?	角?		破片	1	○	○	骨角類(鹿科歯部)
	552	29	SI26	イノシシ	手骨		連合部	1	○		
別遺構出土	3	31	SI33	ニホンジカ	尾椎骨		尾椎部	1	○		
	118	31	SI33	ニホンジカ	椎骨	右	遠位端	1	○		
	25	29	—	イノシシ	中脚骨		椎元	1	○		3片の内1点を対象
	26	29	—	イノシシ	中脚骨		椎元	1	○		
	693	30	—	鹿類	椎骨		椎体片	1	○		3片の内1点を対象、焼痕
	696	30	—	鹿類	大腿骨		骨端	1	○		

カエル類は、右腸骨(遺物番号111)、脛骨(遺物番号1243)の2点が検出される。

鳥類は、部位不明破片が16点みられる。また、鳥類趾骨の可能性のある破片が1点(遺物番号1274)、鳥類の可能性のある破片が2点ほど確認される。

イノシシは、歯牙片12点、左第3手根骨、右第4手根骨、右脛骨遠位端、左距骨3点、右距骨1点、右第3足根骨、中手骨/中足骨2点、基節骨2点、第2/5中節骨3点、第2/5末節骨1点が確認される。ニホンジカは、角の破片22点、歯牙片2点、ニホンジカの角の可能性のある破片が13点確認される。

この他、ネズミ類の尾椎3点、哺乳類の歯牙・椎骨・大腿骨・中手骨/中足骨/距骨・四肢骨の可能性のある破片・部位不明破片などが確認される。

なお、多くの骨は焼けているが、二枚貝類の殻は焼けておらず、エイ・サメ類の椎骨、タイ科の歯牙、イノシシやニホンジカの歯牙の中にも、焼けていない骨が含まれる。

4 考察

SI26・SK220で検出されたカエル類やネズミ類は、食料資源等としての利用でなく、おそらく周辺に生息していたものに由来すると考えられる。ただし、いずれも焼骨であることから、廃棄する際に何らかの意図を持って焼けていると考えられる。

アユは川で生活して産卵するが、仔稚魚期に海で生活するほか、サケ科は陸封型と海洋生活で成熟して河川に回帰する降海型がみられる。久慈川等の河川で生息していたものを捕獲したとみられる。今回観察した試料では全体的に哺乳類の焼骨が主体となっている。しかし、同定対象としていない試料の中には、アユ(SS97・111)やコイ科の仲間(SS79.2)などが含まれている。そのため、一概に河川での漁漁活動が主体となっていなかったとは

言えず、今後より微小な骨類の観察を行い、その全貌を明らかにすることが望まれる。なお、茨城県内では、玉造町(現行方市)の井上貝塚において淡水産のギバチ、フナ、コイ等の椎体・咽頭歯が極少量検出したとされている(江.1999)。また、竜ヶ崎市南三島遺跡では、ウナギやコイ科などが検出され、アユに限定されるサケ亜目も検出されている(小池・森本,1986)。この他、千葉県市原市の西久貝塚や南中台遺跡でもアユないしアユ?などが検出されている(市原市埋蔵文化財調査センター,2007,2009)。

エイ・サメ類は、海産魚類であり、周辺の海域で捕獲されたものに由来する。茨城県内でサメ類の椎骨は、麻生町(現行方市)の大門貝塚(江.2002)や、美浦村の大谷貝塚(福泉,2009)、陸平貝塚(福泉,2010)などで検出されている。SI26の6層、SK221の覆土で検出された椎体は比較的大きく、また焼けている。骨角器等の状態として遺跡内に持ち込まれた可能性が高い。ただし、D6h5の支柱くずから検出された椎骨は、直径2.96mmと小さく、焼けておらず、加工された痕跡も見えない。このことから食料資源として持ち込まれていたことが考えられる。

タイ科は、歯牙のみが検出されている。焼けているものもあれば、焼けていないものも含まれる。タイ科の歯は、前上顎骨や歯骨の前方に犬歯状の、中央から後方にかけて臼歯状の歯がみられ、タイ科の歯出済みの歯は歯肉を取ると脱落する性質がある。しかし、観察した試料の範囲内では前上顎骨や歯骨を認めることができなかった。近年、富山県小竹貝塚では、タイ科の歯が埋め込まれた漆製品が確認されている(山崎ほか,2014)。今回遺跡内で出土したタイ科の歯が素材として利用されていたか不明であるが、タイ科の利用や種類を明らかにするためにも今後とも資料を蓄積していくことが望まれる。

鳥類は、詳細な種類を特定することができなかったが、被熱していることから食料資源等として利用された

後に廃棄されたものと思われる。破片から想定される大きさとしては、断定できないがマガモやキジクラスの程度の可能性があり、少なくともスズメ類よりも大きく、タカ類よりも小さいと考えられる。

イノシシやニホンジカは、縄文時代以降の遺跡において最もよくみられる種類である。食料資源等のほかに、毛皮の利用、骨角器の素材としての利用がある。特にニホンジカの角には加工した痕跡がみられる。なお、イノシシの手中骨/中足骨(遺物番号901・1000)、第2/5中節骨(遺物番号23)、第2/5末節骨(遺物番号2021)は、骨端の骨化が弱いか未癒合、あるいは小さいことなどから幼獣と考えられる。また、歯(遺物番号1206・1300)も未出歯牙であることから幼獣に由来する。茨城県内に位置する貝塚でニホンジカ・イノシシ以外の種類では、つくば市の上境旭台貝塚でアナグマ・タヌキが(西本2015)、玉造町(現・行方市)の井上貝塚でイヌ・タヌキ・テン・ネズミ類等(訂1999)が、麻生町(現・行方市)の於下貝塚でノウサギ・アカネズミ・タヌキ・キツネ・イヌ・テン・アナグマ・クジラ類・イルカ科・バンドウイルカ(麻生町教育委員会1992)が検出されている。本遺跡においてもニホンジカ・イノシシ以外の動物が利用されていた可能性があり、今後の調査に期待したい。

引用文献

麻生町教育委員会.1992.於下貝塚発掘調査報告書.202p.
 市原市教育委員会市原市埋蔵文化財調査センター.2007.市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書 第2集 (上総国分寺台遺跡調査報告XⅥ) 市原市西広貝塚Ⅲ(本文篇2).市原市教育委員会市原市埋蔵文化財調査センター.1550p.

表3.第6次確認調査出土骨同定結果

分析 部位	試料種別	遺物番号 (サンピル化番号)	トレンチ	グリッド	層位	種類	部位	左右	部分	数量	被 加 工	所 見
3	発掘調査	434	32	D65	B2・B3・B B	ニホンジカ	角		縦片	1	○	
16	発掘調査	1834	32	D645	不明	不明	前脚		縦片	1	○	○
82	発掘調査	901	32	D645	不明	イノシシ	手中骨/中足骨		遠位端	1	○	非化石骨端
187	発掘調査	22	33	D640	4層	ニホンジカ	角		縦片	1	○	
194	発掘調査	1027	33	D648	8層	ニホンジカ	角		縦片	1	○	○
198	発掘調査	55	33	D648	不明	イノシシ	前脚	左	縦片	1	○	
199	発掘調査	304	33	D648	4層	ニホンジカ	角		縦片	1	○	
200	発掘調査	308	33	D648	5層	ニホンジカ	角		縦片	3	○	
202	発掘調査	579	33	D648	5層	ニホンジカ	角		縦片	4	○	
202	発掘調査	579	33	D648	5層	イノシシ	前脚	右	恥骨	1	○	
281	発掘調査	1000	33	D649	5層	ニホンジカ	角		縦片	1	○	
283	発掘調査	1021	33	D649	6層	イノシシ	第3趾骨	右	恥骨	1	○	
285	発掘調査	1058	33	D649	6層	イノシシ	前脚		遠位端片	1	○	
291	発掘調査	32	33	D649	1層	ニホンジカ	角		縦片	1	○	
424	発掘調査	910	33	D711	6層	ニホンジカ	角		縦片	1	○	
425	発掘調査	976	33	D711	8層	野鳥	前脚		縦片	1	○	○
427	発掘調査	1	33	D711	SK22(土)	大型獣類	棒骨		縦片	1	○	棒状未定骨片
429	発掘調査	53	33	D711	1層	野鳥	不明		縦片	1	○	○
442	発掘調査	269	33	D712	6~8層	ニホンジカ	角		縦片	1	○	○
448	発掘調査	82	33	D649	SK22(土)	大型獣類	不明		縦片	2	○	
58	発掘調査	307	32	D645	1~3層	イノシシ	前脚	左	縦片	1	○	

市原市教育委員会埋蔵文化財調査センター.2009.市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第10集 上総国分寺台遺跡調査報告XX 市原市南中台遺跡・荒久遺跡A地点.344p.

小池節子・森本治美.1986.附章 南三島遺跡5区地点貝塚出土の自然遺物同定 一特に貝層の季節性と魚骨類・貝類類組・殻高類組との関連について一.茨城県教育財団文化財調査報告第32集 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書12 南三島遺跡5区,財団法人茨城県教育財団.355-375.

西本豊弘.2015.上境旭台貝塚平成22年度調査出土の動物遺体.「茨城県教育財団文化財調査報告第397集 上境旭台貝塚4 中根・金田特定土地地区両管理事業地埋蔵文化財調査報告書XⅩ」.公益財団法人茨城県教育財団.158-163.

訂 安衛.1999.井上貝塚出土脊椎動物遺体.「茨城県行方郡玉造町 井上貝塚出土脊椎動物遺体調査報告書」.玉造町跡調査会.1-25.

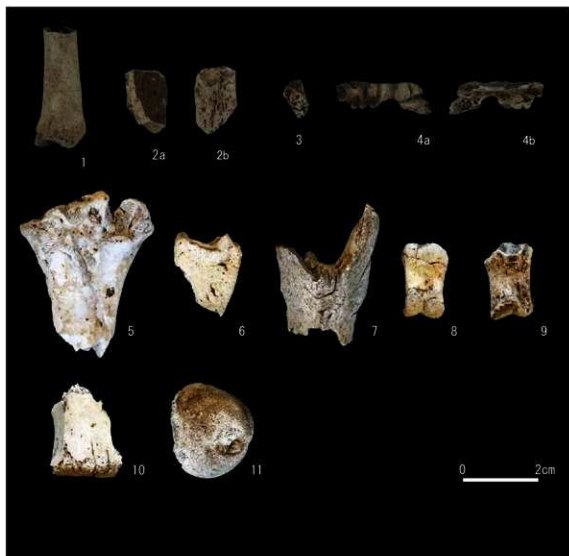
訂 安衛.2002.大門貝塚 C地点発掘調査報告書.大門貝塚C地点発掘調査会.46p.

福泉浩二.2009.大谷貝塚の貝層サンプルから得られた動物遺体.茨城県教育財団文化財調査報告第317集 大谷貝塚 国道125号大谷バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書2 下巻.発行財団法人茨城県教育財団.591-604.

福泉浩二.2010.貝類・脊椎動物遺体の分析.晩平研究所叢書5 茨城県稲敷郡美浦村 陸平貝塚 一調査研究報告4・1987年度確認調査の成果一.美浦村教育委員会.124-144.

山崎 健・丸山真史・菊池大樹・田村朋美・赤田昌倫・星野安治・大河内隆之・鈴木三男・小林和貴.2014.鯛の歯を象徴した漆製品.「富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第60集 小竹貝塚発掘調査報告一北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘報告X-第二分冊 自然科学分析編」.公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所.279-292.

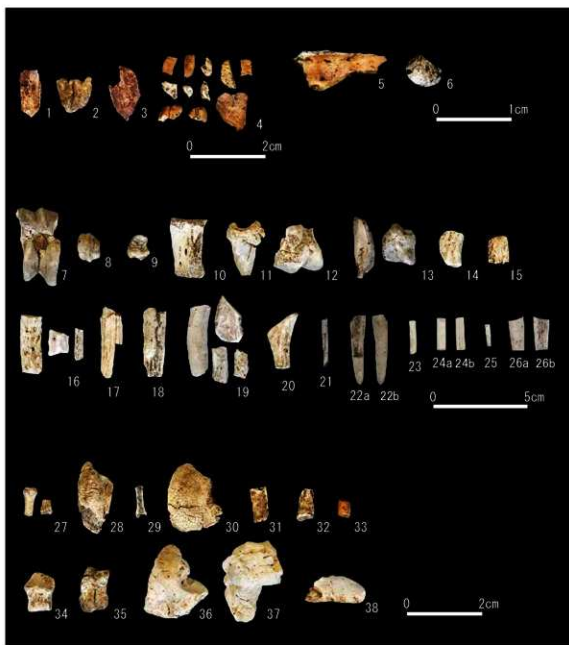
図版1 5次調査



1. イノシシ第2,5中手骨 / 中足骨 (No.136,29T)
3. 獣類部位不明破片 (No.136,29T)
5. ニホンジカ右横骨 (No.118, S33, 31T)
7. イノシシ下顎骨 (No.552 : S26 : 29T)
9. イノシシ中脛骨 (No.26 : 29T)
11. 獣類大腿骨 (No.696 : 30T)

2. ニホンジカ角 (No.136,29T)
4. 骨角器 (髪針頭部) ニホンジカ角? (No.613,30T)
6. ニホンジカ末脛骨 (No.3 : S33 : 31T)
8. イノシシ中脛骨 (No.25 : 29T)
10. 獣類椎骨 (No.693 : 30T)

図版2 6次調査(1)



1. ニホンジカ歯牙 (D711 5層 S126-1280)

2. ニホンジカ歯牙 (D69 5層 S126-1275)

3. 獣類歯牙 (D69 6層 S126-1323)

4. イノシシ右距骨 (D68 33T-579)

5. イノシシ右第3足指骨 (D69 S126-1021)

6. イノシシ基節骨 (D69 S126-1058)

7. 大型獣類不明 (SK220-62 覆土中)

8. ニホンジカ角 (D69 S126-1000)

9. ニホンジカ角 (D60 33T-22)

10. ニホンジカ角 (D68 33T-579)

11. ニホンジカ角 (D712 33T-269 骨角器)

12. 獣類部位不明破片 (D711 33T-53 骨角器)

13. 獣類部位不明破片 (D645 32T-1834 骨角器へアヒン)

14. ネズミ類尾椎 (D60 8層 S126-1266)

15. 鳥類?趾骨 (D69 5層 S126-1274)

16. 獣類不明 (D69 SK220 S126-1281)

17. 獣類不明 (D60 5層 S126-1325)

18. イノシシ第2.5中趾骨 (D615 1・3層 32T-2021)

19. イノシシ右第4手根骨 (D615 反844 32T-2014)

20. イノシシ歯牙 (D60 8層 S126-1206)

21. イノシシ歯牙 (D60 5層 S126-1300)

22. 二枚貝綱殻 (D615 1・2層 32T-2026)

23. イノシシ中手骨 / 中足骨 (D615 32T-901)

24. 大型獣類椎骨 (D711 覆土中 SK221-1)

25. イノシシ左距骨 (D68 33T-55)

26. ニホンジカ角 (D711 S126-910)

27. ニホンジカ角 (D68 33T-308)

28. ニホンジカ角 (D615 32T-454)

29. ニホンジカ角 (D69 33T-52)

30. ニホンジカ角 (D68 S126-1027 骨角器)

31. 獣類部位不明破片 (D711 S126-976 骨角器)

32. ニホンジカ角 (D68 33T-304 骨角器)

33. ニホンジカ / イノシシ中手 / 中足 / 距骨 (D711 8層 S126-1286)

34. イノシシ左距骨 (D60 8層 S126-1273)

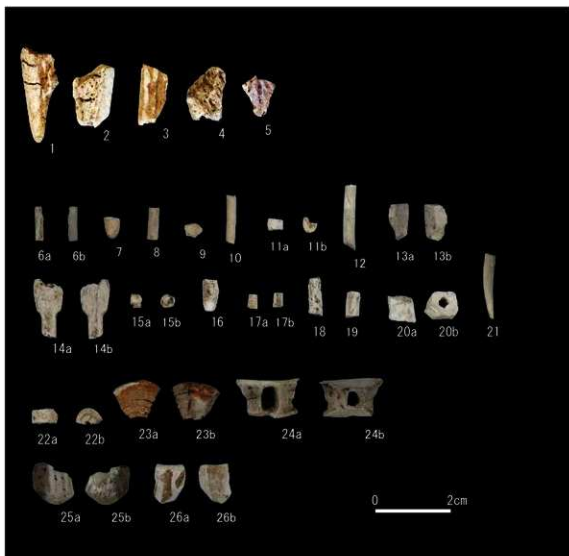
35. イノシシ第2.5末趾骨 (D615 1・3層 32T-2021)

36. イノシシ第2.5中趾骨 (D615 1・3層 32T-2015)

37. イノシシ左第3手根骨 (D615 反844 32T-2014)

38. 獣類不明 (D615 1・2層 32T-2023)

図版3 6次調査(2)



1. ニホンジカ角 (D6i9 6層 S126-1244)

3. ニホンジカ角 (D6i9 6層 (SK220含む) S126-1248)

5. ニホンジカ角 (D6i9 1・2層 S21-2022)

7. ニホンジカ角 (D6i0 5層 S126-1270 骨角器)

9. ニホンジカ角 ? (D6i9 1層 S126-1247 骨角器)

11. ニホンジカ角 ? (D6i9 5層 S126-1250 骨角器)

13. 獣類部位不明破片 (D6i9 4層 S126-1265 骨角器)

15. ニホンジカ角 ? (D6i9 5 1・2層 S21-2019 骨角器)

17. 獣類歯根 ? (D6i0 4層 S126-1211 骨角器 ?)

19. ニホンジカ角 ? (D6i9 5 1・2層 S21-2005 骨角器)

21. ニホンジカ角 ? (D7i1) S126-1160 骨角器)

23. エイ・サメ類椎骨 (D7i1 SK221-7 骨角器)

25. ニホンジカ角 (D7i1 6層 S126-1161 骨角器)

2. ニホンジカ角 (D6i9 1層 S126-1272)

4. ニホンジカ角 (D6i9 S126-1269)

6. ニホンジカ角 ? (D6i9 5層 S126-1182 骨角器)

8. ニホンジカ角 ? (D6i9 5層 S126-1183 骨角器)

10. 獣類部位不明破片 (D6i0 6層 S126-1166 骨角器)

12. ニホンジカ角 ? (D6i0 8層 S126-1193 骨角器)

14. ニホンジカ角 ? (D6i0 6層 S126-1277 骨角器)

16. 獣類部位不明破片 (D7i1 1層 S126-1267 骨角器 ?)

18. ニホンジカ角 ? (D7i1 8層 S126-1278 骨角器)

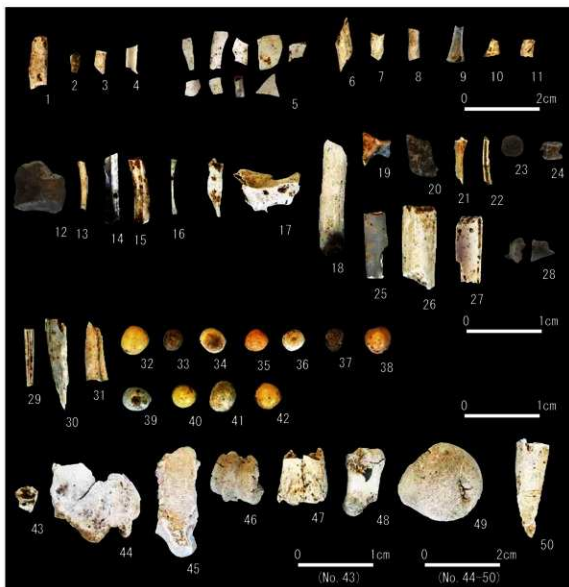
20. ニホンジカ角 ? (D6i0 S126-1284)

22. 獣類四肢骨 ? (D6i0 5層 S126-1153 骨角器)

24. エイ・サメ類椎骨 (D7i1 6層 S126-1249 骨角器)

26. ニホンジカ角 ? (D6i9 6層 S126-1291 骨角器)

図版4 6次調査(3)



- 1 鳥類部位不明破片 (D69 8層 S126-1290)
- 3 獣類? 部位不明破片 (D60 8層 S126-1282)
- 5 鳥類部位不明破片 (D6h5 灰844-2018)
- 7 鳥類部位不明破片 (D6g5 1-2層 32T-2018)
- 9 ネズミ類尾椎 (D6e9 6層 S126 (SK220舎)-1299)
- 11 鳥類部位不明破片 (D69 8層 S126-1276)
- 13 魚類鰓棘等 (D72 6層 S126-1252)
- 15 魚類鰓棘等 (D6e9 6層 S126-1324)
- 17 魚類不明 (D72 6層 S126-1297)
- 19 カエル類右腸骨 (D69 覆土 SK220-111)
- 21 魚類鰓棘等 (D6e9 8層 S126-1298)
- 23 エイ・サメ類椎骨 (D6h5 1-2層 32T-2027)
- 25 鳥類部位不明破片 (D60 6層 S126-1285)
- 27 魚類鰓棘等 (D6g5 1-2層 32T-2020)
- 29 魚類鰓棘等 (D6e9 1層 S126-1271)
- 31 魚類鰓棘等 (D60 8層 S126-1292)
- 33 タイ科歯牙 (臼歯状) (D7i1 1層 S126-1301)
- 35 タイ科歯牙 (臼歯状) (D7i1 4層 S126 9-7)
- 37 種類・部位不明破片 (D7i1 5層 S126 17-3)
- 39 タイ科歯牙 (臼歯状) (D69 8層 東壁 S126-1205)
- 41 タイ科歯牙 (臼歯状) (D60 8層 S126-1240)
- 43 サケ科? 椎骨? (D6i5 1-3層 32T)
- 45 イノシシ左距骨 (D6g5 32T-307)
- 47 イノシシ基節骨 (D6i5 1-3層 32T-053-01)
- 49 獣類大腿骨 (D7i1 SK221 覆土 33T)

- 2 鳥類? 部位不明破片 (D7i1 5層 S126-1306)
- 4 鳥類部位不明破片 (D7i1 8層 S126-1287)
- 6 鳥類部位不明破片 (D60 6層 S126-1289)
- 8 鳥類部位不明破片 (D60 8層 S126-1283)
- 10 鳥類? 部位不明破片 (D7i1 1層 S126-1268)
- 12 獣類歯牙 (D60 8層 S126-1295)
- 14 魚類鰓棘等 (D7i1 8層 S126-1296)
- 16 カエル類距腓骨 (D60 5層 S126-1243)
- 18 魚類鰓棘等 (D6e9 6層 S126-1288)
- 20 獣類部位不明破片 (D69 覆土 SK220-111)
- 22 魚類鰓棘等 (D60 8層 S126-1207)
- 24 アユ科尾椎 (D6g5 1-2層 32T-1199)
- 26 ニホンジカ角? (D6e5 1-2層 32T-2017)
- 28 魚類椎骨 (D6g5 1-2層 32T-2010)
- 30 タイ科? 鰓棘等 (D72 6層 S126-1294)
- 32 タイ科歯牙 (臼歯状) (D619 4層 S126-1260)
- 34 タイ科歯牙 (臼歯状) (D7i1 S126-1242)
- 36 タイ科歯牙 (臼歯状) (D7i1 5層 S126 13-5)
- 38 タイ科歯牙 (臼歯状) (D60 8層 S126-1208)
- 40 タイ科歯牙 (臼歯状) (D60 6層 S126-1241)
- 42 タイ科歯牙 (臼歯状) (D6g5 32T-1198)
- 44 イノシシ右脛骨 (D7i1 33T-53)
- 46 イノシシ中手 / 中足骨 (D69 S126 33T-1000)
- 48 イノシシ第2/5中趾骨 (D72 33T-23)
- 50 獣類部位不明破片 (D60 S126 33T-1082)

2 泉坂下遺跡(縄文時代晩期)より出土したハチの巣

久松 正樹 (つくば市立栄小学校)

はじめに

泉坂下遺跡・晩期遺跡より出土した土塊の中に、巣材として土を使用したハチ目昆虫 Hymenoptera のものと考えられるものが、3種確認できたのでここに報告する。なお、種名は寺山(2016)に従った。

1 タコつぼ型の巣について

径が6~7mm、高さ約28mmの細長いタコつぼ状の育房(ハチの幼虫を育てるために作られた部屋)を1~10個連ねた土塊(図1)が出土した。育房を築坑する習性を有するハチは、ヒメクモバチ類 *Auplopus*、トクリバチ類 *Eumenes*、ドロジガバチ類 *Sceliphron* などが知られている(岩田, 1971)。産出された巣は、複数の育房が繋がって長型であることから、ドロジガバチ類の巣と考えられる。なお、ドロジガバチ類にはニッポンモンキジガバチ *Sceliphron (Henselia) deforme nipponicum* Tsuneki, 1972、アメリカジガバチ *S. (Sceliphron) caementarium* (Drury, 1773)、キゴジジガバチ *S. (Sceliphron) madraspatanum madraspatanum* (Fabricius, 1781) の3種が知られている(寺山, 2016)が、アメリカジガバチは戦後、アメリカより侵入した外来種である(寺山・須田, 2016)。また、育房の全壁面が泥壁で取り囲まれており、隣の育房の壁面を利用しておらずニッポンモンキジガバチと考えられる(岩田, 1982)。



B: 33T No.315 36mm × 30mm × 30mm 5.5g
育房6



C: SI26 No.909 25mm × 15mm × 25mm 2.4g
育房3



D: SI26 No.15-⑤ 33mm × 12mm × 31mm 2.5g
育房3?



A: 33T No.288 51mm × 24mm × 24mm 7.9g 育房10



E: SI26 No.1204 17mm × 11mm × 28mm 1.3g
育房1?

図1 泉坂下遺跡より出土したニッポンモンキジガバチと考える土塊(A~E)

2 連結したつぼ型の巣について

径が6~8mm、高さ約24mmのつぼ型の育房を4個ほど連ねた土塊が出土した(図2)。前述したニッポンモンキジガバチとは異なり育房の壁を共有し、巣の付着面を育房の片面に利用しているような形状が見られる。築坑型のハチの巣と考えられる。育房が球形で、スズバチ *Oreumenes decoratus* (Smith, 1852)の巣に似る(久松2000)。しかし、破損、変形も見られドロジガバチ類の巣も否定できず、種の特定は困難である。

3 コンタクトレンズ状の隔壁について

ハチの中には、竹筒やヨシの茎のように、中空の細長い物体に好んで巣を作るハチがあり、こうした既存の孔に巣を作るハチは“借孔性ハチ類”または“管住性ハチ類”と呼ばれている(森林研究・整備機構, 2020)。その中で、育房間を隔てる壁の材料に土を用いるのは、ドロバチ科 Eumenidae のいくつかの種、ジガバチモドキ類 *Trypoxylon*、ルリジガバチ類 *Chalybion* など知られている(岩田, 1971)。泉坂下遺跡より出土したコンタク



図2 泉坂下遺跡より出土した築坑型のハチの巣
SI26 No1203 30mm×16mm×24mm 3.9g
育房4?



図3 泉坂下遺跡より出土したドロバチ科ハチ類の
巣の隔壁と思える土塊
SI26 No1329 8mm×7mm×4mm 0.1g

トレンズ状の土塊(図3)は、これら借孔性ハチ類の育房間を仕切る隔壁と見られ、土塊は径が7~8mmで厚さが2mmほどあるので、中・大型種の借孔性のハチ類と考えられる。比較的がっしりしたドロバチ科のオオフタオビドロバチ *Anterhynchium flavomarginatum* (Smith, 1852) や、ナミカバフドロバチ *Pararhynchium ornatum* (Smith, 1852) は、径10mm弱の孔に好んで営巣し(久松・鈴木, 1991)、茨城県で普通に見られる(久松ほか, 1986)。出土した隔壁はこれらの種の可能性が高いが、種を特定することは難しい。

4 家蜂と呼ばれるハチ類

住宅建材に竹や茅などが使われていた時代、風雨をさけたり建築資材を巣の一部に用いたりするハチが、人と同所的に暮らしていた。それら巣を築坑したり借孔したりするハチ類は“家蜂”とも呼ばれているが(岩田, 1975)、現在よりハチが身近に存在していたことに間違いはない。泉坂下遺跡より出土したハチの巣またはその一部は、ドロジガバチ類、ドロバチ類のもと考えられる。いずれも家蜂で、人の生活を巧みに利用しながら生活しているハチ類の一種である。遺跡より出土したのは、家材に付着していたハチの巣が、何らかの原因で燃え残ったものとするのが妥当であろう。

引用文献

- 久松正樹(2000)「スズバチ (*Oreumenes decoratus* Smith) の造巣活動」
茨城県自然博物館研究報告3:47-52。
久松正樹・鈴木健二(1991)「ドロバチの習性」千葉大学教育学部研究紀要36:83-92。
久松正樹・山根爽一・綿引昇二(1986)「茨城県のドロバチ科 (Eumenidae) ハチ類」茨城大学教育学部研究紀要(自然科学)35:45-64。
岩田久二雄(1971)「本能の進化 蜂の比較習性的研究」眞野書店。
岩田久二雄(1975)「人間の同居者 家蜂」自然(8):38-46。
岩田久二雄(1982)「日本蜂類生態図鑑」講談社。
寺山 守(2016)「日本産有刺眼翅類目録(2016年版)」
<https://terayama.jimdoofree.com/>
寺山 守・須田博久(2020)「日本産有刺ハチ類図鑑」東海大学出版部。
森林研究・整備機構(2020)閲覧「日本竹筒ハチ図鑑」
<https://www.ffpri.affrc.go.jp/labs/seibut/bamboohymeno/index.jhtm>

3 泉坂下遺跡出土の赤色顔料の分析:水銀朱,パイプ状ベンガラ,高師小僧

谷口陽子・村申まどか(筑波大学人文社会科学系歴史人類)

はじめに

本稿では、泉坂下遺跡において出土した赤色、土器に含まれていた物質の分析結果の一部再掲と、新たに出土した遺物に付着する赤色顔料の分析および、遺構の覆土中から出土した高師小僧について顔料の原料としての可能性を探るための調査の結果を報告する。

土器や石器などを赤彩する縄文時代の伝統は古くから知られており、ベンガラ(酸化第二鉄)や辰砂(水銀朱:硫化水銀)がその材料として知られている。古くは、エドワード・モースが縄文時代後期から赤彩がみられることを記述しており、F.F.Jewett(ジュエット)の分析結果として、大森貝塚の土器には、硫化水銀が塗布されたものがあると報告している(モース1879:25頁)。成瀬正和は、600点の赤彩遺物の分析を行っており、最古の赤彩資料として、縄文時代草創期や早期のベンガラによる彩色があることを報告している(成瀬1998)。

土器に赤彩する手法については、山内清男が議論しており、土器を焼成する前に塗布した場合と、焼成後に塗布する場合があると述べている(山内1964)。焼成後に塗布した場合については、樹脂などとともに塗られたと推察している。

土器を焼成する前、あるいは後に赤彩したのかという議論であるが、たとえば、辰砂は、加熱すると400-600℃で水銀蒸気と亜硫酸ガスになってしまうため、焼成前に土器に塗布したということは現実的には考えられない。つまり、水銀朱についていえば、基本的には、焼成後の装飾として考えたほうがよいだろう。ベンガラについては、焼成前・後に塗布された両方があった可能性がある。

1 水銀朱(硫化水銀)

明治35年には、蒔田鎗次郎が縄文時代の水銀朱に着目した論文を著している(蒔田1902)。湿式分析法を用いて判定しているので、分析は信頼に足るものであろうと考えられる。蒔田は、土器を装飾する赤色には「鉄朱(haematite)」と「水銀朱(辰砂/靈砂 cinnabar)」があり、水

銀朱については、伊勢や陸前の産地が知られているものの東京都(武蔵国)の大森貝塚、馬込貝塚、西ヶ原貝塚や茨城県(常陸国)の福田貝塚などから出土している、関東の縄文土器に使用されていることを報告している。また、石器時代の土器のうち、「美術発達最後のもの」すなわち、縄文時代後期、晩期の土器への水銀朱の利用であることをここに述べていることと、栃木県(下野)や福島県(磐城)において、管玉とともに水銀朱が出土すること、つまり、古墳時代の遺物からも水銀朱が塗彩されていることにも言及している。

その後、田辺義一が「日本石器時代の朱について」において170点の赤彩を湿式分析し、蒔田と同様に、水銀朱による赤彩は縄文時代後期から出現すると述べている(田辺1943)。その他の事例でも後期からの事例が多く(建石ほか2014など)、基本的に水銀朱の塗布は、縄文時代後期から晩期にかけて見られる伝統であろうと考えられる。

水銀朱は、天然の鉱物(辰砂)として産出するが、日本列島では、中央構造帯と北海道に産出地が知られている。かつては、水銀朱といえ、三重県丹生鉱山、徳島県水井鉱山など西日本の中央構造帯に沿って分布する鉱山からの辰砂のみが利用されてきたと考えられてきたが、近年は、風張1遺跡(青森県八戸市)の十腰内3式併行期の鉢1点、注口土器3点の合計4点に塗布された水銀朱が北海道産であるという報告もあり(河野ほか2014)、北海道産の水銀朱が縄文時代晩期に東北地方へも流通していたことが確認されている。最近では、京田遺跡(鳥根県出雲市:縄文時代後期中葉)の赤として、北海道の鉱山からの辰砂も利用されたことが明らかになり(Minami, et al. 2019)、微量元素から、関西あるいは北海道産か(三塚ほか2006)、含まれるイオウや鉛の同位体分析から、中国貴州産か国内産か(南ほか2013a, 2013b)など水銀朱の産地同定も可能になっている。

しかし、茨城県においても、水銀朱の産出に関する記録がみられる。古くは、『続日本紀』の文武天皇2(698)年、9月28日条において、伊勢国のほか、常陸・備前・

伊予・日向国などからも「朱砂」が献上されたという記述がある(経済雑誌社 1897-1901p.5)。これを引用した江戸時代の『新編常陸国誌』の記述では、「続日本紀文武紀云、初二年九月己酉、令常陸備前伊豫日向四國獻朱砂」が、「金山ノ内洞穴ヨリモ出ト云リ」と説明している(中山ほか1969)。ここでいう金山が、具体的にどこのことか不明だが、佐竹氏の金山には、大久保、保内、栗山、山尾(日立市)、瀬谷(常陸太田市)、部重(常陸大宮市大宮地域)、盛金、葉丸、久隆(常陸大宮市山方地域)、金澤、八溝、胴坂(大子町)、木葉下(水戸市)などがあったことが記されている。なかでも、久慈郡大子町にあった八溝胴坂(大子・小川両村の間)の金山は、越後金山(新潟)、佐渡金山(新潟)に次ぐ生産量を誇ったという。水銀は、金と同様に新第三紀の酸性火成岩類に伴われる浅熱水性鉱床で形成することがあるため金山で産出することが多いが、しかし、これらの水銀朱が、縄文時代にも硫化水銀鉱物として露頭に表出するなどの形で利用可能だったかどうかはわからない。今後、同位体比や微量元素の分析が進み、茨城県の辰砂の利用が先史時代にもあったかどうかを検討することが必要である。

一方、弥生時代の水銀朱利用については、関東ではほとんど事例がないが、北部九州において、前期から後期初頭にかけて喪棺が盛行した時期に朱が用いられたことが知られる。その墓制が、箱式石棺や石蓋土壇墓へ変化するにつれてベンガラになっていくことを本田が指摘している。また、頭部には水銀朱、体や埋葬施設への塗布はベンガラ、というように赤色顔料のつかいわけがなされていることにも言及している(本田1988)。

また、後期には、北九州(福岡県春日日立石遺跡など)、山陰(鳥根県出雲西谷墳丘墓、鳥取県紙子谷門上谷1号墓)、丹後(京都府大風呂南遺跡)などの事例が知られる。これらの水銀朱は、中国陝西省産辰砂のイオウ同位体比や鉛同位体比と一致する値が報告されており(Minami et al. 2005)、中国から水銀朱が直接入ってきた可能性が示唆されているが、これは、古代中央集権国家成立前後の時期との関係で考えられるかもしれない(南2008)、縄文時代後晩期の水銀朱とは系譜が異なりそうである。

市毛は、「辰砂考」のなかで、辰砂が使用されるのは縄文時代後期以降(土器などの赤彩であって埋葬施設などへの散布ではない)と古墳時代(古墳内部の赤彩や散布など)であること

(市毛1960)、『朱の考古学』のなかで、天然の辰砂以外にも、人工水銀朱が中国からもたらされた可能性についても示唆している(市毛1998)。

2 ベンガラ(酸化第二鉄)あるいは赤色オーカー

有名な赤鉄鉱の産地として、青森県今別町の赤根沢の赤岩がある。土井1号遺跡(青森県北津軽郡板柳町)の縄文時代晩期の石皿、装身具、土器など、近隣の遺跡からは湖沼に赤色顔料を利用、加工した痕跡が認められている(板柳町教育委員会1993)。化学分析が行われていないため、赤岩の組成は不明だが、土井1号遺跡では、赤根沢の赤鉄鉱の使用が想定されている。陸奥湾を挟んで対岸に位置する不備無遺跡(青森県七戸市)出土の縄文晩期の赤彩土器72点と赤鉄鉱の67点の蛍光X線分析と観察比較から、同様に、赤根沢産の赤鉄鉱が持ち込まれて利用された可能性が指摘されている(片岡ほか2012)。赤根沢から採取された赤色顔料は、日光東照宮や岩木山神社の大堂、山門などの修復にも用いられている。一方、茨城県でも城里町に赤鉄鉱の産出地があるが、赤色としての発色はいまひとつである。

酸化鉄を含む赤色として、「赤色オーカー」という名称は、「ベンガラ」と比較して日本ではあまり用いられることが多くない。しかし、赤色オーカーは、いわゆる土製顔料の代表的なものであり、世界各地で産出し、さまざまな旧石器時代の洞窟壁画の彩色や新石器時代の彩文土器などに用いられてきた。実際に使用されている多くの赤色は、酸化鉄、つまりベンガラを含む赤色の「土」であることが多いため、ベンガラという名称の利用には注意を払いたい。

赤鉄鉱以外にも、もうひとつの酸化第二鉄の赤色として、「パイプ状ベンガラ」の存在が知られている。パイプ状ベンガラは、湖沼に生息する鉄バクテリア(*Leptothrix ochracea*)を集めて人工的に焼成して作る赤色の酸化鉄として知られており、鉄バクテリアは、水溶性の2価の鉄イオンや2価のマンガンイオンを酸化して鞘状に固定する。800℃で焼成すると、赤色顔料として利用できることが確かめられている(内山ほか2012、岡橋ほか1997)。図1に見られるように、縄文時代や弥生時代のパイプ状ベンガラのなかには、珪藻類似の構造を示す断片も同時に観察されることが多い。鉄バクテリアが水



図1 第5号墓壙土器1に含まれていたパイプ状ベンガラ

の停滞しやすい湖沼や低湿地等の環境で綿菌状に浮遊生息していることと珪藻の存在が関連付けられている(岡田1997)。このような鉄バクテリアを起源とする人工的な赤色物質は、少なくとも縄文時代早期から古墳時代にかけて、日本列島において広くその利用が認められている。田戸遺跡(神奈川県横須賀市)、田戸上層式の土器から、すでにパイプ状ベンガラが使用された例があり(成瀬1998)、これが最古のパイプ状ベンガラの使用例のひとつであると思われる。

茨城県ひたちなか市の虎塚古墳(7世紀前半)の壁面に使用されている赤色顔料もまた、パイプ状ベンガラであることがわかっている(谷口ほか2014)。鉄バクテリアは、地域を問わず存在することから、赤色の原料あるいは鉄素材の原料としても利用されていた可能性がある。このパイプ状ベンガラを含む褐鉄鉱(リモナイト)は、湖沼鉄(Bog Iron)という名称でも呼ばれ、近年、日本やヨーロッパにおいて古代の製鉄原料のひとつとして議論されている(野村2007、山内2013)。

3 第5号墓壙土器1に含まれていた赤色物質

「泉坂下遺跡第5号墓壙土器1にともなう赤色物質の分析」(渡辺ほか2011)において、泉坂下遺跡第5号墓壙土器1にともなう赤色物質についての蛍光X線分析(XRF)、X線回折(XRD)、走査型電子顕微鏡(SEM)による分析結果を報告した。この赤色物質は、主成分がFeであり、他にSi、Al、微量なMn、Ca等が検出された。

一般的に赤色彩色に利用される土性顔料であるオーカーの場合、粘土分が多く含まれていることが特徴である。しかし、ここで分析を行った赤色物質については、粘土分が少なく、鉄成分が多く検出されたことが

ら、オーカーではない物質の可能性が示唆された。そこでSEMを用いて、赤色物質の形態観察を行った結果(図1)、赤色物質は、径は1 μ m程度で、長いものは20 μ m程度の中空洞筒状の物質が多数集合したものであり、いわゆる「パイプ状ベンガラ」と呼ばれる赤色物質に類似した形状であることが確認された。本資料は、顔料を製作したときのつぼとしての容器であったのか、貯蔵のための容器であったのか、不明である。

4 出土遺物に付着していた赤色物質について

泉坂下遺跡から出土した代表的遺物として、人面付き土器がある。この土器をはじめ、土器の口縁部や縄文のついた文様帯、骨角器の中には、赤彩をもつものが認められている(表1)。人面付き土器の赤については、Feが検出されたので、赤鉄鉱由来かパイプ状ベンガラか判定するために、SEMを用いて顔料粒子の特徴の把握を試みた。しかし、非常に状態の悪いパイプ状と思しき形態の物質が1点観察できたのみであり、その起源を結論付けるのは困難であった。おそらく、赤色物質を顔料として使用する際にすり潰す加工を経ることもあり、粒子の残存状態が悪くなっている可能性がある。その他の赤彩土器や石器についても、顔料粒子の残存状況が不良であったため、もとの素材についての形態的情報を得ることは難しかった。

泉坂下遺跡で出土している赤彩した土器は、縄文の文様帯や口縁部の刻み、沈線内に赤彩をもつものが多かった(図10、11.32T-1002、32T-535、32T-542など)。骨角器片(図10.27T-1268)の窪みからも赤彩が見つかった。基本的に、これらは、鉄系の物質であるが、煮炊きなど常時火を受けるような道具ではなく、祭器や埋葬用など、火を用いない用途のものであったであろうと考えられる。ほかに、巖石に赤色が付着したものもみつまっているが(図10.11.33T-274、S26-390)、これらは、赤色顔料を粉末化する際に使用された道具であろうと考えられる。

蛍光X線分析によって水銀が確認されたのは、3点(図10、11.S26-1320、32T-422、S26-390(巖石))であった。うち1点は、巖石であり、Feも同時に検出されている。この石器のみ、水銀朱と酸化鉄の粉砕に使用されたものである可能性がある。土器片2点については、どちらも小片であり(図10、11)、傾向をつかむのは難しいが、32T-

422は大洞 C1 式の土器片、SI26-1320についても出土層位が第6層であることから大洞 C1 式に伴う時期の遺物であろうと考えられる。また、32T-422は内面に赤が認められており、一般的な赤彩装飾というよりは、赤色顔料の貯蔵用の土器である可能性もある。

ここでも、先行研究と同様に、縄文時代晩期の赤彩に水銀朱が利用されていたことが確かめられた。

5 顕微鏡観察

赤色顔料の粒子状態については、オリンパス社製 BX53-FL 蛍光顕微鏡を用いた。ハロゲン光および紫外線の落射、透過光を使用し、偏光モードにおいて観察した。

6 可搬型蛍光 X 線分析装置 (pXRF) による分析

可搬型エネルギー分散型蛍光 X 線装置 (Thermo Fisher Scientific 社製 Niton XL3t, Portable X-ray Fluorescence Spectroscopy: pXRF) を用いて、FP 法にて定性定量分析を行った。この装置は、X 線管球が Ag、シリコンドリフト検出器搭載タイプ、分析対象元素: Mg ~ U である。Mining (Cu/Zn) モードにて 60 秒測定を行った。泉坂下遺跡の出土遺物に付着していた赤色物質の分析は、この装置を用いて行った。

7 蛍光 X 線分析装置 (XRF) による分析

これとは別に、蛍光 X 線分析装置 (アワズテック製 OURSTEX100FA-IV) を用いて高師小僧の組成分析を行った。この装置は X 線源として Pd ターゲット、検出器としてシリコンドリフト検出器を使用している。励起 X 線によって 2 種類のモード (白色 X 線励起 40kV 0.25mA / 単色 X 線励起 40kV 1.00mA) があり、1 試料あたり各モード 200 秒 (live time) で測定を行った。測定雰囲気は真空、照射径は約 2mm である。なお、本装置には内部に CMOS カメラを搭載しており、PC 上で測定箇所を確認して測定することが可能である。

この装置では、泉坂下遺跡から出土した高師小僧および、東海村の露頭 3 地点から採取した高師小僧の分析も行った。測定した試料は、装置の照射径を上回る大きさのものを選別し、出土した高師小僧から 10 点、露頭の 3 地点から 10 点ずつ、合計 40 点を分析した。

8 赤色顔料の材料としての高師小僧の可能性

泉坂下遺跡の赤色については、ベンガラや鉄バクテリアのパイプ状ベンガラ以外の酸化鉄の原料として、高師小僧の利用についても想定された。それは、実際に遺構の覆土からも検出されているうえ、遺跡周辺の地層からも簡単に採取できる鉄原料の素材であるからである。

泉坂下遺跡の覆土から多くの高師小僧片が出土している。試験的に、33T (SI26, SK220 を含むトレンチ) の包含層の上から床面までの土を水洗選別した結果、覆土から合計 220 点 17g ほどの高師小僧片が検出された (図 2)。色調から、ほとんどが未焼成のものであろうと考えられる。SI26 の床面からは安行 3a 式の土器が出土しており、この住居址や土壌に絡む範囲の土から高師小僧が見つかることから、縄文時代晩期の遺構の覆土には、高師小僧片が含まれているといえるだろう。つまり、他の遺構についても、丁寧に覆土を調査すれば、高師小僧が検出される可能性が高い。

高師小僧の成因は、パイプ状ベンガラと類似している。鉄バクテリアが湿地帯のアシヤ水田のイネの根の周囲で繁殖し、それが固まって褐鉄鉱となって生成される。高師小僧は、長さ数 mm ~ 数 cm の褐色で棒状の塊を呈している。中空状であることが多い。粘土やシルト層中に見られ、各地で産出することが知られている。茨城県では、常陸大宮市の三美と東野の間 (常陸大宮市歴史民俗資料館 2013)、東海村村松、中丸地内での産出が知られる。

赤色顔料の比較試料として、東海村中丸地内の屋より 3 地点から高師小僧を含む粘土ごと採取した (図 3、4)。採取した粘土から高師小僧を水洗選別した。粘土層のうち、高師小僧の含有量は 2 ~ 5wt% であった。

採取した高師小僧 (01-03) は、乾燥後、0.5g ずつ秤量し、ガスバーナーを用いて 3 分程度の酸化焼成を行った。焼成前後の高師小僧をメノウ乳鉢で粉砕し、色差を Color Reader CR-20 (コニカミノルタ社製) を用いて測定した。焼成後の高師小僧は赤味を増した (図 5-7)。

蛍光 X 線分析の結果、遺跡から出土した高師小僧と、露頭から採取した高師小僧から、褐鉄鉱の主成分である Fe が顕著に検出され、ほかに、Al, Si, K, Ca, Ti, Mn, Zn などが検出された。さらに遺跡から出土した高師小僧と、露頭から採取した高師小僧を分析し、得られたデータから元素 (SCT: Fe, Zn) の強度比を算出して比較した。



図2 ISS 33T-SI26 8層から出土した高師小僧
(スケールは1mm)



図3 茨城県東海村中丸地内の露頭



図4 茨城県東海村中丸地内の露頭における高師小僧の採取 (2020年8月11日)

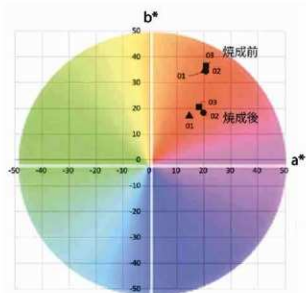


図5 焼成前後の高師小僧の色差 (a^* * b^* 値) の変化

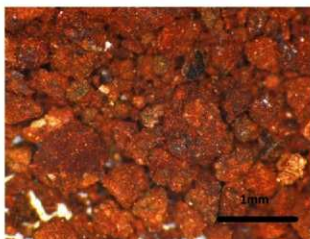


図6 焼成前の高師小僧 (粉碎後)

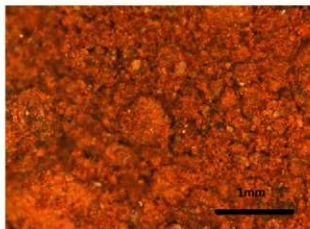


図7 焼成後の高師小僧 (粉碎後)

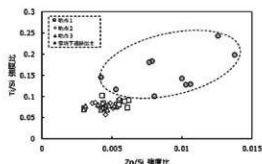


図8 Siで規格化したTiとZnによる高師小僧の比較

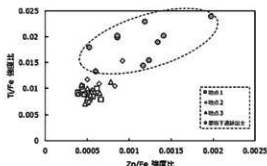


図9 Feで規格化したTiとZnによる高師小僧の比較

図8は、Ti/SiとZn/Si、図9はTi/FeとZn/Feで比較したものである。両方の図から、遺跡から出土した高師小僧は、露頭から採取した高師小僧に比べ、Ti/Si、Zn/Si、Ti/Fe、Zn/Feが高いことがわかる。また、露頭から採取した高師小僧は場所による違いはなく、値がひとつに集約されたが、遺跡から出土した高師小僧は値が分散していることがわかる。ここで比較したTiやZnは、おそらく高師小僧の中に含まれる不純物と想定され、これは、遺跡出土の高師小僧のほうが、不純物を多く含み、また、個別のばらつきが大きいことを示している。

想像をたくましくしてみれば、露頭から採取した高師小僧を赤色顔料の素材として利用した場合、より鉄分が多く含まれる＝得られる赤色が濃いものが実際に利用され、不純物の多い高師小僧は熱加工されることなく、遺跡で廃棄されたのではと考えることもできるかもしれない。高師小僧が、身近な鉄原料として赤色顔料生産に利用されてきた可能性をここで指摘しておくたい。

まとめ

泉坂下遺跡の土器には、赤色を用いて装飾したものがあつた。また、叢石に赤色顔料を加工した痕跡が、赤色が付着したものもみつかった。これらの可搬型蛍光X線分析から、酸化鉄による赤色がほとんどであったが、中

には、水銀朱を含む赤色も3点確認された。層位から、時期は大洞C1に帰属するものと考えられ、先行研究と調和的に、水銀朱の利用は縄文時代晩期の遺物に認められることがここでも確認された。水銀朱の産地として、常陸にその鉱脈があるとはいえ、そこから採取されたものであるのかどうかは今のところ不明である。

泉坂下遺跡の覆土中から見つかった高師小僧片をきっかけに、赤色顔料の原料としての高師小僧の可能性を探った。露頭から採取した高師小僧を焼成すると、彩色に適した赤色が得られることが確認された。

蛍光X線分析による高師小僧の組成分析を行い、遺跡から出土した高師小僧片を、露頭から採取した高師小僧と比較したところ、遺跡出土の高師小僧は不純物を多く含み、組成的なバラつきが大きいことがわかった。このことから、遺跡出土の高師小僧は赤色顔料の素材として適さず、廃棄されたものである可能性が示唆された。水洗選別によるこれらの高師小僧片は、第6・8層からの出土が多く、大洞BC・C1式の層準に相当していた。赤色顔料製作が特定の時期に関連していた可能性についても今後検討したい。

泉坂下遺跡からは、高師小僧以外にも、パイプ状ベンガラ(珪鉄)による赤彩や顔料の入った容器も見つかり、赤の素材は単一の素材に限定されるわけではなさそうである。泉坂下遺跡では、水銀朱は他の地域と同様に縄文時代の後晩期に使用されるものの、縄文時代から弥生時代にかけて、通時的にはパイプ状ベンガラや高師小僧など、少なくとも複数の赤色の原料のリソースがあつたものと考えられる。

謝辞

文献のご教示、現地調査など、貴重なご助言・ご配慮いただきました。以下の方々に感謝申し上げます。石井聖子、川又清明、黒澤正紀、島津美子、鈴木素行、高嶋美穂、成瀬正和(敬称略)。

参考文献

- 板柳町教育委員会(1993)「上井1号遺跡」。
- 市毛勲(1960)「辰砂考」『古代学研究』第23号、pp.1-7。
- 市毛勲(1998)『朱の考古学』雄山閣出版。
- 内山神明、橋本英樹、古谷充章、岡野輝章、辻広美、高田潤(2012)「赤色顔料の原料採取地を求めてー鹿兒島県上水尾遺跡・間山遺跡の例か

- ら」『研究紀要・年報 縄文の森から』, 5, 鹿兒島県立埋蔵文化財センター, pp.47-54.
- 岡田文明(1997)「ハイブ状ベンガラの復元」『日本文化財科学会 第14 回大会 研究発表要旨集』pp.38-39, 日本文化財科学会.
- 片岡太郎, 上條信彦, 中村直也(2012)「第3節不働遺跡における赤彩土器と赤色顔料の蛍光X線分析と考古学的分析」『下北半島における縄文文化の研究 青森県むつ市不働遺跡発掘調査報告書(第二分冊 本文編 2, 弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告8)』(関根達人, 上條信彦編), pp.67-88, 弘前大学人文学部日本考古学研究室.
- 河野摩耶, 南武志, 相澤洋, 市川健夫(2014)「展覧遺跡・中居遺跡出土の上器付着赤色顔料の成分分析及同位体分析」『研究紀要』3, pp.10~17, 八戸市埋蔵文化財センター 是川縄文館.
- 経済雑誌社編(1897-1901)『国史大系 第二巻 続日本紀』経済雑誌社.
- 建石徹, 降幡順子(2014)「2. 緑川東道跡石遺構 SV1出土中居系土器に付着した赤色顔料の材料調査」『東京国立市緑川東道跡第 27 地点』, 医療法人社団国立あおやぎ会, pp.139-142.
- 田辺義一(1943)「日本石器時代の朱に就いて」『人類学雑誌』58-12, pp.453-464.
- 谷口陽子, 犬塚将英, 矢島國雄, 高橋美穂, 島津美子, Joy Mazurek(2014)「虎塚古墳壁画の製作技法と材料:断片資料の分析から」『虎塚古墳の保存科学的研究』(平成23年度~25年度日本学術振興会(JSPS)科学研究費補助金研究成果報告書 基盤研究(B)課題番号:23300326 「茨城県ひたちなか市虎塚壁画古墳の保存に関する総合的研究」), pp.23-38.
- 中山信名, 栗田寛(1969)巻百二十二【朱砂】『新編常陸国誌』p.688, 常陸書房.
- 成瀬正和(1998)「縄文時代の赤色顔料」『考古学ジャーナル』438号, pp.10-14.
- 野村隆光(2007)「鉄バクテリアのバイオマツトから鉄顔料と鉄をつくる:愛知県, 海上の森の湧水湿地に見られる鉄バクテリアのバイオマツトの有効利用」『地学研究』, 56, pp.67-87.
- 常陸大宮市歴史民俗資料館(2013)「常陸大宮の地下資源~地域をささえた宝物~」.
- 降幡順子, 沢田正昭(1997)「酸化鉄系赤色顔料の基礎的研究」『日本文化財科学会 第14回大会 研究発表要旨集』pp.76-77, 日本文化財科学会
- 本田光子(1988)「弥生時代の墳墓出土赤色顔料」『九州考古学』, 62, pp.39-46.
- 蒔田隼次郎(1902)「関東地方に於ける石器時代の朱」『東京人類学雑誌』17 卷191号, pp.189-191.
- Minami T., Imai A., Burmo, M., Kawakami K. and Imazu, S. (2005) Using sulfur isotopes to determine the sources of vermillion in ancient burial mounds in Japan. *Geoarchaeology*, 20, pp.79-84.
- Minami, T., Hatanaka, K., Nakai, Y., Motizuki, Y., Takahashi, K. (2019) A method of collecting trace amounts of vermillion from artifacts for source estimation by sulfur isotope (δ^{34S}) analysis: Use of sulfur-free adhesive tape to minimize damage to the artifact body during sampling. *Journal of Archaeological Science: Reports*, 28, 102027.
- 南武志(2008)遺跡出土朱の起源『地学雑誌』117, pp.948-952.
- 南武志, 河野摩耶, 古川登, 高橋和也, 武内章記, 今津節生(2013a)「硫黄同位体分析による西日本日本海沿岸の弥生時代後期から古墳時代の墳墓における朱の産地同定の試み」『地球化学』47, pp.237-243.
- 南武志, 今津節生, 北川路子, 牧田碧夏, 西川恵祐, 赤松剛, 田中龍彦, 卜部達也, 木寺正憲, 石塚香織, 高久雄一, 高橋和也(2013b)「鉛同位体比測定に基づく遺跡から出土した朱(水銀朱)の産地の解析」『分析化学』62, pp.825-833.
- 三船陽平, 田中龍彦, 林英男, 高橋和也, 木寺正憲, 中川孝秀, 榎本秀一, 南武志, 今津節生(2006)「天然の辰砂(HgS)の微量元素分析による地域差の解析及び考古学的应用:古墳から出土した朱の産地推定の試み」『日本分析化学会年会講演要旨集(分析化学講演要旨集)』, p.226.
- モールス, エドワード・エス(矢田部良吉訳)(1879)『大森介塚古物編』(Shell Mounds of OMORI) 東京大学法文学部.
- 山内裕子(2013)「古代製鉄原料としての竜涎鉱の可能性ハイブ状ベンガラに関する一考察」『古文化談叢』70, pp.243-252. 九州古文化研究会
- 山内清男(1964)『縄紋式土器・総論』『日本原始美術』講談社, pp.148-159.
- 渡辺美登里, 谷口陽子「泉坂下遺跡第5号墓壙土器1にともなう赤色物質の分析」(2011)『泉坂下遺跡の研究 人面付土器を伴う弥生時代中期の再葬墓について』(鈴木素行編) pp.98-99.



スケールバー ㄟは2 cm (*5 mm), ㄟは1 mm

図10 赤彩のある出土遺物(1)



33T-274



SI26-390

スケールバー ㄟは2 cm (≠5 mm), ㄟは1 mm

図11 赤彩のある出土遺物(2)

表1 赤彩のある出土遺物一覧

遺跡	調査区	区画	遺物番号	時代時期	形態	内径	外径	透光X線	主要元素(赤)	備考	
ISS	第2次	18T	18T-7	弥生中期	土器 口縁~胴部		○	○	Fe, Ca, Ti (少)		
ISS	第4次	27T	27T-048		磁石 凹石 (砂岩)			○	Fe	微量	
ISS	第4次	27T	27T-1041		磁石 (砂岩)			○	Fe		
ISS	第4次	27T	27T-1208		骨角器磨針			○	Fe, Ca	水洗で検出。穴の中が赤。微量	
ISS	第4次	27T	SI26-390		磁石 (石英)			○	Fe, Hg	微量	
ISS	第5次	30T	30T-134	縄文晩期	土器 胴部			○	Fe	縄文の中に赤。ごく微量	
ISS	第5次	30T	30T-298-3	縄文晩期	土器 胴部		○?	○	Fe		
ISS	第5次	30T	30T-375		小型素文土器 胴~底部		○	○	Fe		
ISS	第5次	30T	30T-517	弥生前期	土器 口縁部			○	○	Fe	沈線。縄文縄目の中が赤
ISS	第5次	31T	31T-382-5	縄文晩期	土器 口縁部			○	○	Fe	ごく微量
ISS	第6次	32T	32T-54		磨石 (安山岩)			○	○	Fe	
ISS	第6次	32T	32T-67	縄文晩期	土器 口縁部			○	○	Fe	口縁上部沈線内部
ISS	第6次	32T	32T-197		土器 胴部			○	○	Fe	
ISS	第6次	32T	32T-205	縄文晩期	土器 口縁部			○	○	Fe	跡みの中に赤 (方形)。微量
ISS	第6次	32T	32T-217	縄文晩期	土器 胴部			○	○	Fe	
ISS	第6次	32T	32T-407	縄文晩期	土器 胴部			○	○	Fe	骨針多い
ISS	第6次	32T	32T-422	縄文晩期	土器 口縁部			○	○	Fe	微量
ISS	第6次	32T	32T-513	縄文晩期	土俵 (中空) 体部				Fe, Hg (微量)		
ISS	第6次	32T	32T-533	縄文晩期	土俵 (中空) 体部					穴の中など赤色なし	
ISS	第6次	32T	32T-542	縄文晩期	土俵 (中空) 体部					32T-513と同一体。微量	
ISS	第6次	32T	32T-518	縄文晩期	土器 胴部			○	○	Fe	赤彩。焼鉄証。微量
ISS	第6次	32T	32T-535	縄文晩期	土器 胴部			○	○	Fe	跡み。沈線の中に赤 (方形)
ISS	第6次	32T	32T-590	縄文晩期	土器 注口部			○	○	Fe	微量
ISS	第6次	32T	32T-623	縄文晩期	土器 口縁部			○	○	Fe	上から3本目沈線の中に赤。微量
ISS	第6次	32T	32T-801	縄文晩期	土器 胴部			○	○	Fe	
ISS	第6次	32T	32T-914	縄文晩期	土器 口縁部			○	○	Fe	沈線内。微量
ISS	第6次	32T	32T-930	弥生?	土器 胴部			○	○	Fe	
ISS	第6次	32T	32T-953	縄文晩期	土器 口縁~胴部			○	○	Fe	縄文内部に赤。微量
ISS	第6次	32T	32T-1002	弥生前期	土器 胴部			○	○	Fe	縄文内部に赤
ISS	第6次	32T	32T-1813	縄文晩期	土器 口縁部			○	○	Fe	丸底。沈線内部に赤。微量
ISS	第6次	32T	32T-1836	縄文晩期	土器 胴部			○	○	Fe	微量
ISS	第6次	32T	32T-1953	縄文晩期	土器 口縁部			○	○	Fe	濃い赤色
ISS	第6次	33T	33T-109		石皿 (多孔質安山岩)			○	○	Fe	
ISS	第6次	33T	33T-255	縄文晩期	土器 胴部			○	○	Fe	微量。沈線内
ISS	第6次	33T	33T-274		磨石 (砂岩)			○	○	Fe	微量
ISS	第6次	33T	SI26-608	縄文晩期	土器 口縁部			○	○	Fe	沈線の中に赤。微量
ISS	第6次	33T	SI26-910-1	縄文晩期	土器 胴部			○	○	Fe	微量
ISS	第6次	33T	SI26-910-2	縄文晩期	土器 胴部			○	○	Fe	微量
ISS	第6次	33T	SI26-1075		磨石 (石英)			○	○	Fe	
ISS	第6次	33T	SI26-1320		小型土器破片 胴部			○	○	Fe, Hg (少)	微量
ISS	第6次	SK220	33T-14	弥生中期	土器 口縁~胴部			○	○	Fe	磨石縄文内部に赤。微量
ISS	第6次	SK220	SK220-42	弥生中期	土器 口縁~胴部			○	○	Fe	33T-14と接合
ISS	第6次	SK220	SK220-1129	弥生中期	土器 口縁部			○	○	Fe	微量。骨針多い
ISS	第6次	SK220	SK220-101 (土層7)	弥生中期	土器 胴部			○	○	Fe	縄文の中に赤。ごく微量。骨針多い

VI 調査の成果と課題

1 縄文時代 一関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作について・IV—

はじめに

茨城県北部の縄文時代晩期遺跡については、2005年の地名表（鈴木編2005）と、2016年の地名表（茨城県考古学協会編2016）の中にこれを増補した集成がある。ほぼ10年の期間に増加したのは、2013年度の日立市大近平遺跡と、2012年度から開始された泉坂下遺跡の発掘調査であった。

大近平遺跡では、晩期の遺構として住居跡4基、土坑・ピット31基、遺物包含層2カ所が記録され、多種多量の遺物が出土した（大賀編2015）。石棒製作に関係した遺物も豊富で、これについては実測図が添えられたが、土器などほとんどの遺物が図化されないうまとなつた。

泉坂下遺跡では、再葬墓群を中心とした遺跡範囲の確認のために広い範囲を対象とした調査が継続されたことから、晩期の遺跡としての範囲も大略が捉えられ、石棒製作に関係した遺物も集積されることになった。第4次調査までの遺物のうち、粘板岩を素材とした石棒（石剣・石刀）については製作工程を中心に分析し（鈴木2016）、凝灰岩を素材とした石棒（石剣）についても別途に検討を加えてある（鈴木2020）。

本稿では、土器型式と石棒型式の対応を検討するために、茨城県北部における縄文時代晩期の土器群と石棒について、泉坂下遺跡を中心としながら、基準とすべき調査事例を集成しておきたい。

1 泉坂下遺跡第27トレンチの再検討

泉坂下遺跡第4次調査の第27トレンチでは、第26号竪穴住居跡が検出され、住居跡の上位に遺物包含層が形成されていた（後藤編2016）。住居跡の床面直上からは晩期初頭「安行3a式」が出土しており、これが住居廃絶の時期と判断されている。その後は、竪穴の壁のうち黒色系の基本土層部分が崩落するとともに、西から東へ傾斜していた旧地形が土を流入させ住居跡の窪地を埋めながら、遺物包含層が順次に堆積したと想定される。

遺物包含層の区分と出土した土器との対応関係は、残存率の高い土器を指標として（IV巻-第62図）、次のように捉えられた。

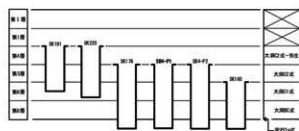
第4層…「大洞 C2式」～弥生中期

第5層…「大洞 C2式」

第6層…「大洞 C1式」

第8層…「大洞 BC式」

床面から出土した「安行3a式」については、土器の内面に付着した炭化物の¹⁴C年代測定が実施され、較正暦年代が1,497-1,401cal BCと報告（バリノ2016）されており、これが遺物包含層の上限の年代に相当する。第22号土坑（SK220）の土器群については、福島県稲干場遺跡の弥生時代中期「野沢Ⅱ式」に396-361cal BCの較正暦年代が報告（笠井2018）されており、これを下限の年代とするならば、遺物包含層には大よそ1,000年間の痕跡が記録されていることになる（第15表）。



第85図 泉坂下遺跡第27・33トレンチの層序

第15表 縄文晩期～弥生中期の¹⁴C年代▶

時代階層	土器型式	個別資料の報告	笠井2018	小林2019
弥生中期	(後葉)		BC 111-60年頃	
	(仲葉)		BC 230-150年頃	
	(前葉)	cal BC 200-35 (88F7 SK2 P2) cal BC 380-155 (88F7 SK2 P4) cal BC 400-210 (88F8) cal BC 720-230 (88F9)	BC 400-200年頃	
縄文晩期	大洞 A' 式		BC 309-374年頃	BC 510-435年頃
	大洞 A 式	cal BC 775-554 (F1E SK303) cal BC 901-670 (F1E SK214)	BC 540-410年頃	BC 730-510年頃
	大洞 C2 式	安行3a式		BC 930-730年頃
	大洞 C1 式	安行3b式		BC 1040-930年頃
	大洞 BC 式	安行3b式		BC 1150-1040年頃
	大洞 B 式	安行3a式	cal BC 1497-1401 (88F7 SK20 P1)	

* 泉坂下遺跡については、個別資料の報告として SK1-2・3・4・5・6・67、SK1の8層の遺構から出土した32点の土器に付着した炭化物について年代測定があり、「遺構の時期としては、層の分布の中心にあたる calBC 200～400年あたり」（バリノ2016）と想定されている。

遺物包含層に細別時期が与えられることにより、まずは、各層に包含された石剣の時期が決定される。第27トレンチの第6層からは、石剣の頭部、基部の破片が出土しており、これらは「大洞C1式」に伴う(第92図)。

次に、第27トレンチでは、遺物包含層を掘り込んで構築された土坑が検出されていることから、第33トレンチの第220号土坑を含めて、土坑の掘り込みと遺物包含層との関係を整理してみる(第85図)。第181号土坑(SK181)は、「被熱した泥岩片や粘土・焼土が混じる様子から、竈材を廃棄したもの」(後藤²⁰¹⁶)と考えられており、現在までに泉坂下遺跡で検出された竈は、平安時代に限られている。平安時代と推定される第181号土坑は、第4層を掘り込んで構築されていた。第220号土坑は弥生時代中期の墓壇であり、第176号土坑(SK176)も同時期の墓壇ではないかと推定されるが、第220号土坑が第4層を掘り込むのに対して、第176号土坑は第5層からを掘り込むように記録されている。これは、第176号土坑の上部が第4層相当の土壌で埋められたことによるのではないかと想像しており、2つの土坑はともに、弥生時代中期までの遺物を包含する第4層の上部から掘り込まれたものと推定される。第185号土坑(SK185)は、「第176号土坑に切られ、第26号竪穴住居跡を切っている」という「重複関係から、縄文時代晩期以降、弥生時代以前の所産と考えられるが、詳細は不明」(後藤²⁰¹⁶)と記載された。しかし、遺物包含層の第6層からを掘り込む記録によれば、少なくとも縄文時代晩期は確実であり、中葉「大洞C1式」の前後と推定される。覆土中から出土したのは、前葉「大洞BC式」の鉢形(第86図1)と粗製深鉢形(2)の破片であった。

第181号土坑が第4層以下を掘り込む平安時代、第176・220号土坑が第4・5層以下を掘り込む弥生時代中期、第185号土坑が第6層以下を掘り込む縄文時代晩期の遺構として捉えられ、土坑の掘り込みと遺物包含層との関係が整合するのに対して、「平安時代」の第4号掘立柱建物跡(SB4)として記載された2つの土坑(SB-P1、SB-P2)は、第5層からを掘り込んでおり、土坑上には第4層が堆積する。「平安時代」と捉えた根拠は、「SB4-P1」土坑から出土した無文の超小型浅鉢形(第93図2)を土師器と誤認したことにあるらしい。これは、縄文時代晩期の器種の1つで、第6次調査では第32トレンチのD6c5

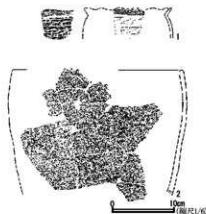
区から「大洞BC式」に伴い2点(第39図34・35)が出土している。したがって、柱痕が観察されることから掘立柱建物跡であったとしても、これは縄文時代晩期の遺構である。第5層の上部から掘り込まれていることから、中葉「大洞C2式」と推定されるのであり、「SB4-P1」土坑の覆土からは「大洞C2式」の小型深鉢形(第94図1)も出土している。「SB4-P1」「SB4-P2」土坑からは、石剣の頭部、基部のそれぞれ比較的大きな破片、完形の固定式砥石も出土しており、これらは「大洞C2式」に伴う(第94図)。

泉坂下遺跡の第27トレンチの事例は、「大洞C1式」「大洞C2式」それぞれの細別時期に伴う石剣の基準となる。

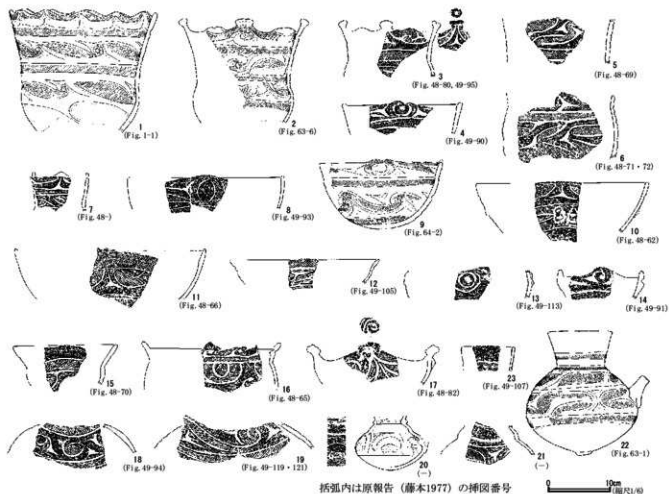
2 泉坂下遺跡第32トレンチの検討

泉坂下遺跡第6次調査の第32トレンチでは、前葉「大洞BC式」と中葉「大洞C1式」「大洞C2式」の遺物包含層が、一部では重なりながらも、平面的な位置を異にする状況が確認された。

「大洞BC式」の遺物包含層は、D6f5区より西側に位置している(Ⅲ章・第18図)。この範囲から出土した石剣は、3点とも石剣であり、石材が三波川変成帯の緑色片岩と観察されている(第42図)。すべて研磨までが完了しており、焼痕が認められることから使用を経て廃棄された成品と判断される。三波川変成帯の緑色片岩を素材とした未成品は検出されておらず、これらは成品の状態で搬入された。ここには粘板岩を素材とした石剣が伴わず、これを製作した痕跡も検出されていない。「大洞BC式」の時期には、少なくとも泉坂下遺跡においては、粘板岩を素材とした石剣は製作されておらず、関東地方西部において緑色片岩を素材に製作された石剣が供給されていたような状況が窺える。



第86図 第185号土坑出土遺物



第87図 大田房貝塚の土器

「大洞 C1 式」「大洞 C2 式」の遺物包含層は、D6f5 区より東側に位置している(Ⅲ章-第 18 図)。「大洞 C1 式」の層準からは、敲打段階の未成品である比較的大きな破片が 2 点検出されており、これに固定式砥石 2 点、擦切具 1 点が伴う(Ⅲ章-第 42 図)。「大洞 C2 式」の層準からも、敲打・研磨段階の破片が検出されており、これに砥石片と擦切具 1 点が伴う(Ⅲ章-第 42 図)。泉坂下遺跡においては、「大洞 C1 式」には粘板岩を素材とした石棒が製作されており、「大洞 C2 式」にも継続したことが確実である。

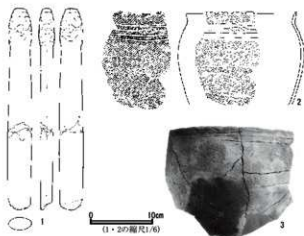
第 33 トレンチにおいても、石棒製作に関わる未成品や工具は主に「大洞 C1 式」「大洞 C2 式」の遺物包含層から出土している。但し、剥離段階の未成品(第 81 図 3)が 1 点のみではあるが床面の垂直位置から出土した。また、水洗選別では、敲打段階の未成品とともに製作に伴うと推定される破片が、少量ではあるが抽出されている。これらの現象が後世の遺構を含む攪乱や遺物の沈み込みによるものであるのか、あるいは粘板岩を素材とした石棒製作の起源を示しているのか、俄かに判断はでき

ない。

3 茨城県北部の土器群と石棒

茨城県北部において発掘調査が実施された遺跡の中から、土器型式と石棒型式の対応を検討するために、基準とすべき事例を以下に集積する。

大洞 B 式 東京都小豆沢貝塚の土器が「安行 3a 式」の標本に採用されたこと(山内 1941)から、茨城県北部の晩期初頭について、ひたちなか市大田房貝塚の土器群も大部分が「安行 3a 式」として報告されてきた(藤本 1977, 能登 1989)。この小豆沢貝塚の土器については、鈴木正博により「大洞 B1 式小豆沢系列」(鈴木 2008)と位置付けられ、山内幹夫も福島県域の土器群について「大洞 B1 式」(山内 2018)として分析を進めている。福島県いわき市の寺船貝塚(馬目 1966)では、後期後葉「安行 1 式」と晩期初頭「大洞 B1 式」の間に相当する後期終末に、東北地方の「楡付土器」が分布し「安行 2 式」が姿を消している。高萩市小嶋遺跡(沼田 1986)も同じ状

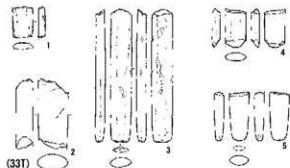


第88図 大近平遺跡 SI019の石剣と土器
(鈴木2020より引用)

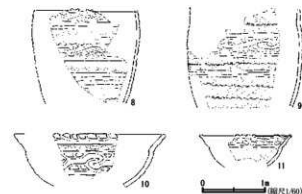


第89図 宮脇 A 遺跡の石剣と土器
(1～9は鈴木2016より引用)

況であるらしい。一方、大田房貝塚や水戸市下の内遺跡(井上・馬目1979)では、後期終末は「安行2式」であり、晩期に東北地方の「大洞 B1式」が進出する。大田房貝塚においては、調査区の第Ⅱ地点から「東西6.5m、南北5.9mのほぼ円形」の住居跡が調査され、これは「安行Ⅱ式が床面から多く出土」という後期後葉「安行2式」の住居跡と捉えられている。この住居跡の覆土中に「ヤマトシジミガイを主体とする厚さ約20cmの黒色



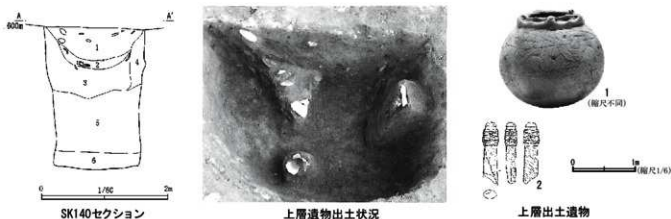
(33T)



第90図 泉坂下遺跡の石剣と土器 (1)

混貝土層が東西4m×南北2mの楕円形に堆積、「混貝土層中から多く出土した」という「第Ⅲ群土器」のほとんどは「安行3a式」として報告されたが、中核となる精製の深鉢形は「大洞 B1式」に相当する(第87図)。「大洞 B1式の影響を受けたよく似た注口土器は、関東一円に分布する」(設楽2007)という注口土器(22・23)も、「大洞 B1式」としての組成と捉えられる。但し、「安行3a式」の浅鉢形(17)を含み、刻み突起(10)や口縁部の縄文帯(11・12)等には「安行式」との融合が窺える。この「混貝土層中」に報告された大型石棒の破片は中・後期のものであり、晩期の石棒は共伴していない。

大近平遺跡の住居跡 SI019については、報告された石剣(第88図1)の時期を確定するために、調査時の測量原図を検討し、土器を観察した。SI019は、南半部に残存する僅かな壁から5.7×5.0mほどの楕円形の住居跡と推定され、「安行3a(新)・大洞 B2・大洞 BC・大洞 C1・大洞 C2」と記載された土器など40点ほどが写真で報告されていた。しかし、住居跡に出土位置が記入されているのは数点で、しかも、それがどの遺物に対応するの



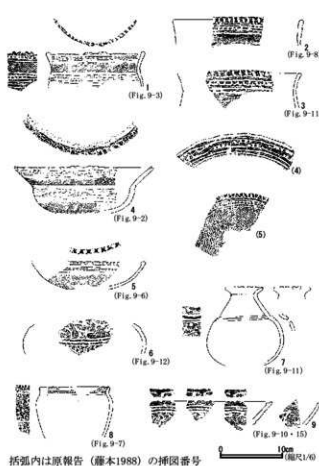
第91図 大近平遺跡 SK140の石剣と土器(大賀²⁰¹⁵より引用)

明らかでなかった。測量原因と遺物の注記を照合した結果、特に晩期中葉の土器群と粘板岩の石棒は、住居跡を覆う「遺物包含層2」に帰属するらしく、床面直上から石剣(1)とともに出土したのは「大洞 B2式」(2)であることが明らかとなった。これは、「小山台型」の石剣であり、頭部には、入組み三叉状文と半円文が彫刻されている。石材は日立変成岩のクロリトイド片岩である。この事例を基準として、「小山台型」の石剣が「大洞 B2式」には成立していること、「入組み文系列」として前段階に位置付けられる凝灰岩の石剣については、「大洞 B式」の中に年代が収まることを推定している(鈴木2020)。

大洞 BC 式 日立市宮脇 A 遺跡(荒井¹⁹⁹⁷)は、晩期と推定される住居跡が少なくとも1基検出されている。この SI04には、楕円形の形態が推定されており、「大洞 B1式」の破片が比較的多く報告された。調査区内には「大洞 BC・C1・C2式」の土器が出土しており、石棒の未成品や製作工具に相当する石器など、石棒が製作された痕跡が残されている。石材は粘板岩を主体としており、「小山台型」「小野型」の石棒が製作されていたと考えられる(鈴木2016)。粘板岩の他にも、クロリトイド片岩(第89図1~4)、千枚岩(5)、緑色片岩(6・7)、角閃岩(8)、凝灰岩(9)などの石剣が伴い、クロリトイド片岩と千枚岩には、未成品が含まれていた。粘板岩は鮎川層、クロリトイド片岩と千枚岩は大雄院層、角閃岩と緑色片岩は赤沢層の日立変成岩と同定されている。原石の採集地は、これらの地層を解析して流れ遺跡に近い

鮎川が推定される。土器との共存関係は全く明らかでないものの、凝灰岩の石剣が「大洞 B式」と捉えられることを前提として、クロリトイド片岩・千枚岩の胴部が扁平であることが凝灰岩の石剣に共通しており、晩期前葉にも石棒が製作されていたことを窺わせる。緑色片岩(6)の石剣も、頸・胴部の形状が関東地方西部における晩期前葉「諏訪木型」(鈴木2015)の一部によく似ている。大近平遺跡の SI019から出土したクロリトイド片岩の石剣は、日立変成岩の地域で製作されたものであり、粘板岩以外の石材の利用は、晩期前葉における石棒製作の特徴ではないかと見ている。調査区内の土器では「大洞 BC1式」(10・11)の存在が目立つ。

大近平遺跡においては、土坑 SK140に土器と石棒の確実な共存事例を見出す。土坑は、確認面での直径が1.5mほど、深さが2.3mほどあり、覆土中からは「安行3a, 大洞 B2-BC」の完形に近い土器が数多く出土した。土器(第91図1)が「1層」から出土したという記述、石棒(2)に付された「SK140」という記載、その石棒が写り込んだ「上層遺物出土状況」の写真と「SK140セクション」を総合することにより、「1層」における共存の事例であることが判明する。石棒は、胴部の断面形状がレンズ状の石剣であり、石材は粘板岩。これが「大洞 BC1式」に伴う。日立変成岩が近在の石材である多賀山地、茨城県北部の太平洋岸の地域では、粘板岩を利用した石棒製作が晩期前葉「大洞 BC1式」まで遡ることが確実な事例である。大近平遺跡から出土した石棒製作に伴う多量の未成品や砕片には、この時期のものも含まれ



括弧内は原報告（藤本1988）の押図番号

第92図 広畑貝塚の土器

るのであろう。また、宮脇A遺跡に想定した晩期前葉の石棒製作には当然、粘板岩も利用されたことを考えなければならない。報告（大賀2015）では、件の石剣を「乙女不動原北浦型石剣」（後藤1987）として位置付けているが、本稿の分類では「小山台型」に相当する。頭部彫刻が「入組み文系列」とは異なり、「成興野型」の文様構成をほぼそのまま継承している。

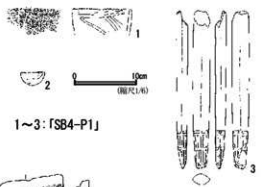
一方、既に検討したように、泉坂下遺跡の第32トレンチにおいては、関東地方西部において緑色片岩を素材に製作された石剣が供給されており、粘板岩が素材の石棒を製作したような状況は窺えず（第90図）、第33トレンチにおいて第8層「大洞BC式」相当の垂直位置から検出された石棒製作の痕跡については、即断を控えた。いずれにしても、日立変成岩の直近にあって石棒製作の痕跡が濃厚な太平洋沿岸の地域と、関東地方西部「安行式」の地域から完成された石棒が供給され、石棒製作の痕跡が希薄な久慈川流域という、茨城県北部に2つの地域の異なりを認めるのである。



第93図 泉坂下遺跡の石剣と土器(2)

大洞C1式 稲敷市広畑貝塚から出土した土器群（藤本1988、第92図）が「大洞C1式前葉期」（鈴木加1993）の標準とされたように、「安行式」の地域である茨城県南部の霞ヶ浦沿岸地域の遺跡にも、「大洞C1式」がまとまって出土する状況が見られる。

泉坂下遺跡における第27トレンチが「大洞C1式」に伴う石棒の基準とすべき事例である。第6層の下部から頭部（第93図1）と基部（2）が出土しており、特に頭部は近接して出土した土器（4）に共存する。ともに石材は粘板岩で、胴部の断面形状がレンズ状の石剣である。頭部は、幅に対して長さが2倍以上の長頭形、対向三角文が2段4単位に彫刻されており、「小山台型」の「対向三角文系列」（鈴木2016）に位置付けられる。上下端部及び中間の区画文に施された刻みは、「成興野型」からの系統と考えられる。基部は、胴部からの幅の変化が少な



1～3:「SB4-P1」

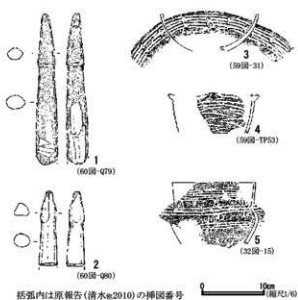
4～3:「SB4-P2」

第94図 「SB4P-1」「SB4P-2」土坑出土遺物

く、端部に長楕円形の研磨面が形成されて角が張る。このような形状は、大近平遺跡の凝灰岩の石剣、宮脇A遺跡のクロリトイド片岩の石剣（第89図3）に共通しており、晩期前葉からの系統と考えられる。また、この基部の破片は、胴部が固定式砥石で研磨された痕跡を残しており、第32トレンチにおいて「大洞C1式」の層準から石棒の未成品とともに固定式砥石が検出された状況にも合致している。

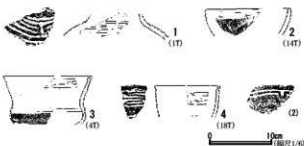
なお、常陸太田市本覚遺跡の石棒製作について、「小野I型」を「大洞C1式」とする所見（鈴木2005）は、全てを「小野型」と見做し、一部の時期決定を全体に敷衍したものであったために撤回する。当時はまだ、「小山台型」の検討に至っていなかった。

大洞C2式 下の内遺跡（井上・馬目1979）は、発掘調査が実施されたわけではなく、陸田造成の削平時に遺物が採集されている。その際に撮影された写真（斎藤1979）には、「日字文」が彫刻された「小野型」の石剣と「大洞C2式古段階」の壺形土器が並ぶ。また、ひたちなか市柳沢遺跡（佐藤・井上1972）では、「小野型」と推



括弧内は原報告（清水1920）の標記番号

第95図 十王堂遺跡の石剣と土器



第96図 泉坂下遺跡の土器

定される頭部破片を転用した石錘が「大洞C2式新段階」の住居跡床面から出土したことが報告されていた。この住居跡は、一辺が4m前後の不整形であり、泉坂下遺跡や大近平遺跡、宮脇A遺跡などで調査された晩期前葉の住居跡が円形・楕円形であったのに対して、形態を全く異にする。いずれにしても、共伴と認めるには至らない事例であった。

泉坂下遺跡の第27トレンチで検出され第4号掘立柱建物跡（SB4）として記載された2つの土坑「SB-P1」「SB-P2」について再検討した結果、これらは、掘り込まれた層序からも覆土中から出土した遺物からも、「平安時代」ではなく、縄文時代晩期中葉「大洞C2式」であることが明らかとなった。「SB-P1」には、「日字文」が彫刻された石剣の胴-基部（第94図4）と「大洞C2式新段階」の小型深鉢形土器（1）が共伴する。「SB-P2」からは、「日字文」が彫刻された石剣の頭-胴部（5）と完形の固定式砥石（4）が出土しており、2基の土坑が同

一の掘立柱建物の柱穴であることを前提として、これも「大洞C2式新段階」に位置付けられることになる。石剣の石材は粘板岩。胴部の断面形状はレンズ状で、胴部と比較して基部の幅は小さい。頭部形状の有段と「I字文」による文様構成は、典型的な「小野II型」である。なお、「SB-P2」から出土した小型の基部(6)については、断面形状が半円形に近く、表面が擦痕をほとんど残さないような研磨の状態であるのに対して、裏面には擦痕が明瞭であることから、破損した石棒の再加工作品と観察している。

大洞A式 日立市十王堂遺跡(清水2010)の第214号土坑は、石棒の未成品(第95図1・2)が「大洞A2式」(3・4)に伴う。石材は「千枚岩」(1)、「緑色片岩」(2)と記載されており、「千枚岩」は粘板岩としても、「緑色片岩」が利用されているらしい。敲打段階と研磨段階の未成品である。ともに頭部が作出され、尖頭の形状が特徴的であるが、未成品であるため端部が切断される前の形状であるのかもしれない。把頭部としては膨らみが小さく、両頭形の基頭部ではないかとも考えている。茨城県北部の太平洋沿岸の地域において「大洞A式」にも石棒製作が継続したことは確実であっても、成品が伴う事例は確認できていないのが現状である。泉坂下遺跡にも「大洞A式」(第96図)が出土しているが、これに伴う石棒は抽出できていない。「小野型」が継続するのかもしれないが、確実な事例を待ちたい。

おわりに

「凝灰岩の石剣」(鈴木2020)には、やはり石棒型式の名称を与えておきたい。発掘調査で検出されて頭部に文様が彫刻されているのは泉坂下遺跡の1点のみであることから、これを「泉坂下型」と呼ぶことにする。頭部形状が「内野型」や「諏訪木型」に共通することは年代的な位置付けに有効であっても、「内野型」が粘板岩で製作された細形石棒であるのに対して「泉坂下型」は石剣である。「諏訪木型」は、石剣ではあるが、緑色片岩など三波川変成岩で製作され、頭部の彫刻文様が全く異なる。

茨城県北部における縄文時代晩期の石棒を、「泉坂下型」-「小山台型」-「小野型」の変遷として、以下に概括する。

泉坂下型 「大洞B式」に伴うと推定される。久慈川・那珂川流域を中心に分布する。石材は専ら凝灰岩で、器種は単頭形の石剣のみである。研磨段階には可動式砥石が使用されたと推定される。頭部には「入組み文系列」の文様が彫刻される。

小山台型 「大洞B・BC・C1式」に伴う。「大洞B・BC式」には、日立変成岩が堆積する多賀山地の太平洋沿岸域に製作遺跡が推定され、「大洞C1式」には、久慈川流域にも製作遺跡が認められる。石材は粘板岩の他に、クロリトイド片岩、千枚岩、緑色片岩、角閃岩など多くが利用されており、器種は単頭形の石剣のみが確認できる。頭部の形状には、長幅比の大きな長頭形がある。頭部に彫刻された文様は、「入組み文系列」「対向三角文系列」の他に、「杵状文系列」(第89図8、第91図2)と呼ぶものがある。「成興野型」の文様構成を祖形として、「入組み文系列」は杵内の彫刻文様を、「対向三角文系列」は杵外の彫刻文様を主体とするのに対して、「杵状文系列」は、杵により区画された文様構成を簡略化しながら継承する。これら3つの系列の変遷を分析することで、「小山台型」は細別に向かう。

小野型 「大洞C2式」に伴う。多賀山地の太平洋沿岸域と久慈川流域に製作遺跡が確認されている。石材はほとんどが粘板岩。器種には石剣と石刀があり、ともに単頭形と両頭形を認める。頭部及び基部には「I字文」が彫刻される。頭部形状が有段になることを主な指標として「小野I・II型」に細別すれば、「小野II型」は「大洞C2式新段階」に伴う。

「泉坂下型」の成立は、それが単頭形の石剣であることや、頭部形状が「諏訪木型」に共通することから、関東地方西部「安行式」の地域で製作された石剣が祖形であった(鈴木2020)。泉坂下遺跡において「大洞BC式」に伴う緑色片岩の石剣は搬入品であり、「大洞B式」にも、これが供給されていたことを考えてよいであろう。「泉坂下型」は、近年から入手した凝灰岩を利用し、搬入品を模倣して製作されたのではなかろうか。その分布は局地的である。「小山台型」の製作が太平洋沿岸域で先行するのも、多賀山地の日立変成岩という近在の石材が利用されたことにある。これが関東地方東部という広範囲に分布することは、製作の数量が格段に増加していることを示す。太平洋沿岸域では、主に剥離段階から

敲打段階まで、久慈川流域では主に敲打段階から研磨段階までという、一連の製作工程を分担する生産の体制が確立するのは「大洞C1式」なのであろう。そこには、研磨段階への固定式砥石の導入も関わるはずである。

「小山台型」は、一部の「人組み文系列」に「泉坂下型」との繋がりを窺うことはできるが、「対向三角文系列」と「杵状文系列」については、「泉坂下型」とは繋がらない。「成興野型」「内野型」との関係が課題となる。

謝辞 資料の観察では猪俣俊哉氏・綿引逸雄氏(日立市郷土博物館)に、石材の鑑定では田切美智雄氏(茨城大学名誉教授)にご協力とご教示をいただいた。心より感謝を申し上げます。

註1 いわき市作B遺跡及び龍門寺遺跡の土器に報告された14C年代測定値(高島・バリノ2005)について、較正暦年代をバリノ・サーヴェイ株式会社よりご教示いただいた。第15表には、下記の暦年較正範囲から±0.0信頼率95%の領域を記載している。

遺跡名 Code. No.	較正暦年代 cal BP ±1σ 範囲 (信頼率)	較正暦年代 cal BP ±2σ 範囲 (信頼率)
作B遺跡 IAAA-30004	2343 - 2310 (58.6%) 2221 - 2215 (5.5%) 2190 - 2185 (4.2%)	2354 - 2301 (60.4%) 2240 - 2158 (35.0%)
龍門寺遺跡 IAAA-30005	2426 - 2381 (18.4%) 2374 - 2324 (49.9%)	2667 - 2659 (0.6%) 2609 - 2603 (0.4%) 2492 - 2305 (89.0%) 2229 - 2181 (5.4%)

註2 水戸市小田倉遺跡については、「大洞式系の精製土器は、大体安行式の土器と同量位の割合で発見された」(西村1979)と報告されている。

註3 報告書(柴井1997)文中には「縄文時代の住居跡は4軒(SI04・10・16・21)」、「住居跡規模表」という一覧表にはSI04「縄文：晩期」、10「縄文」、17「縄文」、22「縄文：後期安行II式」と記載されている。

註4 石材の同定は田切美智雄氏による。

註5 大近平遺跡の資料は全てを視察しているわけではない。石材の主体が粘板岩であることは確実であるが、その他の石材については記載がない。記載に誤りがあり(鈴木2020)、石材の実際は明らかでない。

註6 十王堂遺跡の資料は未だ観察できていない。

参考文献

- 荒井英樹 1997「宮脇A遺跡発掘調査報告書」(市報第47集) 日立市教育委員会
井上義安・馬日順一 1979「下の内遺跡」『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』茨城県 85-87頁
茨城県考古学協会 2016「茨城県縄文晩期遺跡地名表」『考古学からみる茨城の交易・交流』シンポジウム発表要旨 132-137頁
大賀 健 2015「大近平遺跡発掘調査報告書 一中西沢川尻塚(市道

640号)道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一」(市報第101集) 日立市教育委員会

笠井崇吉 2018「弥生時代を中心とした土器型式と14C年代測定 一福島県文化財センター白河館収蔵資料から一」『福島県文化財センター白河館研究紀要』2017 29-44頁

小林謙一 2019「縄文時代の晩年代講座」同成社

後藤俊一 2016「泉坂下遺跡V」(市報第26集) 常陸大宮市教育委員会

後藤信祐 1987「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究(上)(下)」『考古学研究』第33巻第3、4号 31-60頁、28-48頁

斎藤 忠 1979「茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代」茨城県佐藤次男・井上義安 1972「柳沢遺跡調査報告」那珂浜市文化財調査報告1 那珂浜市教育委員会・柳沢遺跡調査団

清水 哲 2010「十王堂遺跡 主要地方道日立笠間線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」(財情報告第332集) 茨城県教育財団

鈴木加津子 1993「真福寺小考 一安行式と亀ヶ岡式における編年と分布の推論一」『埼玉考古』第30号 15-62頁

鈴木公雄 1981「関東地方」『縄文土器大成』4(晩期) 講談社 144-149頁

鈴木正博 2008「日本先史土器図説」の「安行式(後半)」に学ぶ「亀ヶ岡式」一柳沢大田房遺跡の回顧から「薄織式」の制定まで一『茨城県考古学協会誌』第20号 45-69頁

鈴木素行 2002「ケンタウロスの落し物 一関東地方東部における縄文時代晩期の石棒について一」『優良考古』第24号 15-38頁

鈴木素行 2002「本覚遺跡への謎 一関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作遺跡について一」『茨城県考古学協会誌』第14号 89-118頁

鈴木素行 2005「本覚遺跡の研究 一関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作について一」(私家版)

鈴木素行 2011「泉坂下遺跡の研究 一人面付土器を伴う弥生時代中期の再葬墓群について」(私家版)

鈴木素行 2015「緑泥片岩の石剣 一関東地方西部における石剣の成立と展開一」『考古学集刊』第11号 37-57頁

鈴木素行 2016「泉坂下遺跡における石棒製作について」『泉坂下遺跡V』(市報第26集) 146-160頁

鈴木素行 2016「クシオンも落し物 一関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作について 一」『茨城県考古学協会誌』第28号 149-168頁

鈴木素行 2020「凝灰岩の石剣 一関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作について 一」『常陸大宮市史研究』第3号 107-118頁

高島好一・バリノ・サーヴェイ株式会社 2005「作B遺跡の調査概要と自然科学分析調査」『いわき市教育文化事業団研究紀要』13 15-33頁

西村正衛 1979「小田倉遺跡」『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』茨城県 87-88頁

能登 健 1989「晩期安行・前浦式土器型式」『縄文土器大観』4(後期晩期 続縄文) 小学館 329-332頁

バリノ・サーヴェイ株式会社 2016「出土炭化物の放射性炭素年代測定」『泉坂下遺跡V』(市報第26集) 139-145頁

藤本赤城 1977「那珂川下流の石器時代研究1」(私家版)

藤本赤城 1988「茨城県鹿嶋貝塚出土の晩期縄文土器」『考古学雑誌』第73巻第4号 1-36頁

山内幹夫 2018「縄文晩期の土器 一ふくしまの亀ヶ岡式一」(まほろん文化財講座 発表要旨、2018.9.1)

山内清男 1941「日本先史土器図説」第X輯 (1967年先史考古学会の再版による)

2 弥生時代 一第220号土坑発掘に伴う再葬墓以外の土坑に関する考察一

はじめに

第6次調査で新たに発見された第220号土坑は弥生時代の土坑であるが、これまで調査した再葬墓遺構とは全く異なる様相であった。再葬墓以外の土坑は過去の調査でも確認しており、一次葬墓の可能性等を考えていたが、情報が少なく明確な事は述べられなかった。

今回の調査の第220号土坑は、ほぼその全容を確認できたため、その成果をここで検討し、過去の調査結果を含めて再考察するものである。

1 第220号土坑の様相

1) 出土状況

第220号土坑の主な出土遺物(第97図)は、IV章に記載した通り、大きく下記の3つに分類される。

- ① 底面付近から出土の楕円形鉢1点
- ② 中層から出土の壺、高环、鉢、蓋の6点
- ③ その他覆土中に含まれる破片

①の土器は土坑底面付近から検出されたため、副葬品に類するものと考えられる。②は①の上層から出土しており、③の土器片(N9-第60図)の出土地点が①を埋め戻した土と②を埋め戻した土に分かれ、2段階で埋められている。そして、鉢と蓋2点は伏せた状態のまま土が完全には入り込まず空洞が残されていたことから、これが置かれた時点からほぼ動いておらず、当時の形のままを保っていることがわかる。

このような様相は、土坑底面に大型壺が埋置される再葬墓群とは明らかに異なる。そして丁寧な手順をもって埋められ、掘り返されてもない事から、廃棄場等の土坑墓以外の遺構である可能性や、一次葬墓である可能性は低い。

よって土坑墓であると考えるのが適当であろう。

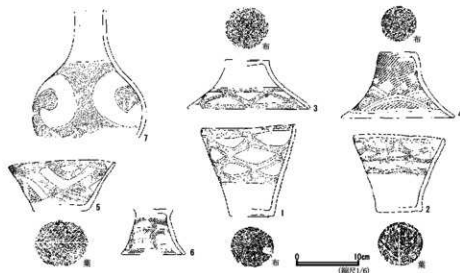
ii) 出土土器

前述の通り、①～③の土器は全てこの土坑の形成時に由来するものであり、同時期にこの場所に存在した土器であることが明確である。

これらの土器が共存する事はどのような意味を持つのだろうか。

②の鉢と蓋は、福島県いわき市の龍門寺遺跡出土の土器に類似していることから、この型式に該当すると考えられる。底部王痕も蓋2点と鉢1点が布目痕、鉢2点が木葉痕であり、龍門寺遺跡の出土土器における割合と矛盾しない。ただし胎土は異なっており、第220号土坑出土土器は土器5以外の土器に多量の骨針が含まれているが、龍門寺遺跡出土の土器にはほとんど骨針が確認できず、同程度の骨針を含む土器は1点のみであった。

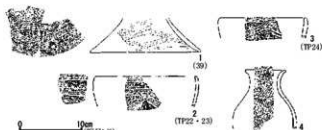
このことから、その1点が茨城県北地域からの搬入品であり、本土坑出土の土器は、「地元で作られた「龍門寺式」の土器」と考えるのが妥当であろう。「龍門寺式」の土器は泉坂下遺跡やこの近隣でも確認されており(第98～100図)、この地域の一般的な土器型式といえる。高环台部もまた、骨針が多く含まれていることや、常陸大宮市の中台遺跡からも類似の脚台部が確認されていることから、地元由来のものと考えられる。高環ではな



第97図 泉坂下遺跡第220号土坑の土器1～7

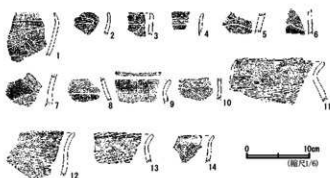


第98図 泉坂下遺跡第18トレンチ出土土器



括弧内は原報告（奥沢2016）の遺物番号

第99図 瑞龍（古墳群）遺跡出土土器



第100図 森戸遺跡出土土器
（斎藤・鈴木・西野1990より引用）

いが、北原遺跡の小型鉢にも類似の王字状文が確認できる。

また、胴部上半に渦巻状の磨消文が施された細頸の壺形土器は、「野沢Ⅱ式」（山内1932、杉原1936）に該当する土器であり、茨城県域では「格式」（藤本1983、佐藤・井上・宮田1978）とされるものである。

ただし、渦巻状文の壺形土器は「野沢Ⅱ式」にあたるが、第220号土坑からは野沢遺跡に見られる条痕をもつ鉢や壺形土器が、細片であっても共伴していない。条痕土器が伴わず、「龍門寺式」の鉢や蓋が共伴する点は、茨城県域の「格式」が出土する遺跡と共通している。したがって「野沢式」土器圏との共通点は渦巻状文の壺形土器のみであり、第220号土坑の出土土器は、「格式」の土器セットとして考えるべきだろう。

2 渦巻状土器の変遷

渦巻状文をもつ壺形土器は、泉坂下遺跡において再葬

墓の形成時期とされる中期前葉から継続してみられる土器である。このため、この土器を用いて再葬墓群から第220号土坑までの移り変わりについて考えてみる。

渦巻状文の土器は、東北南部から北関東にかけて広く分布する為、様々な編年の研究が行われている。その多くは弥生時代中期後半から後期にかけてであり、中期前葉のものは類別となる土器自体が少ない。しかし、泉坂下遺跡においては再葬墓群が営まれた中期前葉からの流れが重要であるため、どうか検討する必要があるだろう。

周辺地域で再葬墓出土とされている渦巻状文の壺形土器は、小野天神前遺跡や埴台遺跡などで確認されている。北原遺跡の壺型の壺形土器もこの系統であるが、例外として今回は検討対象から外す。第220号土坑の土器と同じ「格式」とされるものは、猪Ⅲa遺跡、北方遺跡などがあり、また龍門寺遺跡も同時期として考える。

これらを、渦巻状文の種類と大きさにより大別する。渦巻文は、中心から左右に分かれて相対するように巻き付く「相対渦文」と、渦の向きが同じ方向に巻いている「同相渦文」とに分け、さらに、壺の胴部の大きさを約30cmを境として、大型と小型に分け下記（表16）の通り種別を設定した。渦状の文様は「連結」の有無や、渦巻の「回転数」などでさらに細分化されているが（鈴木 1978、小玉2007・2019）、本稿では細分化するほど点数がないことから2種類にのみ分類し大まかな流れを見るものとする。

表16 渦巻状土器の分類

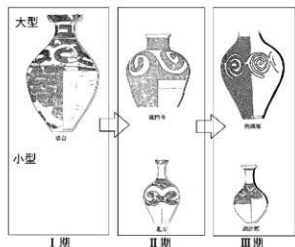
種別	大きさ	渦巻状文	類別
a	大型	相対渦文	小野天神前、埴台
b	大型	同相渦文	猪Ⅲa、龍門寺
c	小型	相対渦文	猪Ⅲa、北方
d	小型	同相渦文	出流原、足洗

a類は、再葬墓に使用される土器が多く該当する。この時期の生活社がほとんど確認できていないため、これが普遍的なあり方であるのか確認は得られないが、泉坂下遺跡をはじめ、再葬墓出土の土器にはその殆どに使用痕や風化の跡が見られ、生活用具として使用された土器と考えられるためここでは同一に考える。

b類は龍門寺遺跡と埴台遺跡で全体が復元できる形で

出土している。茨城県内では、猪Ⅲa遺跡出土土器(第103図8)が、破片ではあるがこれに当たるのではないかと推測する。分類c類はいわゆる「野沢Ⅱ式」、「猪式」として代表される渦巻状文の壺形土器がこれに当たる。

これらの分類を時系列で並べると(第101図)のようになると考える。



第101図 渦巻状文土器編年

最初の段階はa類のみが確認される。主に再葬墓でしか確認できない時期であり、ここでは仮にI期として設定する。小野天神前遺跡の土器や塚台遺跡のSE-27の土器(第102図)がこれにあたる。

次段階のII期が、「野沢Ⅱ式」又は「猪式」にあたる時期である。前述した通りb類とc類が確認できる段階で、分類aはほとんど見られなくなる。塚台遺跡においてはこの時期の土坑も確認でき、b類のみ、もしくはc類のみが出土する土坑がある。SE-38からa類とc類の両方出土しており、これはI期とII期の過渡期に当たるものである可能性がある。SE-27の渦巻状文の土器が底部木葉痕なのに対し、SE-38の渦巻状文の土器のa類が布目痕で、その他の遺構出土のb類、c類の渦巻状文の土器もほとんどが布目痕(1点は無文)であることから、SE-27の土器13のみがI段階早いことを示唆している。

この様に塚台遺跡は中期中葉にかけて継続的に土坑が営まれる。ただ今回の調査にあたり、いくつかの土器を確認した結果、頸部や胴部のあたりで意図的に打ち欠いた可能性がある土器が散見された。これは土器棺としての利用が示唆できるものであり、報告された土器すべてが再葬墓の土器とは限らない事は考慮する必要がある。

次段階のIII期は大型・小型のどちらも同相渦文になる時期で、流出原遺跡の土器(第103図)がこれに当たるのではないかと思われる。流出原遺跡は弥生時代中期中葉にかけての再葬墓遺跡として著名であるが、図の土器は単独出土として、墓坑群とは分けて「一時期新しくすべき」と報告されたもので(杉原1981)、これも再葬墓群の土器とは分けて考える必要があるだろう。

茨城県域では中期後葉の足洗式期に大型・小型のどちらも同相渦文になる。「猪式」との間を繋ぐ形式が存在する可能性があるが、大きさや文様が分かる良好な資料を見つけられなかった。

再葬墓の形成に時期差があることから、渦巻状文の変遷についても地域によって多少の前後はあるだろうが、大きな流れとしては、相対渦文の大型のみだったものが(I期、相対渦文の小型が増え大型と同相渦文に変化する時期(II期)になり、次に小型の土器も同相渦文となる時期(III期)へと移行していくと考えられる。

条痕文の壺型土器が多く共存するのはI期までであり、II期にはほとんど見られない。北方遺跡からは条痕文の土器とセットになっているが、発掘調査で出土したものではないため共存したか確かではない。共存したとするならII期の中でも古い時期に当たる可能性が高い。

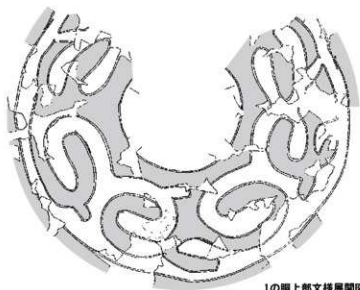
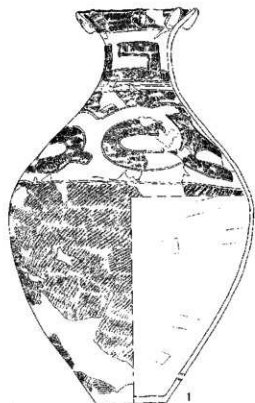
3 泉坂下遺跡の再葬墓遺構とその他の土坑

i) 再葬墓遺構

以上のような変遷において、泉坂下遺跡の第220号土坑と再葬墓群はどのように位置付けられるだろうか。

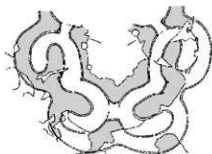
泉坂下遺跡の再葬墓出土で渦巻状の文様を持つ壺は、第4号土坑土器2と第6号土坑土器3が確認されている(第104図)。「泉坂下遺跡の研究」においてこれらは、女方遺跡で見られる幅広の凹線を描かれるものと、猪Ⅲa遺跡に見られる幅広の無文帯を沈線で区画する渦巻状の間に位置づけられており(鈴木2011)、I期に該当する。

更にその後の市教育委員会による確認調査でも、掘り上げていないため一部しか確認できていないが、第60号土坑土器1(第106図)に沈線で区画された渦巻状の文様を確認している。文様の全体像は確認できないが渦巻文であることは確かであり、相対渦文であると推定できる。更に、口縁部や施文が縄文である事など異なる点もあるが、頸部のコの字状のような文様形態との組み合わせ

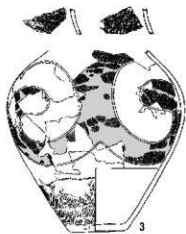


1の胴上部文様展開図

1~3 墳台遺跡



2の胴上部文様展開図



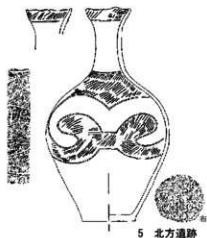
4 小野天神前遺跡



4の胴上部文様展開図

0 10cm
縮尺1/10

第102図 周辺地域の渦巻状文土器 (1) (各遺跡の報告書等より引用)



5 北方遺跡



5の胴部文様展開図

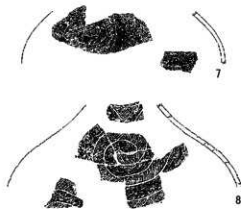


6

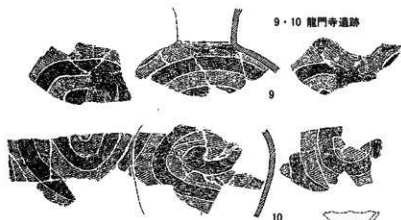


7の胴部文様展開図

6~8 猪Ⅲa遺跡



8



9・10 龍門寺遺跡

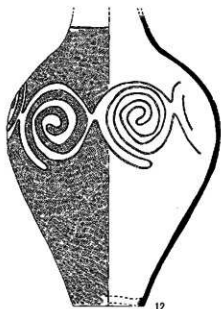
9

10

11・12 出流原遺跡



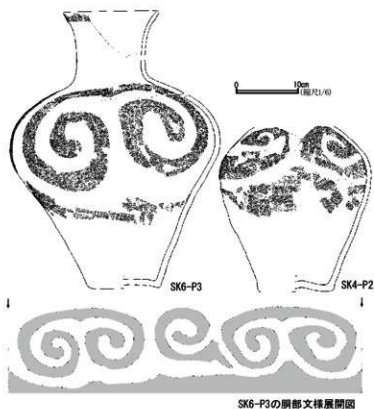
11



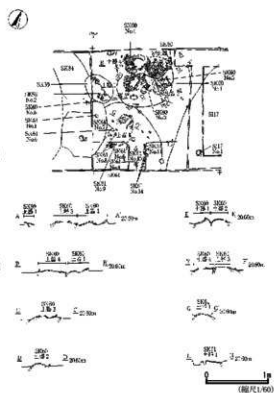
12



第103図 周辺地域の渦巻状文土器(2) (各遺跡の報告書等より引用)



第104図 泉坂下遺跡出土の渦巻状文土器



第105図 泉坂下遺跡第60号土坑遺物出土状況 (『泉坂下遺跡Ⅲ』より引用)



第106図 泉坂下遺跡第60号土坑土器1出土状況写真

せは、埴台遺跡のSE-27の13(第102図1)を想起させる。このことからa類となり1期に該当すると考えて間違いないだろう。

同じく未発掘の第61号土坑土器1と第164号土坑土器3も渦巻状文土器である可能性が高いが、第60号土坑のものより更に情報が少ないため、現時点での検討は控える。

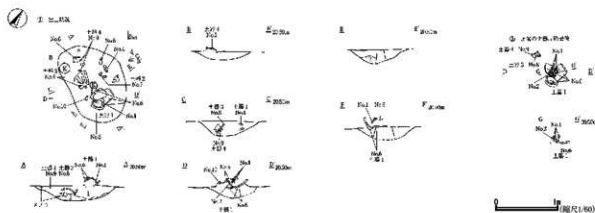
第4号土坑土器2は小型に分類されるが、これをc類とするよりはむしろ前期の古い様相を残す土器と考えるべきだろう。鈴木素行氏により第4号土坑土器2⇒第6号土坑土器3といった変遷が提示されており(鈴木2011)、第60号土坑土器1は沈線でご区画されていることから、更にこの後に続く型式となると推定される。何れも1期に該当すると考えられ、Ⅱ期以降にあたる再葬墓は確認できていない。

ii) 再葬墓以外の土坑

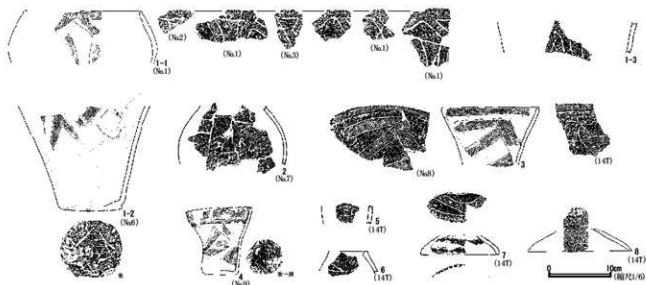
第220号土坑は、「野沢Ⅱ式」の土器と「龍門寺式」の土器が出土することから、Ⅱ期にあたると考えられるが、泉坂下遺跡内にはこの他に再葬墓以外の弥生時代の土坑が十数基礎確認されている。過去の報告書では一次葬墓の可能性も含めて報告してきたものである。今回、第220号土坑を検出した事を受け、改めてこれらを考察し直したい。

殆どの土坑は確認面で掘り止めているため全容を把握できていないが、第二次確認調査で発掘した第67号土坑(第107図)は比較的全体像が判明しているため、これを主に検討する。

出土土器は鉢と甗、筒型土器などで(第108図)、ヒトデ状の磨消縄文が主である。「龍門寺式」の系統であるが、こうした磨消縄文の土器は遺跡内の広範囲にわたっ



第107図 泉坂下遺跡第67号土坑遺物出土状況 (「泉坂下遺跡Ⅲ」より引用)



第108図 泉坂下遺跡第67号土坑出土土器 (「14T」は第14トレンチ)

て確認されているもので時期を決定することは困難であった。ただし第220号土坑と同じく大型の壺形土器及び条痕土器が出土していない点は特徴的である。

また、大型の壺形土器は出土しておらず、殆どの土器は破片であり破碎された様子であった。また、その破片も遺構覆土中に散らばっており、土器の検出位置に高低差がある。泉坂下遺跡は黒色土中の土坑であるため、遺構の始まりが検出し難く、遺構外として取り上げた遺物と遺構内の土器片が接合したものが何点かあった。第107図のセクション図は発掘の途中段階のものであり、実際の土坑上面はもっと上だと推定される。土器4の筒型土器も、上部の破片は下方で出土しているが、下半分が土器1より上に逆位で置かれていたことが記録されている。この様な不可思議な構造は第220号土坑と類似する。

また、第67号土坑には土器棺に該当しそうな土器が無いことから、直接土葬された土坑墓であり、遺構の形状から埋葬の姿形は屈葬であったと考えられる。

以上のことから、第220号土坑と第67号土坑はどちらも再葬墓ではない土坑墓であり、時期も同時期にあたる可能性が高い。さらに泉坂下遺跡には、第67号土坑以外にもこの時期に該当しそうな土坑がある。つまり、泉坂下遺跡において再葬墓は、Ⅰ期とⅡ期の間で終焉を迎え、その後こうした土坑墓が形成されるようになったと言えるのではないだろうか。

4 まとめ

以上の考察から、第220号土坑が再葬墓群より少し後の時代の土坑墓であることが判明し、これにより今までに泉坂下遺跡で確認した再葬墓以外の土坑にも同様のものが含まれている可能性が高いことが判った。

墳台遺跡や出流原遺跡の例を見てわかるように、他の再葬墓が確認される遺跡においても、出土する壺形土器が一律に再葬墓に利用されたと考え事はできないだろう。まして再葬墓とは異なる形態の土坑は、より慎重に検討する必要がある。

泉坂下遺跡を含めて他の再葬墓遺跡でも、再葬墓由来の土器とそれ以外の土器をふるい分け、改めて遺構の性格を考え直す必要があるだろう。

また、第220号土坑出土土器が、確実な共伴土器で

あり周辺地域の土器編年を考える上で極めて良好な資料である事も重要な点である。第220号土坑が営まれた弥生時代中期中葉において、泉坂下遺跡近隣の常陸太田市瑞龍遺跡や那珂市森戸遺跡を始め、周辺地域各所で「野沢式」の甕と「龍門寺式」の鉢や蓋が確認できる。これらは、第220号土坑の発掘成果により、茨城県域、つまり「格式」土器圏において代表的な土器セットであることが示された。

(中林香澄)

謝辞 本稿執筆にあたり、資料観察でお世話になりました。小澤重雄氏・小川貴行氏(茨城県立歴史館)、生田美奈氏(いわき市教育委員会)、佐藤 耕太郎氏(いわき市考古資料館)、戸村 勝司朗氏(多古町教育委員会)、高村 勇氏・中嶋 圭子氏(那珂市歴史民俗資料館)、山口 憲一氏(常陸太田市教育委員会)、並びにご指導いただきました鈴木 素行氏に感謝申し上げます。

参考文献

- 阿久津久 1977『学術調査報告書1 茨城県大宮町小野天神前遺跡(資料編)』茨城県歴史館
- 荒井世志紀 2006『志摩城跡-多古町遺跡群発掘調査報告書-』多古町教育委員会
- 荒井世志紀 2006『志摩城跡-ニノ台遺跡-』千葉県香取農林振興センター・多古町・香取都市文化財センター
- 猪狩忠雄 1985『龍門寺遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第11冊 福島県いわき建設事務所、福島県いわき市教育委員会
- 石川日出志 2004『茨城県北原遺跡再葬墓の研究』『明治大学人文科学研究紀要』54 1-45頁
- 植木雅弘 2017『土器から見た再葬墓の系譜と展開-泉坂下遺跡から見た弥生時代中期前半の様相-』『なんだっぺ泉坂下-再葬墓研究最前線-』常陸大宮市教育委員会 77-94頁
- 宇都宮市史編さん委員会 1979『宇都宮市史 第一巻 原始・古代編』
- 奥沢哲也 2016『瑞龍古墳群 一県立常陸太田特別支援学校施設整備事業地内埋蔵文化財調査報告書-』茨城県教育財団文化財調査報告第415集 茨城県教育財団
- 小玉秀成 2007『東関東地方における弥生時代中期後半の土器編年』『茨城県史研究』第91号 1-31頁
- 小玉秀成 2019『弥生時代中期後半における同心円文・渦文系土器群の広域編年』『福島考古』第61号 21-42頁
- 小玉秀成 2020『藤本武探集の大洗-一本松遺跡出土資料』『茨城県考古学協会誌』第32号 51-70頁
- 小林行雄・杉原荘介 1989『弥生式土器集成 本編』東京堂出版
- 後藤俊一 2013『泉坂下遺跡Ⅱ』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第16集 常陸大宮市教育委員会
- 後藤俊一 2014『泉坂下遺跡Ⅲ』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第21集 常陸大宮市教育委員会
- 後藤俊一 2015『泉坂下遺跡Ⅳ』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第23集 常陸大宮市教育委員会
- 後藤俊一 2016『泉坂下遺跡Ⅴ』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第26集 常陸大宮市教育委員会
- 斎藤弘道・鈴木美治・西野剛史 1990『那珂町森戸遺跡出土の縄文式・弥

- 生式土器及び古式土師器について」『年報』9(平成元年度) 茨城県教育財団 107-118頁
- 佐藤次男・井上義安・宮田 毅 1978「弥生土器—関東 東関東1」『考古学ジャーナル』146 15-22頁
- 設楽博己 2008「弥生再葬墓と社会」塙書房
- 杉原荘介 1936「下野国野沢及び陸前朝形国貝塚出土の弥生式土器について」『考古学』7 370-384頁
- 杉原荘介 1981「栃木県出流原における弥生時代の再葬墓群」明治大学文学部研究報告第8冊 明治大学文学部考古学研究室
- 鈴木正博 1978「赤沢覚書」『常陸台地』9 1-23頁
- 鈴木素行編 2011「泉坂下遺跡の研究」(私家版)
- 藤本赤城 1983「常陸那珂川下流の弥生土器群」(私家版)
- 山内清男 1932「下野国河内郡本村野沢の土器」『史前学雑誌』第4巻第1号 11-16頁

報告書抄録

ふりがな	いずみさかしたいせき なな
書名	泉坂下遺跡Ⅶ
副書名	保存整備事業に伴う第6次確認調査報告
巻次	
シリーズ名	茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第35集
編著者名	鈴木素行, 中林香澄, 久松正樹, 谷口陽子, 村串まどか, パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	常陸大宮市教育委員会
所在地	〒319-2292 茨城県常陸大宮市中富町3135番地の6
発行機関	常陸大宮市教育委員会
所在地	〒319-2292 茨城県常陸大宮市中富町3135番地の6
発行年月日	2021(令和3)年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いずみさかしたいせき 泉坂下遺跡	茨城県常陸大宮市泉坂下 910, 911番地	08225	大120	36° 32' 1"	140° 26' 5"	20190601 ～ 20190731	60	保存整備事業に伴う 第6次確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
泉坂下遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 2基 土坑 1基 遺物包含層	縄文式土器(前～晩期) 土製品(土偶, 耳飾り等) 石器(石鏃, 磨石, 砥石等) 石製品(石剣, 垂飾り等) 骨角器(髪針等) 動物遺存体(獣魚骨等) 植物遺存体(炭化種子等) その他(ハチの巣等)	縄文時代晩期の遺物包含層について土壌の水洗選別を実施した。検出された魚骨の一部が「アユ科」「サケ科？」と同定されている。赤色顔料を生成していた痕跡が石器や土器にも残されており、顔料の成分分析とともに、検出された高師小僧がその原料と成り得るのか検討を加えた。
	墓跡	弥生時代	土坑 1基	弥生式土器(中期)	
	不明	不明	土坑 15基		

仕様

【紙質】 本書は長期保存を考慮し、すべて中性紙を使用している。

表紙	レザック66白	215kg
見返し	上質紙	70.5kg
巻頭図版	マットコート	90kg
本扉・ごあいさつ・例言・目次・本文・抄録・奥付	書籍用紙クリーム	70kg

【印刷】

オフセット印刷(黒)

茨城県常陸大宮市埋蔵文化財発掘調査報告書第35集

泉坂下遺跡Ⅶ

— 保存整備事業に伴う第6次確認調査報告 —

発行日 2021(令和3)年3月30日

編著者 鈴木 素行

編集・発行 常陸大宮市教育委員会

所在地 茨城県常陸大宮市中富町3135番地の6
電話番号 0295-52-1111

印刷 コトブキ印刷株式会社